

特63
605

學 生 文 庫

第九編

新 訂 謠 曲

全 集 中

大町 桂 月 校 訂

東 京 至 誠 堂 發 兌

45. 1. 12

學生文庫に冕す

われ聞く、獨逸の中等程度の教育にては、力めて多く古典を課す。其意に曰く、古典の知識なければ、人物、學問、事業、共に淺薄なるを免れず。獨逸は新進の國なるが、學問歐米に冠たり、工業亦英國を壓せむとし、國富み、兵強きも、亦以ある哉。我日本は獨逸よりも猶一層新進の國なるが、一躍して世界一等國の列に入り、新興の勢、さすがの獨逸をして後に墮若たらしめむとす。而して我國は三千年の金甌無缺の歴史を有し、萬世一系の天皇を戴き、世界無類の國體を有す。即ち我國は世界最古の國なると共に、世界最新の國也。其新興の原因を討ぬるに、獨逸の識者が認めて中等教育に實施せる所は、猶一層早く我國の識者が認めて實施せる所也。然るにわれ近時讀書界の趨向を見る

に、徒に奇を趁ひ、新を求め、皮相なる自然主義にかぶれ、危険なる外來思想にかぶれ、よろづ物質的となり、早く生活の安樂を求め、本を忘れて末に趨り、終に淺薄なる人間となり了らむとす。邦家の前途、嗚呼危い哉。余茲に慨する所あり。學生文庫を編み、古典的名著を選び、初學の士の讀誦に充てむとす。益ありて毫も害なきは、余の深く期する所也。前途有爲の士、願くは之に由りて、精神上の好食物を得よ。修養に供せよ。人格の深厚を致せ。餘裕を得よ。清き娛樂を得よ。猶謹んで告ぐ、善く書を読め。書に讀まるること莫れ。

大町桂月

新訂 謡曲全集中卷目次

目次	1
海士	五六
鞍馬天狗	五七
定家	五八
咸陽宮	五九
東岸居士	六〇
龍田	六一
夜討曾我	六二
夕顔	六三
隅田川	六四
雲林院	六五
春日龍神	六六
船橋	六七

源氏供養	六八
花筐	六九
富士太鼓	七〇
皇帝	七一
通盛	七二
檜垣	七三
櫻川	七四
山姥	七五
氷室	七六
善界	七七
芭蕉	七八
百萬	七九
船辨慶	八〇
右近	八一
女郎花	八二

八三	關寺小町	四四六
八四	自然居士	四五二
八五	大會	四六〇
八六	三輪	四六三
八七	安宅	四六七
八八	東北	四七七
八九	蟬丸	四八一
九〇	猩猩	四八八
九一	白鬚	四八九
九二	盛久	四九四
九三	佛原	五〇一
九四	善知鳥	五〇五
九五	小鹽	五一〇
九六	邯鄲	五一五
九七	殺生石	五二〇

九八	野宮	五二五
九九	錦木	五三〇
一〇〇	唐船	五三六
一〇一	弓八幡	五四二
一〇二	鉢木	五四七
一〇三	羽衣	五五七
一〇四	道成寺	五六二
一〇五	龍虎	五六六
一〇六	蘆刈	五七一
一〇七	敦盛	五七九
一〇八	木賊	五八五
一〇九	葵上	五九一
一一〇	輪藏	五九五

新訂 謠曲全集 中卷

五十六海士

ワキの官人(ワキツレ)の官人(後)は(辨女) 出づるぞ名残三日月の。出づるぞ名残三日月の。都の西に急がん。ワキ「天地の明けし惠み久方の。天の兒屋根の御讓。ツレ(房前大臣)「房前の大匠とは我が事なり。偕もみづからが御母は。讃州志度の浦。房前と申す所にて。空しくなり給ひぬと。承りて候へば。急ぎ彼の所に下り。追善をもなさばやと思ひ候。ワキ、ワキツレ「習はぬ族に奈良坂や。かへり三笠の山隠す。春の霞ぞ恨めしき。三笠山。今ぞ榮えん此岸の。今ぞ榮えん此岸の。南の海に急がんと。行けば程

大町桂月新訂
丸岡桂

ワシチ 海人の(後)は(辨女) 官人
ワキツレ 房前大臣 官人

なく津の國の。こや日の本の始めなる。淡路のわたり末近く。鳴門の沖に音するは。泊定めぬ海士
 小舟。泊定めぬ海士小舟。ワキ、御急ぎ候ほどに。これははや讃州志度の浦に御著きにて御座
 候。又あれを見れば男女の差別は知らず一人來り候。彼の者を相待ち(三字今は「御待あ」此所のい
 はれを委しく御尋ねあらうするにて候。

シテ(海人の女)海士の刈る藻に栖む蟲にあらねども。われからぬらす秋かな。これは讃州志度の浦。
 寺近けれども心なき。あまのの里の海人にて候。げにや名に負ふ伊勢をの海士は夕波の。内外の山
 の月を待ち。濱荻の風に秋を知る。又須磨の海士人は。鹽木にも若木の櫻を折り持ちて。春を忘れ
 めたよりもあるに。此浦にては慰みも。名のみあまのの原にして。花のさく草もなし。何を海松藻
 刈らうよ。刈らでも運ぶ濱川の。刈らでも運ぶ濱川の。潮海かけて流れ蘆の。世を渡る業なれば。
 心なしたもいひがたき。あまのの里に歸らん。あまのの里に歸らん。

ワキ、調「いかにこれなる女。おことは此浦の海士にてあるか。シテ「さん候此浦のかづきの海士にて
 候。ワキ「かづきの海士ならば。あの水底の海松藻を刈りて參らせ候へ。シテ「痛はしや旅疲れ。飢

に望ませ給ふかや。我が住む里と申すに。かほど暖しき田舎の果に。新ふしぎや雲の上人を見るめ
 召され候へ。刈るまでもなし此海松藻を召され候へ。ワキ「いやいやさやうの爲にてはなし。あ
 の水底の月を御覽するに。海松藻繁りて障となれば。刈り除けよとの御誼なり。シテ「借は月の爲
 刈り除けよとの御誼かや。昔もさるためしあり。明珠をこの沖にて龍宮へ取られしを。誰かづき上
 げしも此浦の。地「天満つ月も満潮の。天満つ月も満潮の。海松藻をいざや刈らうよ。ワキ「調「暫、何
 と明珠をかづき上げしも此浦の海士にてあると申すか。シテ「さん候此浦の海士にて候。又あれ
 なる里をばあまのの里と申して。かの海士人の住み給ひし在所にて候。又これなる島をば新珠島
 と申し候(九字今は「唯は」)。かの珠を取り上げ始めて見せめしによつて。新しきたま島と書いて新珠島と
 申し候。ワキ「借其珠の名をば何と申しけるぞ。シテ「玉中に釋迦の係まします。何方より拜み奉
 れども同じ面なるによつて。面を向ふに背かずと書いて面向不背の珠と申し候。ワキ「調「かほどの
 寶を何とてか。漢朝よりもわたしけるぞ。シテ「調「今の大臣淡海公の御妹は。唐土高宗皇帝
 の後に立たせ給ふ。されば其御氏寺なればとて。興福寺へ三の寶をわたさる。華原馨。泗濱

石。面向不背の玉。二つの寶は京著し。明珠はこの沖にて龍宮へ取られしを。大臣御身をやつし此浦に下り給ひ。賤しき海士少女と契をこめ。一人の御子を擧ぐ。今の房前の大いじんこれなり。ツレやあいかにかに(三字今は)これこそ房前の大いじん。あらなつかしの海士人や猶猶語り候へ。シテあら何ともなや。今まではよその事とこそ思ひつるに。儲は御身の上にて御座候(今は「候ひけ」といへり)ぞやあら便なや候。

ツレ、臨みづから大臣の御子と生れ。恵み開けし藤の門。されども心にかゝる事は。此身残りて母知らず。ある時傍臣語りて曰く。忝くも御母は。讃州志度の浦房前の。あまり申せば恐ありとて言葉を残す。さては賤き海士の子。賤の女の腹に宿りけるぞや。地よしそれとても箒木に。よしそれとても箒木に。暫宿るも月の光。雨露の恩にあらずやと。思へば尋ね来りたり。あらなつかしの海士人やと。御涙を流し給へば。シテげに心なき海士衣。地さらでも濡らす我が袖を。重ねてしほれとや。忝な御事や。かゝる貴人の賤き海士の胎内に。宿り給ふも一世ならず。たとへば日月の。濼にうつりて光陰を増すごとくなり。われらも其あまの。子孫と答へ申さんは。事

も悪やわが君の。ゆかりに似たり紫の。藤咲く門の口を閉ぢて。いはじや水鳥の御主の名なば朽たすまじ。

ワキ、詞「とてももの事にかの珠をかづき上げしところを。御前にてそと學うで御目に懸け候へ。シテさらばそと學うで御目に懸け候へし。其時海士人申すやう。もし此珠を取りえたらば。此御子を世繼の御位になし給へと申ししかば。仔細あらじと領承し給ふ。扱は我が子ゆゑに捨てん命。露程も惜からじと。千尋の繩を腰につけ。もし此珠をとりえたらば。此繩を動かすべし。其時人人力を添へ。引き上げ給へと約束し。濼一つの利劍を抜き持つて。地彼の海底に飛び入れれば。空は一つに雲の浪。煙の浪を凌ぎつゝ。海漫漫と分け入りて。直下と見れども底もなく。邊も知らぬ海底に。そも神變はいさ知らず。取りえん事は不定なり。かくて龍宮に到りて。宮中を見ればその高さ。三十丈の玉塔に。かの珠を籠め置き。香花を供へ守護神に(今は「は」といへり)。入龍並み居たり。其外悪魚鰐の口。逃れ難しや我が命。さすが恩愛の古里の方ぞ戀ひしき。あの浪のあなたにぞ。我が子はあるらん。父大臣もおはすらん。さるにても此まいに。別れ果てなん悲しきよと。涙ぐみて立

ちしが。又思ひきりて手を合せ。南無や志度寺の観音薩埵の。力を合せてたび給へとて。大悲の利劍を額にあて。龍宮の中に飛び入れれば。左右へばつとぞ退いたりける。其隙に寶珠を盗み取つて。逃げんとすれば。守護神追つかく。かねて計みし事なれば。持ちたる劍を取り直し。乳の下をかききり。玉を押しこめ。劍を捨てしぞ伏したりける。龍宮の習に死人を忌めば。あたりに近づく悪龍なし。約束の繩を動かせば。人人悦び引き上げたりけり。玉は知らず。海士人は海上に浮み出でたり。シテかくて浮みは出でたれども。悪龍の業と見えて。五體もつかす(四字讀には非)赤になりたり。珠も徒になり。主も空しくなりけるよと大臣歎き給ふ。其時息の下より申すやう。わが乳のあたりを御覽せとあり。げにも劍のあたりたる跡あり。其中より光明赫奕たる珠を取り出だす。偕こそ御身も約束のごとく。此浦の名によせて。房前ふさぎまの大臣とは申せ。今は何をか包むべき。これこそ御身の母海十人の幽霊よ。地このよであと此筆の跡を御覽じて。不審をなさで用へや。今は歸らんあだ浪の。夜こそ契れ夢人の。あけてくやしき浦島が。親子の契朝潮の。浪の底に沈みけり。立つ浪の下に入りけり。(申入)

ワキ、詞「いかに申し上げ候。あまりにふしぎなる御事にて候程に。御手跡を披いて御覽せられうするにて候。大臣、偕は亡母の手跡かと開きて見れば。魂黄壤に去つて一十三年。骸を白沙に埋んで日月の算を經。冥路昏昏たり。われを用ふ人なし。君孝行たらばわが冥閻を助けよ。げにそれよりは十三年。地さては疑ふ所なしいさ甲はん此寺の。こころさしある手向草。花の蓮の妙經。いろいろの善をなし給ふ。いろいろの善をなし給ふ。寂寞無人聲。

後ジテ(龍文)「あらありがたの御用やな。此御經に引かれて。五逆の達多は天王記別を蒙り。八歳の龍女は南方無垢世界に生を受くる。なほなほ展讀し給ふべし。地深達罪福相。遍照於十方。シテ「微妙淨法身。具相三十二。地以八十種好。シテ「用莊嚴法身。地天人所戴。仰。龍神威恭敬。あらありがたの御經やな。(早舞)シテ「今此經の徳用にて。地今此經の徳用にて。天龍八部。人與非人。皆遙見彼。龍女成佛。偕こそ讚州志度寺と號し。毎年八講。朝暮の勤行。佛法繁昌の靈地となるも。この供養(「奉養」の字を當)と承る。

五十七 鞍馬天狗

ワキテ 大天狗(前は客僧) 千方 牛若丸
東谷の俗 狂言 能カ

シテ(客僧)「かやうに候者は。鞍馬の奥僧正が谷に住まひする客僧にて候。扱も當山において。花見の由承り及び候あひだ。立ち越えよそながら梢をも眺めばやと存じ候。狂言能カ「これは鞍馬の御寺に仕へ申す者にて候。借も當山において。毎年花見の御座候。殊に當年は一段と見事にて候。さる間東谷へ唯今文を持ちて参り候。いかに案内申し候。西谷より御使に参りて候。これに文の御座候御覽候へ。ワキ「何何西谷の花。今を盛とみえ(今は此間にて候)。など御音信にも與らざる。一筆啓上せしめ候。古歌に曰く。臨今日見すはくやしからまし花盛。調咲きも残らず散りも始めず。臨げに面白き歌の心。たとひ音信なくとも。木陸にてこそ待つべきに。地「花咲かば。告げんといひし山里の。告げんといひし山里の。使は來たり馬に鞍。鞍馬の山のうづ櫻(三字拾考)。手折葉をしるべにて。奥も迷はじ咲きつらく。木陸に並み居ていざいざ花

をながめん。

狂言「いかに申し候。あれに客僧の渡り候。これは近頃狼藉なる者にて候。追つ立てうするに候。ワキ「暫、さすがに此御座敷と申すに。源平兩家の童形たち各各御座候に。かやうな外人は然るべからず候。然れども又かやうに申せば人を選び申すに似て候あひだ。花をば明日こそ御覽候べけれ。まづまづ此所をば御立ちあらうするにて候。狂言「いやいやそれは御誕にて候へども。あの客僧を追つ立てうするにて候。ワキ「いや唯御立ちあらうするにて候。シテ(客僧)「遙に人家を見て花あれば即ち入る。論ぜず貴賤と親疎とを辨へぬをこそ。春の習と聞くものを。浮世に遠き鞍馬寺。本尊は大慈多門天。慈悲に洩れたる人人かな。牛若「臨げにや花の下の半日の客。月の前の一夜の友。問それさへ好はあるものを。あら痛はしや近う寄つて花御覽候へ。シテ「思ひよらずや松蟲の。音にだに立てぬ深山櫻を。御訪ひのありがたさよ此山に。牛若「ありとも誰か白雲の。立ち交はれれば知る人なし。シテ「誰をかも知る人にせん高砂の。牛若「松も昔の。シテ「友鳥の。地「御物笑の種時くや。言の葉茂き戀草の。老

をな隔てそ垣穂の梅。借こそ花の情なれ。花に三春の約あり。人に一夜を馴れ初めて。後いかならんうちつけに。心空に檜柴の。馴れはまさらで戀の優らん悔しさよ。

シテ、調「いかに申し候。唯今の兒たちは皆皆御歸り候に。何とて御一人これには御座候ぞ。牛若、調「さん候。唯今の兒たちは平家の一門。中にも安藝の守清盛が子どもたるにより。一寺の賞翫他山の覺え時の花たり。臨みづからも同山には候へども。よろづ面目もなき事どもにて。月にも花にも捨てられて候。シテ、調「あら痛はしや候。さすがに和上臈は。常樂腹には三男。毘沙門の沙の字をかたどり。御名をも沙那王殿とつけ申す。臨あら痛はしや御身を知れば。所も鞍馬の木蔭の月。地「見る人もなき山里の櫻花。よその散りなん後にこそ。咲かば咲くべきに。あら痛はしの御事や。松嵐花の跡訪ひて。松嵐花の跡訪ひて。雪と降り雨となる。哀稜雲に叫んで。鷹を断つとかや。心すこの氣色や。ゆふべを残す花のあたり。鐘は聞えて夜ぞ遅き。奥は鞍馬の山道の。花ぞ知るべなる。此方へ入らせ給へや。借も此程御伴して。見せ申しつる名所の。或る時は愛宕高雄の初櫻。比良や横河の遅櫻。吉野初瀬の名所な。見残す方もあらばこそ。

牛若、調「さるにてもいかなる人にましませば。われを慰め給ふらん。御名を名のりおはしませ。シテ「今は何をかつゝむべき。われ此山に年経たる大天狗はわれなり。地「君兵注の大事を傳へて。平家を滅し給ふべきなり。さも思し召されば。明日參會申すべし。さらばといひて客僧は。大僧正が谷を分けて。雲を踏んで飛んで行く。立つ雲を踏んで飛んでゆく。(中入)

牛若、調「借も沙那王がいでたちには。肌には薄花櫻のひとへに。顯紋紗の直垂の。露を結んで肩にかけ。白糸の腹巻白柄の長刀。地「たとへば天覽鬼神なりとも。さこそ嵐の山櫻。花やかなりけるいでたちかな。

後シテ(大天狗)「そもそもこれば。鞍馬の奥僧正が谷に年経て住める大天狗なり。地「まづ御供の天狗はたれたれぞ。筑紫には。シテ「彦山の豊前坊。地「四州には。シテ「白峰の相模坊。大山の伯耆坊。地「飯綱の三郎。富士太郎。大嶺の前鬼が一黨。葛城、高間。よそまでもあるまじ。邊土に於ては。シテ「比良。地「横川。シテ「如意が嶽。地「我慢高雄の峰に住んで。人の爲には愛宕山。霞とたなびき雲となつて。シテ「月は鞍馬の僧正が。地「谷に満ち満ち峰を動かし。嵐木枯瀧の音。天狗

倒しはおびたいしや。

シテ、聞「いかに沙那王殿。唯今小天狗を参らせて候に。稽古の際をばなんばう御見せ候ぞ。牛若「さ
ん候。唯今小天狗ども来り候程に。薄手をも斬りつけ。稽古の際を見せ申したくは候ひつれども。
師匠にや叱られ申さんと思ひ留りて候。シテ、聞「あらいとほしの人や。聞「さやうに師匠を大事に思
し召すにつき（今は「い」として。さる物語の候語つて聞かせ申し候べし。扱も（今は此間に「漢」高祖の臣下
張良といふもの。黄石公に此一大事を相傳す。或る時馬上にて行き逢ひたりしに。何とかした
りけん左の履を落し。いかに張良あの履取つてはかせよといふ。安からずは思ひしかども履を取
つてはかす。又其後以前の如く馬上にて行きあひたりしに。今度は左右の履を落し。やあいか
に張良あの履取つてはかせよといふ。聞「猶安からず。聞「思ひしかども。よく「此一大事を相傳
する上はと思ひ。落ちたる履をおつとつて。地「張良履を捧げつ。張良履を捧げつ。馬
の上なる石公に。はかせけるにぞ心解け（或は「運けか。古板本の直に）。兵法の奥儀を傳へける。シテ、其如
くに和上臈も。地「其如くに和上臈も。さも花やかなる御有様にて。妾も心も荒天狗を。師匠や坊

主と御賞既は。いかにも大事を残さず傳へて。平家を討たんと思し召すかや。優しのこころざし
やな。そもそも武略の譽の道。そもそも武略の譽の道。源平藤橘四家にもとり分き。彼の家の
水上は。清和天皇の後胤として。あらあら時節を考へ来るに。駭れる平家を西海に追つ下し。煙波
滄波の浮雲に飛行の自在を受けて。敵を平らげ會稽を雪がん御身と守るべし。これまでなりや御
暇申して立ち歸れば。牛若「袂にすがり給へば。げに名残あり。西海四海の合戦といふとも。影
身を離れず。弓矢の力を添へ守るべし。頼めや頼めと夕陰暗き。頼めや頼めと夕陰鞍馬の。楢に翔
つて失せにけり。

五十八 定家

古名 定家葛

ワキ 式子内親王の娘（前は皇の女）

ワキ（旅僧）「山より出づる北時雨。山より出づる北時雨。行くへや定めなかるらん。聞「これは北國方
より出でたる僧にて候。われ未だ都を見ず候ほどに。此度思ひ立ち都に上り候。道行「冬立つや。
旅の衣の朝まだき。旅の衣の朝まだき。雲も行きかふ遠近の。山又山を越え過ぎて。紅葉に残るな

がめまで。花の都に著きにけり。花の都に著きにけり。詞急き候ほどに。これははや都千本のあ
 たりにてありげに候。暫此あたりに息らはやと思ひ候。面白や頃は神無月十日餘。木木の梢
 も冬枯れて。枝に残の紅葉の色。所所の有様までも。都の氣色は一入の。眺め殊なるゆふべか
 な。あら笑止や。俄に時雨が降り來りて候。これに由ありげなる宿の候。立ち寄り時雨を霽らさ
 ばやと思ひ候。

シテ(里の女)詞「のうの御僧。其宿へは何とて(七字今は何しに其や)立ちより給ひ候ぞ。ワキ「唯今の時雨
 を霽らさん爲に立ち寄りてこそ候へ。シテ「それは時雨の亭とてよしある所なり。其心をも知るし
 めして立ち寄りせ給ふかと。思へばかやうに申すなり。ワキ「げにげにこれなる額を見れば。時雨
 の亭と書かれたり。をりから面白うこそ候へ。これはいかなる人の建て置かれたる所にて候ぞ。
 シテ「これは藤原の定家の卿のたておき給へる所なり。都のうちとは申しながら。心凄く時雨物
 哀なればとて此亭を建て置き。時雨の頃の年年は。此處にて歌をも詠じ給ひしとなり。古跡と
 いひ、をりからといひ。其心をも知るしめして。逆縁の法をも説き給ひ(今は「て」の字)か。の御菩提

を御弔ひあれと。勸め参らせん其爲に。これまで現はれ來りたり。ワキ「詞「借は藤原の定家の卿の
 建て置き給へる所かや。借借時雨を留むる宿の歌はいづれの言の葉やらん。シテ「いや何れとも定
 めなき。時雨の頃の年年なれば。分きてそれとは申し難し。さりながら時雨時を知ると云ふ心を。
 誰のなき世なりけり神無月。誰か誠より時雨初めけん。此ことがきに私の家にてと書かれ
 たらば。若し此歌をや申すべき。ワキ「詞「げにあはれなる言の葉かな。さしも時雨は國の。なき世
 に残る跡ながら。シテ「人はあだなる古事を。語れば今も假の世に。ワキ「他生の縁は朽ちもせぬ。
 これぞ一樹の蔭の宿。シテ「一河の流を汲みてだに。ワキ「心を知れと。シテ「をりからに。地「今降
 るも。宿は昔の時雨にて。宿は昔の時雨にて。心すみにし其人の。哀を知るも夢の世の。げに定め
 なや定家の。軒端の夕時雨。舊きに歸る涙かな。庭も籬もそれとなく。荒れのみ増さる露の。露
 の宿も枯れがれに。物凄きゆふべなりけり。物凄き夕なりけり。

シテ「詞「今日はこころざす日にて候ほどに。墓所へ参り候御参り候へかし。ワキ「それこそ出家の望に
 て候へ。やがて参らうするにて候。シテ「のうのうこれなる石塔御覽候へ。ワキ「ふしぎやなこれな

石塔を見れば。星霜古りたるに葛葛遺ひまどひ形も見えず候。これはいかなる人のしるしにて候ぞ。シテ「これは式子内親王の御墓にて候。又此葛をば定家葛と申し候。ワキ「あら面白や定家葛とは。いかやうなるいはれにて候ぞ御物語り候へ。シテ「式子内親王始は賀茂の齋の宮にそなはり給ひしが。程なく下り居させ給ひした。定家の卿忍び忍びの御契淺からず。其のち式子内親王程なく空しくなり給ひしに。定家の執心葛となつて御墓に這ひ纏ひ。互の苦み離れやらす。臨とも邪淫の妄執を(「をの字」)。御經を讀み申ひ給は。猶猶語り参らせ候はん。

地詠「忘れぬものをいにしへの。心の奥の信夫山。忍びて通ふ道芝の。露の世語よしぞなき。シテ「今は玉の緒絶えなば絶えねながらへば。地「忍ぶる事の弱るなる。心の秋の花薄。穂に出でそめし契とて。又枯れ枯れの中となりて。シテ「昔は物を思はざりし。地「後の心ぞ果しもなき。あはれ知れ。霜より霜に朽ち果て。世世にふりにし山藍の。袖の涙の身の昔。憂き戀せじと御祓せし。賀茂の齋の宮にしも。そなはり給ふ身なれども。神や受けずもなりにけん。人の契の色に出でけるぞ悲しき。つゝむとすれどあだし世の。あだなる中の名は洩れて。よその聞えは大方の。空恐るし

き日の光。雲の通路絶え果て。少女の姿留めえぬ。心ぞつらきもるともに。シテ「げにや歎くとも。戀ふとも逢は入道やなき。地「君葛城の嶺の雲と。詠じけん心まで。思へばかゝる執心の。定家葛と身はなりて。此御跡にいつとなく。離れもやらで葛紅葉の。色焦がれ纏はり。荆の髪も結ばれ。露霜に消えかへる妄執を助け給へや。

地詠「ふりにし事を聞くからに。今日も程なく吳織。怪しや御身誰やらん。シテ「誰とても。なき身のほては淺茅生の。霜に朽ちにし名ばかりは。残りても猶よしぞなき。地「よしや草葉の忍ぶとも。色には出でよ其名をも。シテ「今は包まじ。地「此上はわれこそ式子内親王。これまで見え来れども。眞の姿はかけるふの石に残す形だに。それとも見えず葛葛。苦しみを助け給へと。云ふかと思へて失せにけり。云ふかと思へて失せにけり。(申入)

ワキ詠「ゆふべも過ぐる月影に。ゆふべも過ぐる月影に。松風吹きて物凄き。草の蔭なる露の身を。思ひの玉の數數に。申ふ縁はありがたや。申ふ縁はありがたや。

後ジテ(式子内親王の遺)「夢かとも聞の現の宇津の山。月にもたどる葛の細道。昔は松風蘿月に詞を交

し。翠帳紅圍に枕を並べ。地「模様なりし情の末。シテ花も紅葉も散り散りに。地「朝の雲。シテゆふへの雨と。地「古事も今の身も。夢も。現も。幻も。ともに無常の世となりて跡も残らず。何なかなかの草の蔭。さらば律の宿ならで。外はつれなき定家葛。これ見給へや御僧。ワキ「あら痛はしの御有様やな。あら痛はしや。佛平等説如一味雨。随衆生性所受不同。シテ御覽せよ身はあだ涙の立居だに。なき跡までも苦しみの。定家葛に身を閉ぢられて。かゝる苦しみ隙なきところに。ありがたや。唯今讀誦し給ふは藥草喻品よのう。ワキ「なかなかなれや此妙典に。洩るゝ草木のあらざれば。執心の葛を掛け離れて。佛道ならせ給ふべし。シテ「あらありがたやげにも。げにもこれぞ妙なる法の教へ。ワキ「普賢露の恵みを受けて。シテ「二つもなく。ワキ「三つもなき。地「一味の御法の。雨のしたゞり皆濕ほひて。草木國土悉皆成佛の機を得ねれば。定家葛もかゝる涙も。ほろほると解けひろければ。よろよると足弱車の。火宅を出でたるありがたさよ。此報恩にいざさらば。ありし雲居の花の袖。昔を今に返すなる。其舞姫の小忌衣。女「おまの舞の。地「有様やな。(序ノ舞)

シテ「おまの舞の有様やな。地「おまなやおまはゆの有様やな。シテ「本より此身は。地「月の顔ばせも。シテ「曇りがちに。地「桂の蕪も。シテ「落ちぶるゝ涙の。地「露と消えてもつたなや葛の葉の。葛城の神姿。恥かしや由なや。夜の契の夢のうちにと。有りつる所に歸るは葛の葉の本の如く。這ひ纏はるゝや定家葛。這ひ纏はるゝや定家葛の。はかなくも形は埋もれて失せにけり。

五十九 咸陽宮

ワキシ 刑 大臣 花陽夫人
ワキツレ 大臣 宮 舞 人

シテ「奈始長「そもそも此咸陽宮と申すは。都のまはり一萬八千三百餘里。地「内裏は地より三里高く。雲を凌ぎて築きあげて。鐵の築土方四十里。シテ「又は高さも百餘丈。雲路を渡る雁も。雁門なくては過ぎがたし。地「内に三十六宮あり。眞珠の砂、瑠璃の砂、黄金の砂を地には敷き。シテ「長生不老の日月まで。雲を並べて懸し。地「帝の御殿は阿房宮。銅の柱三十六丈。シテ「東西九町。地「南北五町。シテ「五丈の幟矛。地「リウしやの(四字不詳)或(雲居。シテ「さながら天に。地「飄へり。地「登れば玉の階の。登れば玉の階の。金銀を磨きて輝けり。唯日月の影

を踏み。蒼天を渡る。こちして。おのおの肝を消すとかや。おのおの肝を消すとかや。
ワキ(荆軻)ワキヅレ(秦舞陽)「思ひたつ朝の雲の旅衣。落葉重なる嵐かな。ワキ山遠うしては雲行客の跡を埋み。ワキヅレ松高うしては風旅人の夢を破る。ワキ縦ひえん門(明の門考ふべし)は高くとも。ワキヅレ」思ひの末は。ワキ石に立つ。二人「やたけの心あらはれて。やたけの心あらはれて。遠山の雲に日を重れ。やうやう行けば名も高き。咸陽宮に著きにけり。咸陽宮に著きにけり。ワキ「急ぎ候ほどに。咸陽宮に著きて候。まづ奏聞申さうするにて候。いかに奏聞申し候。燕の國のかたはらに。荆軻秦舞陽と申す 兩人の者。高札の表に任せ。燕の指圖の箱。並びに樊於期が首を持ちてこれまで参内申して候。(此間に狂言(官人出て)ワキヅレ(大臣)「何と申すぞ。燕の國の民に。荆軻秦舞陽と申す 兩人の者。燕の指圖の箱。並びに樊於期が首を持ちて参内申(一字今語)したると申すか。かゝるめでたき事こそなけれ。やがて奏聞申し候べし。いかに奏聞申し候。燕の國の民に。荆軻秦舞陽と申す 兩人の者。燕の指圖の箱。並びに樊於期が首を持ちて唯今参内申して候。シテ「何と燕の國の傍に。荆軻秦舞陽と申す 兩人の者。指圖の箱。並びに樊於期が首を持ちて参内したると

申すか。ワキヅレ(大臣)「さん候。シテ「急いで参内させ候へ。ワキヅレ(大臣)「畏つて候。唯今の由を奏聞申してあれば。急いで参内させよとの宣旨にてあるぞ。さりながら御大法の如く。太刀刀を汝預かり候へ。狂言「畏つて候。いかに方方へ申し候。急いで御参内あれとの御事にて候さりながら。御大法の事にて候あひだ。面々の太刀刀を預かり申して参内させ申せとの御事にて候ぞ。太刀刀を賜はり候へ。ワキ「いかに秦舞陽。太刀刀を参らせよと承り候が。何と仕り候べき。ワキヅレ(巻)「御大法にて候は。唯参らせられ候へ。ワキ「さらば参らせうするにて候。(此間に狂言との)ワキ「荆軻は佩劍を解いて威儀をなし。節會の儀式に従ひて。雲上遙に見渡せば。ワキヅレ(巻)「金銀珠玉の御階を踏み。三里が間を登り行けば。(ワキの詞との書き方異様なり)ワキ「薄氷を踏むこちして。荆軻は既に登れども。ワキヅレ(巻)「跡に立たる秦舞陽。身體わなき。手を(二字「そのま)して。登りかたてぞ息らひける。ワキ「あゝ不覺なりとよ秦舞陽。燕の賤しき住まひにならつて。玉殿を踏む恐ろしさに。諸臆して上りかれけるか。ワキヅレ(巻)「それをなさのみ謀め給ひそ。其積礫に習つて。玉淵を窺はざるは。驪龍の蟠る所を知らず。地げに理とててんこく(四字不明。附)

は。さしも殿しき禁中に。えん門を解いて許しけり。えん門を解いて許しけり。
 ワキツレ(大臣)「帝はこれを聞こしめし。臨時の節會を執り行ひ。燕使の參内を待ち給ふ。ワキ舞陽荆
 軻は大床の。胡床に參著申しけり。ワキツレ(奏)「まづ秦舞陽進み出で。樊於期が首を皇帝の。
 上覽に供へ立ちのげば。ワキツレ(大臣)「帝は笑める御氣色。御心も解けて見え給ふ。ワキ「其時
 荆軻進みよつて。燕の指圖の箱の蓋を開き。上覽に供へ立ちのげば。ワキ「ふしぎやな箱の
 底に劍の影。氷の如く見えければ。燕既に立ち去り給はんとす。地「荆軻は期したる事なれば。御
 衣の袖にむんすと縋つて。劍を御胸にさし當て奉りけり。ツレ(花陽夫人)「淺ましや聖人人にまみえ
 すとは。今此時にてありけるぞや。あら淺まし御事やな。
 シテ「いかに荆軻。秦舞陽も確に聞け。われ三千人の后を持つ。其中に花陽夫人とて琴の上手あり。
 されば毎日怠る事なし。然れども今日は汝等が參内により。未だ琴の音を聞かず。殊更今は最期
 なれば。片時の暇をくれよ。かの琴の音を聞いて。黄泉の道をも免れうすると思ふはいかに(此一
 傳なるべし。黄泉の道を免ると)。ワキ「いかに秦舞陽。さてなにとあるべきぞ。ワキツレ(奏)「これ程まで手籠め

申す上は。片時の御暇ならば參らせられ候へ。ワキ「さらば片時の御暇を參らせうするにて候。
 シテ「いかに花陽夫人。急ぎ秘曲を奏し給へ。
 ツレ「さらば秘曲を奏すべし。もとより妙なる琴の音に。飛ぶ鳥も地に落ち武士も。和ぐ程の秘曲
 なれば。ましてや今はの玉の緒琴。さこそは御手も盡されけめ。地「花の春の琴曲は。花風樂に
 柳花苑。柳花苑の鶯は。同じ曲の轉。月の前の調は。夜寒を告ぐる秋風。雲居に渡れる鷹。
 琴柱に落つる聲々も。涙の露の玉章。たまさかに。たまさかに。人はよも白糸の。調を改めて。君
 聞けや君聞けや。七尺の屏風は。躍らば越えつべし。羅毅の袂をも。引かばなどか切れざらん。謀
 臣は有無に酔へり。群臣は聖人の御助けと。おし返し。おし返し。二三返の琴の音を。君は聞こし
 めさるれども。荆軻は聞き知らで。唯緩々と侵されて。眠れるが如くなり。時移る時移ると。
 秘曲度重なれば。シテ「荆軻が控へたる。地「御衣の袖を引つ切つて。屏風を躍り越え。電光
 の激するよそほひ。敵の白玉盤に落ちて。欄干を走るこゝちして。銅の御柱に立ち隠れさせ給
 ひしかば。ワキ「荆軻は怒をなして。地「劍を帝に投げ奉れば。番の醫師は。薬の袋を劍に合せ

て投げ止めければ。シテ帝亦 劍を抜いて。地帝亦 劍を抜いて。荊軻をも秦舞陽をも。八つ裂きに裂き給ひ。忽に失ひおはしまし。其後燕丹太子をも。程なく滅し秦の御代萬歳を保ち給ふこと。唯これ後の琴の秘曲。ありがたかりけるためしかな。

六十 東岸居士

シテ 東岸居士
ワキ 旅人

ワキ(旅人)「これは遠國より出でたる(六字今方)者にて候。われ此程は都に上り。かなたこなたを一見仕りて候。又今日は清水寺へ参らばやと存じ候。
シテ(東岸居士)「松をさへ。皆櫻木に散りなして。花に聲ある嵐かな。ワキ「これは承り及びたる東岸居士にて渡り候か。さて今日はいかやうなる 聽聞の御座候ぞ。シテ「こと新しき問ひ事かな。聽聞といつば。萬事は皆目前の境界なれば。柳は緑花は紅。あら面白の春の氣色やな。ワキ「あら面白の答や候。さて此橋はいかなる人の架け給ひたる橋にて候ぞ。シテ「これは先師自然居士の。法界無縁の功力を以て。渡し給ひし橋なれば。今又かやうに勧むるなり。ワキ「さて

さて東岸西岸居士の。細里はいづくいかなる人の。父母を離れし御出家ぞや。シテ「問「むつかしの事を問ひ給ふや。もとより來たる所もなければ。出家といふべきいはれもなし。出家にあられば髪をも剃らず。衣を墨に染めもせず。唯おのづから道に入つて。ワキ「善を見て。シテ「進まず。ワキ「智を捨てしも。シテ「愚ならず。ワキ「をりにふれ。シテ「事に渡りて白川に。ワキ「架れる橋は。シテ「西。ワキ「東の。地「東岸西岸の柳の。髪は長く亂るゝとも。南枝北枝の梅の花。開くる法の一條に。渡らんための橋なれば。勧めに入りつゝ彼岸に到り給へや。ワキ「問「いかに申し候(今此何を。)又いつもの如く諷うて御聞かせ候へ。シテ「げにげにこれも狂言綺語を以て。讀佛轉法輪の眞の道にも入るなれば。人の心の花の曲。誰いざや諷はんこれとて。地「御法の舟の水馴棹。御法の船の水馴棹。皆彼岸に至らん。シテ「面白やこれも胡蝶の夢のうち。地「遊び戯れ舞ふとかや。シテ「鈔に又申さく。あらゆる所の佛法の趣。地「箇箇縁生の道直に。今に絶えせぬ跡とかや。シテ「但し正像既にくれて。末法に生を受けたり。地「かるがゆるに春過ぎ秋來れども。進み難きは出離の道。シテ「花を惜み月を見ても。起り易きは妄念なり。地「罪障の山にはいつとなく。煩

惱の雲あつうして。佛日の光晴れ難く。シテ生死の海にはとこしなへに。無明の波荒くして。眞如の月宿らす。生を受くるに任せて。苦に苦しみを受け重ね。死に歸るに随つて。闇より闇きに赴く。六道の巷には迷はぬ所もなく。生死の扉には宿らぬすみかもなし。生死の轉變をば夢とやいはん又現とやせん。これら有といはんとすれば。雲と昇り煙と消えて。後其跡を留むべくもなし。無といはんとすれば。又恩愛の中。心留まつて。腸を断ち。魂を動かさずと云ふ事なし。かの芝蘭の契の袂には。屍をば愁嘆の焔に焦がせども。紅蓮大紅蓮の氷をば終に解かす事なし。鶯の衾の下に眼をば慈悲の涙に濕ほせども。焦熱大焦熱の焔をば終に示す事なし。かゝる拙き身を持ちて。シテ殺生偷盜邪淫は。地身に於て作る罪なり。妄語綺語。惡口兩舌は。口にて作る罪なり。貪欲瞋恚愚癡は又。心に於て絶えせず。御法の船の水馴棹。皆彼岸に至らん。ワキ「聞」とてももの事に羯鼓を打つて御みせ候へ。シテ面白や松吹く風颯颯として。波の聲茫茫たり。ワキ「聞」所は名に負ふ洛陽の。ながめも近き白河の。シテ浪の鼓や風の鯨。ワキ「聞」うち連れ行くや橋の上。シテ男女の往来。ワキ「貴賤上下の。シテ袖を連れて玉衣の。さあさぬ沈み浮き波の。

鯨入撥打ち連れて。百千鳥。シテ百千鳥轉る春は物毎に。改まれども我ぞ古り行く。シテ「行くは白河。地」行くは白河の。橋を隔て、向ひは。シテ東岸。地「こなたは。シテ西岸。地」さざ波は。シテ鯨。地「うづ波は。シテ鼓。地」いづれもいづれも極樂の。歌舞の菩薩の御法とは。聞きは知らずや旅人よ。旅人よ。あら面白や。シテ「お南無三寶。地」げに太鼓も羯鼓も笛箏築。絃管ともに極樂の(今は此間に「お」を添へて讀ふ。「の」の音を引きて其音居を別音の如く讀ひしを菩薩の上に)菩薩の遊と聞くものな。シテ「何と唯。地」何と唯。雪や氷と隔つらん。眞法皆一如なる。實相の門に入らうよ。實相の門に入らうよ。

六十一 龍 田

シテ龍田(龍田は巫女)ワキ 旅 俗

ワキ(旅俗)「教の道も秋津國。教の道も秋津國。教ある法を修めん(此教何れは佛。或は土俗の始の如)。聞」れば六十餘州に御經を修むる聖にて候。われ此程は南都に候ひて。靈佛靈社残りなく拜み廻りて候。又これより龍田越にかゝり。河内の國へと急ぎ候。道行旅古き名の。奈良の都を立ち出で。

奈良の都を立ち出で。有明残る雲まの(三字古板本文字疑はし。「聖日の」と書きて「しのめの」と誤りし。西の大寺をよそに見て。はや暮れ過ぎし秋篠や。外山の紅葉名に残る。龍田の川に。著きにけり。龍田の川に著きにけり。同急ぎ候ほどに。こればはや龍田川に著きて候。此川を渡り明神に参らばやと思ひ候。

シテ(巫女)詞「のうのう御僧(今は四字)。其川な渡り給ひ申すべき事の候。ワキ「ふしぎやな此川を渡り。龍田の明神にまゐり候ところに。何とてその川な渡りそとは承り候ぞ。シテ「さればこそ神に参り給ふも。神慮に合はんためならずや。心もなくて渡り給は。龍神と人との中や絶えなん。よく案じて渡り給へ。ワキ「詞「げに今思ひ出だしたり。龍田川紅葉亂れて流るめり。渡らば錦中や絶えなんとの。臨古歌の心を思へとや。シテ「詞「なかなかの事此歌は。紅葉の水に散り浮きて。錦を張れる如くなれば。渡らば錦中や絶えなんとなり。それにつき猶猶深き心もあり。紅葉と申すは常社の神體。神の畏れもあるべければと。戒め給ふ心もあり。ワキ「詞「げにげにそれはさる事なれども。紅葉の頃も時過ぎて。川の面も薄氷にて。立つ波までも見えぬなり。許させ給へ渡り候。

て行かん。シテ「詞「いやいや猶も御料あり。氷にも又中絶えんとの。其戒めもあるものを。ワキ「詞「ふしぎや紅葉の錦ならで。氷にも又中絶えんとの。いはればいかななる事やらん。シテ「詞「紅葉の歌は帝の御製。又其後家隆の歌に。龍田川紅葉を閉づる薄氷。詞「渡らばそれも中や絶えなんとの。臨重ねてかやうに詠みたれば。必ず紅葉に限るべからず。氷にも。中絶ゆる名の龍田川。中絶ゆる名の龍田川。錦織りかく神無月の。冬川になるまでも。紅葉を閉づる薄氷を。情なや中絶えて。渡らん人は心なや。さなきだに危きは薄氷を踏む理の。たとへも今に知られたり。たとへも今に知られたり。

ワキ「詞「(今は此句の上)「御身はいかなる人にてわたり候ぞ。シテ「これは巫にて候。明神へ御参り候は御道しるべ申し候べし。ワキ「あら嬉しや御供申し。宮廻り申さうするにて候。シテ「これこそ龍田の明神にて御入り候へよくよく御拜み候へ。ワキ「ふしぎやな頃は霜降月なれば。木木の梢も冬枯れて。景色寂しき社頭の御垣に。盛なる紅葉一本見えたり。これは御神木にて候か。シテ「さん候當國三輪の明神の神木は杉なり。當社は紅色にめで給ふにより。紅葉を神木とあがめ候。

参らせ候。ワキ「ありがたやわれ國國を廻り。けふは又此御神に参る事のありがたさよ。蓋和光
 同塵は結縁の始。八相成道は利物の終。地「下紅葉塵に交はる神慮。和光の影の色添へて。わ
 れらを守り給へや。ことさらに此度は。ことさらに此度は。幣取りあへぬなりなるに。心して吹
 け嵐。紅葉を幣の神慮。神さび心も澄み渡る。龍田の嶺はほのかにて。川音も猶返えまざる夕
 暮。いざ宮廻り始めんとて。名に負ふ龍田川（今は「山」と誦へり。次句に「かざし」といふ。同じかざしの紅葉を。
 とりどりに少女子が。裳裾をはへて袖をかざし。運ぶ歩みの數數に。度重なると見る程に。ふしぎ
 やな今までは。ただ巫と見えつるが。われは實は此神の。龍田姫はわれなりと。名のりもあへず
 御身より光を放ちて。くれなるの袖をうちかづき。社壇の扉を押し開き。御殿にいらせ給ひけり。
 御殿にいらせ給ひけり。（申入）
 ワキ「神の御前に通夜をして。神の御前に通夜をして。ありつる告を待たんとて。袖をかたしき臥
 しにけり。袖をかたしき臥しにけり。
 後ジテ（龍田姫）神は非禮を受け給はず。水上清しや龍田の川。地「御殿しきりに鳴動して。宜禰が鼓

も聲聲に。シテ「有明の月。燈火の光。地「和光同塵おのづから。光も朱の玉垣赫きて。あらた
 に御神體現れたり。シテ「われ初初よりこの方。此秋津洲（一字諸曲の實習にて「す」に地を占めて。御代
 なまもりの御矛を守護し。紅葉の色も八葉の葉。即ち矛の刃先なるべし。劍の驗僧の法味に引かれ
 て。夜半の神燈明なり。
 地「「そもそも瀧祭の御神とは即ち當社の御事なり。シテ「昔天祖の詔。地「未明なる御國と
 かや。シテ「然れば當國寶山に至り。地「天地治まる御代のためし。民安全に豊なるも。偏に當社
 の御故なり。シテ「梢の秋の四方の色。地「千秋の御影目前たり。年毎にもみぢ葉ながる（原書「す」に作
 は「す」なり。龍田川。湊や秋のとまりなる。山も動ぜず。海邊も浪靜にて。樂しみのみの秋の色。名
 こそ龍田の山風も靜なりけり。然れば代代の歌人も。心を染めてもみぢ葉の。龍田の山の朝霞。
 春は紅葉にあらねども。唯紅色にめで給へば。けさよりは龍田の櫻。色ぞ濃き。夕日や花の時雨
 なるらんと。詠みしもくれなるに心を。染めし詠歌なり。シテ「神なみの。御室の岸やくづるらん。
 地「龍田の川の水は濁るとも。和光の影は明けき。眞如の月は猶照るや。龍田川紅葉亂れし跡なれ

や。いにしへは錦のみ。今は氷の下紅葉。あらうつくしや色色の。紅葉製の薄氷。渡らば紅葉も氷も重ねて中絶ゆべしや。いかで今は渡らん。

シテ、謡「さる程に夜神樂の。地「さる程に夜神樂の。時移り事去りて。宜禰が鼓も數至りて。月も霜も白和幣。振り上げて聲澄むや。シテ、謹上。地「再拜。(神樂)

シテ、謡「久かたの月も落ち来る瀧祭。地「波の龍田の。シテ、神の御前に。地「神の御前に散るはもみぢ葉。シテ、即ち神の幣。地「龍田の山風の時雨降る音は。シテ、颯颯の鈴の聲。地「立つや川波は。シテ、それぞ白木綿。地「神風松風吹き亂れ吹き亂れ。もみぢ葉散り飛ぶ木綿附鳥の。御被も幣も舞へる小忌衣。謹上再拜。再拜再拜と。山河草木國土治まりて。神はあがらせ給ひけり。

六十二 夜討會我

古名 討入會我

シテ 五郎時段
ツレ 五郎三郎
ツレ 五郎丸
ツレ 後ツレ
十郎時成
東王
立業 歌兵

十郎、五郎、團三郎、東王、謡「其名も高き富士の嶺の。其名も高き富士の嶺の。御狩にいさや出でうよ。十郎、問

「これは會我の十郎祐成にて候。さてもわが君東入箇國の諸侍を集め。富士の牧狩をさせられ候あひだ。われら兄弟も人並にまかり出で。唯今富士の裾野へと急ぎ候。四人けふ出でいづ還るべき古里と。思へば猶もいとしく。名残を残すわが宿の。名残を残すわが宿の。垣れの雪は卵の花の。咲き散る花の名残ぞと。わが足柄や遠かりし。富士の裾野に着きにけり。富士の裾野に著きにけり。十郎、問「急ぎ候ほどに。これははや富士の裾野にて候。いかに時致。然るべき所に幕を御打たせ候へ。五郎、畏つて候。十郎、いかに時致。今に始めぬ御事なれども。我が君の御威光のめでたさは候。打ち並べたる幕の内。目を驚かしたるありさまにて候。かほどに多き人の申に。われら兄弟が幕の内ほど物さびたるは候まじ。五郎、さん候今に始めぬ御事(今は「君の)にて候。さてかのあらまじは候(此句古坂橋本改)。十郎、あらまじとは何事にて候ぞ。五郎、あら御情なや候(一字今は)。われらは片時も忘るゝ事はなく候。かの祐經が事候よ。十郎、げにげに某も忘るゝことばなく候。さていつをいつまでながら候べき。ともかくも然るべきやうに御定め候へ。五郎、御謎の如く。いつをいつとか定め候べき。今夜夜討がけに彼の者を討たうするにて候。十郎、そ

れが然るべう候。さらばそれに御定め候へ。や。はたと(三半句)思ひ出だしたる事の候。われら故郷を出でし時。母にかくとも申さず候ほどに。御歎きあるべき事。これのみこゝろに懸り候あひだ。鬼王が團三郎か。兄弟に一人形見の物を持たせ。古里へ返さうするにて候。五郎げにこれは尤にて候さりながら。一人歸れと申し候は。定めてとかく申し候へし。唯二人共に御返しあれかしと存じ候。十郎もつともにて候。さらば二人共に此方へ召し(二字今は「歸れ」と)候へ。五郎畏つて候。いかに團三郎。鬼王。御前(今は「おにわう」)へ参り候へ。團三郎畏つて候。五郎團三郎兄弟これへ参りて候。十郎いかに團三郎。鬼王も確に聞け。汝兄弟に申すべき事を承引すべきか。又承引すまじきかまつすぐに申し候へ。團三郎これは今めかしき御説にて候。何事にて候へ御意を背く事はあるまじく候。十郎あらうれしや。さては承引すべきか。團三郎畏つて候。何事も御説をば昔き申すまじく候。十郎此上は委しく語り候へし。さてはわれらが親の敵の事。かの祐經を今夜討かけに討つべきなり。兄弟空しくなるならば。古里の母歎き給はん事。餘りに痛はしく候ほどに。形見の品品を持ちて。二人ながら古里へ歸り候へ。團三郎これは思ひもよらぬ御説にて

候ものかな。御意も御意にこそより候へ。此年月奉公申し候も。此御大事にまつさきかけて討死仕るべきためにてこそ候へ。何と御説候とも。此義に於いてはまかり歸るまじく候。鬼王さやうにてはなきか。鬼王なかなかの事もつともにて候。まかり歸る事はあるまじく候。十郎何と歸るまじいと申すか。團三郎ふつつとまかり歸るまじく候。十郎これは不思議なる事を申すものかな。さてこそ以前に詞を固めて候に。さてはふつつと歸るまじきか。團三郎さん候。十郎汝は不思議なる者にて候。のう五郎殿あれを御返し候へ。五郎畏つて候。やあ何とてまかり歸るまじいと申すぞ。さやうに申さうすると思しめしてこそ。始より詞を固めて仰せられ候に。何とて歸るまじいと申すぞ。しかと歸るまじきか。鬼王まづ畏つたると御申し候へ。團三郎畏つて候。五郎しかと歸らうするか。團三郎まかり歸らうするにて候。五郎お、それにてこそ候へ。まかり歸らうすると申し候。五郎何と歸らうすると申す。團三郎さん候。いかに鬼王に申し候。鬼王「何事にて候ぞ。團三郎」さて何と仕り候べき。まかり歸れば本意に非ず。歸られば御意に背く。とかく進退こゝに谷まつて候。鬼王仰せの如く。まかり歸れば本意に非ず。又歸られば御意に背

く。われらも是非を辨へず候。但しきつと案じ出だしたる事の候。いづくにても命を捨つるこそ肝
 要にて候へ。恐れながら團三郎殿とこれにて刺し違へ候へし。團三郎にげにげにいづくにても命を
 捨つるこそ肝要なれ。いざさらば刺し違へう。血もつともにて候。十郎（今は此上に「あはれ」を添へて読よ。）暫（今は此上に「あはれ」を添へて読よ。）これ
 は何としたる事を仕り候ぞ。（今以上二句を五郎の詞とす。）やあ兄弟の者返すまじきぞ（今は「返すまじきぞ」を添へて読よ。）。ま
 づまづ心を静めて聞き候へ。今夜此所にて祐経を討ち。われら兄弟空しくならば。さて古里
 にまします母には誰かかくと申すべきぞ。庶敬ふ者に従ふは。君臣の禮と申すなり。これを聞かす
 は生生世世。永き世までの勘當と。地（地）かきくとき宣へば。かきくとき宣へば。鬼王團三郎。
 さらば形見を賜はらんと。云ふ聲の下よりも。不覺の涙。せきあへず。地（地）「それ人の形見を贈り
 しためしには。かの唐土の樊噲が。母の衣を着替へしは。長き世までのためしかや。十郎今當
 代の弓取の。母衣とはこれを名づけたり。地（地）然ればわれらが卑しき身を替ふべきにはあらねども。
 恩愛の契のあはれさは。われらを隔てぬ習なり。さるほどに兄弟文（兄弟文）こまこまと書きなされ。
 これは祐成が今はの時にかく文の。文字消えて薄くとも形見に御覽候へ。昔人の形見には手跡に増

るものあらじ。水莖の跡をば心にかけてとひ給へ。老少不定と聞く時は若き命も頼まれず。
 老いたるも残る世の習。飛花落葉の理と思し召されよ。其時時致も肌の護を取り出だし。こ
 れは時致が形見に御覽候へ。形見は人の亡き跡の思ひの種と申せども。せめて慰む習なれば。時
 致は母上に添ひ申したると思し召せ。今までは其主な。守佛の觀世音。此世の縁なくと。來世
 をばたすけ給へや。十郎（十郎）既に此日も入相の。地（地）鐘もはや聲聲に。諸行無常と告げ渡る。さら
 ばよ急げ、急げ使。涙を文に巻き籠めて。其まゝやる文の干ぬ間にと。詠せし人の心まで。今
 更思ひ白雲の。かゝるや富士の裾野より。曾我に歸れば兄弟すこすこと跡を見送りて。泣きて留
 まる哀さよ。泣きて留まる哀さよ。（申入）
 後ツレ（兵大勢）「寄せかけて打つ白波の音高く。関を作つて騒ぎけり。
 シテ「あら懸しの軍兵やな。われら兄弟討たんとて。多くの勢は騒ぎあひて。調こゝを先途
 と見えたるぞや。十郎殿。十郎殿。何とて御返事はなきぞ。十郎殿。宵に新田の四郎と戦ひ給
 しが。さてははや討たれ給ひたるよな。口惜しや。死なば骸を一所とこそ思ひしに。萬物思ふ

春の花盛。散り散りになつてここかしこに。骸をさらさん無念やな。地「身方の勢はこれを見て。身方の勢はこれを見て。打ち物の鏝もとくつるげ。時致を目掛けて懸りけり。シテ「あら物物しやおのれらよ。地「あら物物しやおのれらよ。さきに手並は知るらんものをと。太刀取り直し立つたる氣色。響めぬ人こそなかりけれ。かかりける處に。かかりける處に。御内方の古屋五郎。樊噲が怒をなし。張良が秘術をつくしつし。五郎が面に斬つて懸る。時致も古屋五郎が抜いたる太刀の鏝を削り。暫が程は戦ひしが。何とか斬りけん。古屋五郎は二つになつてぞ見えたりける。かかりける處に。かかりける處に。御所の五郎丸。御前に入れたてかなはじものをと。肌には鐵の袖を解き。草摺かるげに。ざつくと投げ掛け。上には薄衣引き被き。唐戸のわきにぞ待ち掛けたる。

シテ「今時は時致も運槻弓の。地「今時は時致も運槻弓の。力も落ちて。眞の女ぞと油断して通るを。やり過ごしおし並べ、むんずと組めば。シテ「おのれは何者ぞ。五郎丸「御所の五郎丸。地「あら物物しと後髪掴んで。えいやえいやと組み轉んで。時致上になりける處を。下よりえいやと又押し

返し。其時大勢おり重なつて。千條の繩をかけまくも。忝なくも君の御前に。追つ立て行く、そめでたけれ。(「めでたけれ」は後人の改)

六十三 夕顔

シテ 源氏物語中の人物夕顔上の段(前は里の女)

ワキ(旅僧)「これは豐後の國より出でたる僧にて候。さても松浦箱崎の誓も勝れたるとは申せども。猶も名高き男山に参らんと思ひ。此程都に上りて候。今日も亦立ち出で佛閣に参らばやと思ひ候。臨尋れ見る都に近き名所は。まづ名も高く聞えける。雲の林の夕日影。うつろふ方は秋草の。花紫の野を分けて。賀茂の御社伏し拜み。賀茂の御社伏し拜み。糺の森もうち過ぎて。歸る宿りは在原の。月やあらぬとかこちける。五條あたりのあばらやの。主も知らぬ所まで。尋ね訪ひてぞ暮しける。尋ね訪ひてぞ暮しける。(今此詞の始に「尋ね候ほどに」を添へて置よ。前文に伴はざる詞あり。)これははや五條あたりにてありげに候。ふしぎやなあこの屋づまより。女の歌を吟する聲の聞え候。暫相待ち尋ねばやと思ひ候。

シテ(里の女)監山シテ(里の女)監山の端の心も知らず行く月は。上の空にて影や絶えなん。巫山の雲は忽に。陽臺のも
 とに消え易く。湘江の雨は屢々も。楚畔の竹を染むるとかや。こゝは又。本より所も名を得たる。
 古き軒端の忍草。忍ぶ方々多き宿を。紫式部が筆の跡に。唯何某の院とばかり。書き置きし
 世は隔たれど。見しも聞きしも執心の。色をも香をも捨てざりし。涙の雨は後の世の。障とな
 れば今も猶。つれなくも。通ふ心の浮雲を。通ふ心の浮雲を。拂ふ嵐の風の間に。眞如の月も
 晴れよとぞ。むなしき空に仰ぐなる。むなしき空に仰ぐなる。
 ワキ、聞いかにこれなる女性に尋ね申すべき事の候。シテ(今は此句の始に「こなた」何事にて候ぞ。ワキ、さ
 てこゝをばいづくと申し候ぞ。シテ「これこそ何某の院にて候へ。ワキ、ふしぎやな何某の山何某
 の寺は。名の上の唯かりそめの言の葉やらん。又それを其名に定めしやらん承りたくこそ候へ。
 シテ「さればこそ始より。むつかしげなる旅人と見えなれ。紫式部が筆の跡に。唯何某の院と書き
 て。其名をさだかに顯さず。然れどもこゝは古りにし融の大臣。住み給ひにし所なるを。其世を隔
 てて光君。又夕顔の露の世に。上なき思を見給ひし。名も恐ろしき鬼の形。それもさながら

苦むせる。河原の院と御覽せよ。ワキ、嬉しやさては昔より。名に負ふ所を見る事よ。問われらも
 豊後の國の者。其玉蔓のゆかりとも。なして今又夕顔の。露消え給ひし世話を。馬語り給へや
 御跡を。及びなき身も巾はん。
 シテ、監、そもそも光源氏の物語。言葉幽艶を基として。理淺きに似たりといへども。進心菩提心
 を勧めて。義殊に深し。誰かは假にも語り傳へん。シテ「中にも此夕顔の巻は。殊に勝れて哀なる。
 地情の道も淺からず。契り給ひし六條の。御息所に通ひ給ふ。よすがに寄りし中宿に。シテ「唯息
 らひの玉鉢の。地便に立てし御車なり。物の文目も見ぬあたりの。小家がちななる軒のつまに。咲
 きかゝりたる花の名も。えならず見えし夕顔の。なり過ぎさじとあだ人の。心の色は白露の。情置き
 ける言の葉の。末を哀と尋ね見し。圍の扇の色殊に。互に秋の契とは。なさいりし東雲の。道の迷
 の言の葉も。此世はかくばかり。はかなかりける蟬。命懸けたる程も
 なく。秋の日やすく暮れはてし。宵の間過ぐる古里の。松の響も恐ろしく。シテ「風に瞬く燈火の。
 地消ゆると思ふこゝちして。あたりを見れば烏羽玉の。闇の現の人もなく。いかにせんとか思川。

シテ、監、そもそも光源氏の物語。言葉幽艶を基として。理淺きに似たりといへども。進心菩提心
 を勧めて。義殊に深し。誰かは假にも語り傳へん。シテ「中にも此夕顔の巻は。殊に勝れて哀なる。
 地情の道も淺からず。契り給ひし六條の。御息所に通ひ給ふ。よすがに寄りし中宿に。シテ「唯息
 らひの玉鉢の。地便に立てし御車なり。物の文目も見ぬあたりの。小家がちななる軒のつまに。咲
 きかゝりたる花の名も。えならず見えし夕顔の。なり過ぎさじとあだ人の。心の色は白露の。情置き
 ける言の葉の。末を哀と尋ね見し。圍の扇の色殊に。互に秋の契とは。なさいりし東雲の。道の迷
 の言の葉も。此世はかくばかり。はかなかりける蟬。命懸けたる程も
 なく。秋の日やすく暮れはてし。宵の間過ぐる古里の。松の響も恐ろしく。シテ「風に瞬く燈火の。
 地消ゆると思ふこゝちして。あたりを見れば烏羽玉の。闇の現の人もなく。いかにせんとか思川。

うたかた人は息消えて。歸らぬ水の泡とのみ。散りはてし夕顔の。花は再び咲かめやと。夢に來りて申すとて。ありつる女もかき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。(中入)
 ワキ「誰いざさらば夜もすがら。いざさらば夜もすがら。月見がてらに明かしつ。法華讀誦の聲絶えず。甲ふ法ぞ誠なる。甲ふ法ぞ誠なる。

後ジテ(夕顔の思)「誰いざさらば夜もすがら。いざさらば夜もすがら。月見がてらに明かしつ。法華讀誦の聲絶えず。甲ふ法ぞ誠なる。甲ふ法ぞ誠なる。
 の夢人の。跡よく甲ひ給へとも。ワキ「ふしぎやさては宵の間の。山の端出でし月影の。ほの見えそめし夕顔の。末葉の露の消え易き。本の雫の世語を。かけて現し給へるか。シテ「見給へこゝもおのづから。氣疎き秋の野らとなりて。ワキ「池は水草に埋もれて。ふりたる松の蔭闇く。シテ「又鳴き騒ぐ鳥のから聲。身にしみ渡る折からな。ワキ「さも物凄く思ひ給ひし。シテ「心の水は濁江に。引かれてかゝる身となれども。優婆塞が行ふ道をしるべにて。地「來ん世も深き契絶やすな。契絶やすな。(序ノ舞)

シテ「誰御僧の今の甲を受けて。地「御僧の今の甲を受けて。數數嬉しやと。シテ「夕顔の笑の

眉。地「開くる法華の。シテ「花房も。地「變成男子の願のまゝに。解脱の衣の袖ながら。今宵は何をつまんと。云ふかと思へば音羽山。嶺の松風通ひ來て。明け渡る横雲の。迷もなしや東雲の。道より法に出づるぞと。曉闇の空かけて。雲の紛れに失せにけり。

六十四 隅田川

ワキ 梅若丸の母(狂女) 子 方 梅若丸の母 守 旅 子 方 梅若丸の母 守 旅 子 方 梅若丸の母 守 旅

ワキ(渡守)「これは武藏の國隅田川の渡守にて候。今日は舟を急ぎ人人を渡さばやと存じ候。又此在所にさる仔細あつて。大念佛と申す事の候あひだ。僧俗を嫌はず人數を集め候ぞ(一字今は)。其由皆皆心得候へ。

ツレ(旅人)「末も東の旅衣。末も東の旅衣。日も遙遙の心かな。かやうに候者は。都の者にて候。われ東に知る人の候ほどに。かの者を尋ねて唯今まかり下り候。道行雲霞あつて遠山に越えなして。あと遠山に越えなして。幾關關の道すがら。國國過ぎて行くほどに。こゝぞ名に負ふ隅田川。波に早く著きにけり。波に早く著きにけり。急ぎ候ほどに。これははや隅田川の波にて候。又

あれを見れば舟が出候。急ぎ乗らばやと存じ候。いかに船頭殿舟に乘らうするにて候。ワキ「なかなかの事召され候へ。まづまづ御出で候後の。けしからず物騒に候は何事にて候ぞ。ツツ「さん候都より女物狂の下り候が。是非もなく面白う狂ひ候を見候よ。ワキ「さやうに候は。暫舟を止（二字今は）めて。かの物狂を待たうするにて候。

シテ（狂女）げにや人の親の心は闇にあらねども。子を思ふ道に迷ふとは。今こそ思ひ白雪の。道行き人に言傳て。行くへを何と尋ねらん。聞くやいかに。上の空なる風だにも。地「松に音する習あり。シテ「眞葛が原の露の世に。地「身を恨みてや明け暮れん。シテ「これは都北白河に。年経て住める女なるが。思はざる外に一人子を。人商人に誘はれて。ゆくへを聞けば逢坂の。關の東の國遠き。あづまとかやに下りぬと。聞くより心亂れつ。そなたとばかり思ひ子の。跡を尋ねて迷ふなり。地「千里を行くも親心。子を忘れぬと聞くものを。もとよりも契假なる一世の契假なる一世の。其中をだに添ひもせて。こゝやかしこに親と子の。四鳥の別これなれや。尋ねる心のはてやらん。武藏の國と下總の中にある。隅田川にも著きにけり。隅田川にも著きにけり。

シテ「のうのうわれをも舟に乘せて給はり候へ。ワキ「おことはいづくよりいづ方へ下る人ぞ。シテ「これは都より人を尋ねて下る者にて候。ワキ「都の人といひ狂人といひ。面白う狂うて見せ候へ。狂はずは此舟には乗せまいぞとよ。シテ「うたてやな隅田川の渡守ならば。日も暮れぬ舟に乘れとこそ承るべけれ。誰「かたの如くも都の者を。舟に乘るなと承るは。隅田川の渡守とも覺えぬ事な宣ひそよ。ワキ「聞げにげに都の人とて名にし負ひたるやさしさよ。シテ「のう其言葉もこなたは（八字今は「其言葉はこなた」と讀へり。口傳へによりて誤）耳にとまるものを。かの業平も此渡にて。誰名にし負はばいさ言問はん都鳥。わが思ふ人はありやなしやと。問のう舟人。あれに白き鳥の見えたるは。都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申し候ぞ。ワキ「あれこそ沖の鷗候よ。シテ「うたてやな浦にては千鳥ともいへ鷗ともいへ。など此隅田川にて白き鳥をば。都鳥とは答へ給はぬ。ワキ「誰「げにげに誤り申したり。名所には住めども心なくて。都鳥とは答へ申さで。シテ「沖の鷗と夕浪の。ワキ「昔にかへる業平も。シテ「ありやなしやと言問ひしも。ワキ「都の人を思妻。シテ「わらはも東に思子の。ゆくへなとふは同じ心の。ワキ「妻をしのび。シテ「子を尋ねるも。ワキ「思は同

じ。シテ「戀路なれば。地「われも又いざ言問は入都鳥。いざ言問は入都鳥。思子は東路に。ありやなしやと。問へども問へども答へぬはうたて都鳥。鄙の鳥とや云ひてまし。げにや舟競ふ。堀江の川の水際に。氷居つゝ鳴くは都鳥。それは難波江これば又。隅田川の東まで。思へば限なく。遠くも来ぬるものかな。さりとは渡守。舟こそりて狭くとも。乗せさせ給へ渡守。さりとは乗せてたび給へ。

ワキ「詞「かゝるやさしき狂女こそ候はね。急いで舟に乗り候へ。此渡は大事の波にて候。かまへ（今は）て静に召され候へ。ツレ「のうあの向ひの柳の本に。人の多く集りて候は何事にて候ぞ。ワキ「さん候あれは大念佛にて候。それにつきて哀なる物語の候。此舟の向ひへ著き候はん程に語つて聞かせ申さうするにて候。さて去年三月十五日。しかも今日に相當りて候。人商人の都より。年の程十二三ばかりなる幼き者を買ひ取つて奥へ下り候が。此幼き者。未だ習はぬ旅の疲にや。以ての外に違例し。今は一足も引かれずとて。此川岸にひれふし候を。なんぼう世には情なき者の候ぞ。此幼き者をば其まゝ路次に捨てし。商人は奥へ下り（今は）て候。さるあひだ此邊の人

人。此幼き者の姿を見候に。由ありげに見え候ほどに。さまざまに痛はりて候へども。前世の事にててもや候ひげん。たんだ弱りに弱り。既に末期と見えし時。おことはいづくいかなる人ぞと。父の名字をも國をも尋ねて候へば。われは都北白河に。吉田の何某と申し、人の唯ひとり子にて候が。父にはおくれ母ばかりに添ひ参らせ候ひしな。人商人にかどはされて。かやうになりゆき候。都の人の足手影もなつかしう候へば。此道のほとりにつきこめて。しるしに柳を植ゑて給はれとおとなしやかに申し。念佛四五返唱へ終にこと終つて候。なんぼう哀なる物語にて候ぞ。見申せば船中にも少少都の人も御座ありげに候。逆縁ながら念佛を御申し候ひて御用ひ候へ。よしなきながものがたり長物語に舟が著いて候。とうとう御あがり候へ。ツレ「いかさま今日は此所に逗留仕り候ひて。逆縁ながら念佛を申さうするにて候。

ワキ「詞「いかにこれなる狂女。何とて舟よりは下りぬぞ急いであがり候へ。あらやさしや。今の物語を聞き候ひて落涙し候よ。のう急いで舟よりあがり候へ。シテ「のう舟人。今の物語はいつの事にて候ぞ。ワキ「去年三月今日のことにて候。シテ「さて其兒の年は。ワキ「十二歳。シテ「主の名は。

ワキ「梅若丸。シテ」父の名は。ワキ「吉田の何某。シテ」さて其後は親とても尋ねず。ワキ「親類とても尋ね来ず。シテ」まして母とても尋ねぬものう。ワキ「思もよらぬ事。シテ」のう親類とても親とても。尋ねぬこそ理なれ。其幼き者こそ。此物狂が尋ねる子にてはさむらへとよ。のうこれは夢かやあら浅ましや候。ワキ「言語道断の事にて候ものかな。今まではよその事とこそ存じて候へ。さて御身の子にて候ひけるぞやあら痛はしや候。(今は此後三「彼の人」に候所を見せ申し候へし。二「な」は御出候)シテ」今まではさりとも逢はんを頼みにこそ。知らぬ東に下りたるに。今は此世になき跡の。しるしばかりを見る事よ。さてもむさんや死の縁とて。生所を去つて東のはての。道の邊の土となりて。春の草のみ生ひ茂りたる。此下にこそあるらめや。過さりとは人人。此土を覆して今一度。此世の姿を母に見せさせ給へや。残りてもかひあるべきは空しくて。かひあるべきは空しくて。あるはかひなき常木の。見えつ隠れつ面影の。定めなき世の習ひ。人間愛ひの花盛。無常の嵐音添ひ。生死長夜の月の影。不定の雲覆へり。げに目の前の憂き世かな。げに目の前の憂き世かな。

ワキ「調」今は何と御歎き候ひてもかひなき事。たゞ念佛を御申し候ひて。後世を御用ひ候へ。既に月出で川風も。はや更け過ぐる夜念佛の。時節なればと面面に。鉦鼓を鳴らしすむれば。シテ「母は餘りの悲しきに。念佛をさへ申さずして。唯ひれ臥して泣き居たり。ワキ「調」うたてやな餘の人多くましますとも。母の用ひ給はんをこそ。亡者も喜び給ふべけれど。鉦鼓を母に参らすれば。シテ「わが子のためと聞けばげに。此身も危鐘を取り上げて。ワキ「歎きを留め聲澄むや。シテ」月の夜念佛もるともに。ワキ「心は西へと一すぢに。シテ」ワキ「二人」南無や西方極樂世界。三十六萬億。同號同名阿彌陀佛。地「南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。シテ」隅田河原の波風も聲立て添へて。地「南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。シテ」名にし負は都鳥も音を添へて。子「今は子方と通話と同吟」南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。シテ「のうのう今の念佛の聲は(子方の方に)と誦ははなり。まさしくわが子の聲にて(今は「のう」候。此塚のうちに)ありげに候よ。ワキ「われらもさやうに聞きて候。所詮此方の念佛をば留め候へし。母御一人御申し候へ。シテ」今一聲こそ聞かまほしけれ。南無阿彌陀佛。子「南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛と。

地聲のうちより幻に見えければ。シテあれはわが子か。子母にてましますかと。地互に手に
 手を取り交はせば。又消え消えとなり行けば。いよいよ思ひはます鏡。面影もまぼろしも。見えつ
 隠れつする程に。東雲の空もほのぼのと。明け行けば跡絶えて。わが子と見えしは塚の上の草。茫
 茫として唯しるしばかりの浅茅が原となるこそあはれなりけれ。なるこそあはれなりけれ。

六十五 雲林院

シテ 藤原紫平の雲(前は老翁)

ワキ(公光) 藤咲く松も紫の。藤咲く松も紫の。雲の林を尋ねん。 詞「これは津の國蘆屋の里に。公光
 と申す者にて候。我幼かりし頃よりも。伊勢物語を手馴れ候ところにて。ある夜不思議なる靈夢を蒙
 りて候ほどに。唯今都に上らばやと存じ候。 詞「花の新に開くる日初陽潤へり。鳥の老いて歸
 る時。薄暮陰れる春の夜の。月の都に急ぐなり。 蘆屋の里を立ち出で。我は東に赴けば。名残
 の月の西の海。汐の蛭子の浦遠し。汐の蛭子の浦遠し。 松蔭に煙を被く尼が崎。煙を被く尼が崎。
 暮れて見えたる漁火の。あたりをとへば難波津に。咲くやこの花冬こもり。今は現に都路の。遠か

りし程は櫻にまされある。雲の林に著きにけり。雲の林に著きにけり。

ワキ「遙に人家を見て花あれば即ち入るなればと。木蔭に立ち寄り花を折れば。シテ、誰そやう
 (一字不明、今は二字) 花折るは。今日は朝の霞消えしまゝに。ゆふべの空は春の夜の。殊に長閑に眺め
 やる。嵐の山は名にこそ聞け。 詞「まことの風は吹かぬに。 詞「花を散らすは鶯の。 羽風に落つるか、
 松の響か、人か。 詞「それかあらぬか木の下風か。 あら心もとなと散らしつる花や。 詞「や。さればこ
 そ人の候。落花狼籍の人こそ退き給へ。 ワキ「それ花は乞ふも盗むも心あり。とても散るべき花な
 惜み給ひそ。シテ、とても散るべき花なれども。花に愛きは嵐。それも花ばかりをこそ散らせ。お
 ことは枝ながら手折れば(二字、今は古板)。風よりも猶愛き人よ。ワキ「何とて素性法師は。見ての
 みや人に語らん 櫻花。手毎に折りて家土産にせんと(今は「はる春」) 詠みけるぞ。シテ、さやうに詠む
 もあり。又ある歌に。 詞「春風は花のあたりをよきて吹け。 詞「心づからやうつるふと見ん。げにや
 春の夜の一時を千金に替へじとは。花に清香月に影。千顆萬顆の玉よりも。寶と思ふ此花を。
 詠「折らせ申す事は候まじ。ワキ「げにげにこれは御理。花物いはぬ色なれば。人にて花を戀衣

(此一句誤る所な)。シテ、輕濼激して影唇を動かせば。驚われは申さずとも。ワキ「花も惜しきと。
 シテ」云つづべし。進げに枝を惜むは又(一字高上、又は拍子の都合によ)春のため。手折るは見ぬ人のため。
 惜むも乞ふも情あり。二つの色の争ひ。柳 櫻をこきませで。都ぞ春の錦なる。都ぞ春の錦なる。
 シテ、明いかに旅人。御身は何方より來り給ふぞ。ワキ「これは津の國蘆屋の里に。公光と申す者に
 て候が。われ幼かりし頃より。伊勢物語を手馴れ候ところに。ある夜の夢に。とある花の蔭よ
 りも。紅の袴召されたる女性。束帯(此句「し」の字脱するが。「束帯」給へる男。伊勢物語の草紙を持ち
 侍み給ふを。あたりによりつる翁に問へば。あれこそ伊勢物語の根本。在中將業平。女性
 は二條の後。所は都北山陰。紫野雲の林と語るを見て夢覺めぬ。餘りにあらたなる事にて候
 ほどに。これまで参りて候。シテ「さては御身の心を感じつ。伊勢物語を授けんとなり。今宵は
 こゝに臥し給ひ。別れし夢を待ち給へ。ワキ「嬉しやさらば木の本に。袖をかたしき臥して見ん。
 シテ、其花衣を重れつ。重寝の夢を待ち給は。などか験のなかるべき。ワキ「かやうに
 委しく教へ給ふ。御身はいかなる人やらん。シテ、其様、年の古びやう。昔男となど知らぬ。

ワキ「さては業平にてましますか。シテ「いや。進「わが名を何と夕映の。わが名を何と夕映の。花
 なし思ふ心ゆる。木隠れの月に現れぬ。眞に昔を戀衣。一枝(原作者は「ひとと」と云ま)の花の蔭に寝て。
 わが有様を見給は。其時不審を晴らさんと。ゆふべの空の一霞。おもほえずこそなりにけれ。
 おもほえずこそなりにけれ。(中入)
 ワキ「いざさらば。木蔭の月に臥して見ん。木蔭の月に臥して見ん。暮れなばなげの花衣。袖をか
 たしき臥しにけり。袖を片敷き臥しにけり。
 後シテ(業平の返)「月やあらぬ春や昔の春ならぬ。わが身一つはもとの身にして。ワキ「ふしぎやな雲の
 上人句やかに。花に移るひ現れ給ふは。いかなる人にてましますぞ。シテ、今は何をか包むべき。
 昔男のいにしへを語らんために來りたり。ワキ「さらば夢中に伊勢物語の。其品品を語り給
 へ。シテ、明いでいでさらば語らんと。露花の嵐も聲添へて。ワキ「其品品を。シテ「語りけり。そ
 もそも此物語はいかなる人の何事によつて。進「思の露を染めけるぞと。云ひけん事も理な
 り。シテ「まづは弘徽殿の細殿に。人目を深く忍び。進「心の下簾のつれづれと人は侍めば。わ

れも花に心を染みて。共にあくがれ立ち出づる。二月や。まだ宵なれど月は入り。われらば出づる懸路かな。そもそも目の本の。中に名所と云ふ事は。わが大内にあり(三字或は「ある彼の懸路が」と讀まば「二字を替り。懸路は此」)。かの通昭がつけられし。花の散り積る芥川をうち渡り。思ひ知らずも迷ひ行く。かづける衣は紅葉重。緋の袴踏みしだき。誘ひ出づるやまめ男。紫の一元結の藤袴。しなる裾をかいとつて。シテ「信濃路や。地「園原茂る木賊色の狩衣の袂を。冠の巾子にうちかづき。忍び出づるや二月の。黄昏月もはや入りて。いと臘夜に。降るは春雨か。落つるは涙かと。袖うち拂ひ裾をとり。しをしをすこと。たどりたどりも迷ひ行く。シテ「思ひ出でたり夜遊の曲。地「返す眞袖を月や知る。(序ノ舞)

地「夜遊の舞樂も時移れば。夜遊の舞樂も時移れば。名残の月も山藍の羽袖。返すや夢の黄楊の枕。此物語語るとも盡きじ。シテ「松の葉の散り失せず。松の葉の散り失せず。末の世までも情知る。言の葉草のかりそめに。かく著せるいにしへの。伊勢物語かたる夜もすがら。覺むる夢となりにけりや。覺むる夢となりにけり。

六十六 春日龍神

シテ 龍神(前は宮守) ワキ 明恵上人

ワキ(明恵上人)「月の行くへもそなたぞと。月の行くへもそなたぞと。日の入る國を尋ねん。これは梅の尾の明恵法師にて候。われ入唐渡天の志あるにより。御暇乞のために春日の明神に参らばやと思ひ。唯今南都に下向仕り候。道行齋愛宕山樞が原をよそに見て。樞が原をよそに見て。月に雙の岡の松。緑の空も長閑なる。都の山を跡に見て。これも南の都路や。奈良坂越えて三笠山。春日の里に著きにけり。春日の里に著きにけり。

シテ(宮守)「晴れたる空に向へば。和光の光あらたなり。それ山は動かさる(四字古板木以下皆「動」字送假名を附なる様法師に誤り傳へられて今は「下」)形を現じて。古今に至る神道を表し。里は平安の衛を見せて。人間長欠の聲満てり。まことに御名も久堅の。天の兒屋根の世世とかや。月に立つ影も鳥居の二柱。御社の誓もさぞな四所の。誓もさぞな四所の。神の代よりの末うけて。澄める水屋の御影まで。塵に交はる神慮。三笠の森の松風も。枝を鳴らさぬ氣色かな。枝を鳴らさぬ氣色かな。

ワキ、詞いかにこれなる御奴に申すべき事の候。シテ「や。これは梅の尾明惠上人にて御座候ぞや。唯今の御参詣さこそ神慮に嬉しくおぼし召し候ふらん(傳か)」。ワキ「さん候唯今参詣申す事餘の儀に非ず。われ入唐渡天の志あるより。御暇乞の爲に唯今参りて候。シテ「これは仰にて候へども。さすがに上人の御事は。年始より四季をりをりの御参詣の。時節の少しの(今は「の」を脱す)遅速をだに。待ちかね給ふ神慮ぞかし。されば上人をば太郎と名づけ。笠置の解脱上人をば次郎と頼み。雙の眼兩の手の如くにて。晝夜各参(三字誤)の擁護れんころなるとこそ承りて候に。日本を去り入唐渡天し給はんこと。いかで神慮に適ふべき。唯おぼし召しとまり給へ。ワキ「げにげに仰はさる事なれども。入唐渡天の志も。佛跡を拜まんためなれば。何か神慮に背くべき。シテ「これ又仰ともおぼえぬものかな。佛在世の時ならばこそ。見聞の益もあるべけれ。今は春日の御山こそ。即ち靈鷲山なるべけれ。其うへ上人初参の御時。奈良坂のこの手を合せて禮拜する人間は申すに及ばず。心なき。地「三笠の森の草木の。三笠の森の草木の。風も吹かぬに枝を垂れ。春日山野邊に朝立つ鹿までも。皆悉く出で迎ひ。膝を折り角を傾け。上人を禮拜する。

かほどの奇特を見ながらも。眞の淨土はいつくぞと。問ふは武藏野のはてしな心や。唯返す返す我が頼む神のまにまに留りて。神慮をあがめおぼしませ。神慮をあがめおぼしませ。ワキ、詞「猶猶當社の御事委しく御物語り候へ。シテ「然るに入唐渡天といつげ。佛法流布の名をとめし。地「古跡を尋ねんためぞかし。天台山を拜むべくは。比叡山に参るべし。五臺山の望あらば。吉野筑波を拜すべし。シテ「昔は靈鷲山。地「今は衆生を度せんとして。大明神と示現し。此山に宮居し給へば。シテ「即ち鷲の太山とも。地「春日の(此曲此間に「御」の字を添へて「お山」と讀へども之は此類甚だ多し)山を。拜むべし。われを知れ。釋迦牟尼佛世に出で。さやけき月の世を照らすとは御神詠もあらたなり。然れば誓ある。慈悲萬行の神徳の。迷を照らす故なれや。小機の衆生の益なきを悲み給ふ御姿。瓔珞細軟の衣を脱ぎ。鹿弊の散衣を着しつ。四諦の御法を説き給ひし。鹿野苑もこいなれや。春日野に起き臥すは鹿(二字古板本文)の苑ならずや。シテ「其外當社のありさまの。地「山は三笠に影さすや。春日そなたに現れて。誓を四方に春日野の。宮路も末あるや。曇なき西の大寺月澄みて。光ぞ増る七大寺。御法の花も八重櫻の都とて。春日野の春こそどかな

りけれ。ワキ、聞げにありがたき御事かな。即ちこれを御神託と思ひ定めて。此度の入唐をば思ひ止るべし。さてさて御身はいかなる人ぞ。御名をなのり給ふべし。シテ入唐渡天をとまり給は。三笠の山に五天竺を寫し。摩耶の誕生、伽耶の成道。鷲峰の說法。雙林の入滅まで悉く見せ奉るべし。暫くここに待ち給へと。木綿四手の神の告。われは時風秀行（時風秀行は春日部向の仕人の名なり。これを一人の如く云ふは後世の事か。將原文作者が一人）ぞとて。かき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。（中入）

ワキ、神託正にあらたなる。神託正にあらたなる。聲の内より光さし。春日の野山金色の世界となりて。草も木も佛體となるぞふしぎなる。佛體となるぞふしぎなる。地、時に大地震動するは。下界の龍神の參會か。

後ジテ（龍神）すば八大龍王。地、難陀龍王。シテ跋難陀龍王。地、婆伽羅龍王。シテ和修吉龍王。地、德叉迦龍王。シテ阿那婆達多龍王。地、百千眷屬引き連れ引きつれ。平地に波瀾を立て。佛の會座に出來して御法を聽聞する。シテ、其外妙法緊那羅王。地、又持法緊那羅王。シテ樂乾闥

婆王。地、樂音乾闥婆王。シテ婆雅阿修羅王。地、羅喉阿修羅王の恒沙の眷屬引き連れ引き連れ。これも同じく座列せり。龍女が立ち舞ふ波瀾の袖。龍女が立ち舞ふ波瀾の袖。白妙なれやわだ（波瀾に照りて）の原の。拂ふは白玉。立つは緑の。空色も映る海原や。沖行くばかり。月の御舟の。佐保の川づらに。浮み出づれば。シテ八大龍王。八大龍王は。地、八の冠を傾け。所は春日野の。月の三笠の雲に上り。飛火の野守もいで見よや。摩耶の誕生。鷲峰の說法。雙林の入滅悉く終りて。これまでなりや明惠上人。さて入唐は。ワキとまるべし。地、渡天はいかに。ワキ、渡るまじ。地、さて佛跡は。ワキ、尋ねまじや。地、尋ねても尋ねても。此上嵐の雲に乗りて。龍女は南方に飛び去り行けば。龍神は猿澤の池の青浪蹴立て蹴立て。其丈千尋の大蛇となつて。天にむらがり（此語他に用ゐられたる所もあれど）地に蟠りて。池水を覆へして失せにけり。

六十七

船 橋

古名 佐野船橋

前ツレ 里の男の亡妻（前には常の男にて）

ワキ（山伏）山又山のゆく未や。山又山のゆく未や。雲路のしるべなるらん。詞、これは本山（今二字を各流とも誤はす）

三熊野より出でたる客僧にて候。われ未だ松島平泉を見ず候ほどに。此春思ひ立ち松島平泉
へと急ぎ候。逆行、幾瀬渡りの野洲の川。幾瀬渡の野洲の川。彼織女の契待つ。年に一夜は徒夢の。
醒が井の宿を過ぎ。騰吹風の音にのみ、月の霞むや美濃尾張。老を知れとの心かな。老を知れと
の心かな。詞急ぎ候あひだ。こればはや上野の國佐野と申す所に著きて候。此所にて宿を借らば
やと存じ候。

シテ(里の男)ツレ(里の女)「法に寄る道ぞと作る船橋は。後の世かくる頼みかな。シテ「往事渺茫として。
何事も見残す夢の浮橋に。二人「猶敷添へて舟競ふ。堀江の川の水際に。寄る邊定めぬ波の。
浮世に歸る六の道。遁れかれたる。心かな。戀ひしきものないにしへの跡はるばると思ひやる。
さきの世の報いのまゝに生れきて。報いのまゝに生れきて。心にかけても身の。生死の海を渡
るべき。船橋(今は「松島」に別けて「三浦」などもこれは前の詞によりて「松島」の語を云ひ起したるまでにて「三浦」を造らばや。二河の流は
ありながら。科は十の道多し。まことの橋を渡さばや。まことの橋を渡さばや。
シテ「調「いかに 客僧。橋の勤めに入りて御通り候へ。ワキ「見申せば俗體の身として。橋興立の志。

返すがへすもやさしうこそ候へ。シテ「これは仰とも覺えぬものかな。必ず出家にあらねばとて。
志のあるまじきにて候はず。まづ勤めに入りて御通り候へ。ワキ「橋の(三浦)勤めには参り
候べし。さて此橋はいつの御宇より渡されたる橋にて候ぞ。シテ「萬葉集の歌に。東路の佐野の船
橋取り放しと(この原歌「かみつけの佐野の渡橋とりはなし親はさくれどわはさかれがへ」とあるを「東路の」)詠める歌の心をば知
ろしめし候はずや。ツレ「調「いやさやうに申せば恥かしや。身のいにしへも淺間山。シテ「調「こがれ
沈みし此河の。二人「さのみは申さじさなきだに。苦み多き三瀬川に。浮む便の船橋を。渡りて賜
ばせ給へとよ。ワキ「調「げにげに親し離ればの物語。語さては古りにし船橋の。主を助けん其た
めか。シテ「調「殊更これは山伏の。橋をば渡し給ふべし。ワキ「調「そも山伏の身なればとて。取り分
き橋を渡すべきか。シテ「調「さのみな争ひ給ひそとよ。役の優婆塞葛城や。祈りし久米路の橋はい
かに。女「調「たとふべき身にあらねども。われも女の葛城の神。シテ「調「ひと言葉にてやむまじや。
唯幾度も岩橋の。女「調「など御心にかけて給はぬ。二人「さりながらよそにて聞くも葛城や。夜作る
なる岩橋ならば。渡らん事も難かるべし。調「これは長き春の日の。長閑けき水の船橋に。さして

柱もいるまじや。徒に朽ちてんを。作り給へ山伏。所は同じ名の。所は同じ名の。佐野の渡の夕暮に。袖うち拂ひて御通りあるか篠懸の。頃も春なり河風の。花吹き渡せ船橋の。法にゆき道の作り給へ山伏。峯峯廻り給ふとも。渡を通らではいづくへ行かせ給ふべき。

ワキ「詞」さてきて萬葉集の歌に。東路の佐野の船橋取り放し。又鳥は無しと二流に讀まれたるは。何と申したるいはれにて候ぞ。シテ「さん候」それについて物語の候語つて聞かせ申し候べし。昔此所に住みける者。忍妻にあく(今は「こ」がれ。)所は川を隔てたれば。此船橋を道として夜な夜な通ひけるに。二親此事を深く厭ひ。橋の板を取り放す。それをば夢にも知らずして。かけて頼みし橋の上より。かつばと落ちて空しくなる。誰妄執と云ひ因果といひ。其まゝ三途に沈みはて。紅蓮大紅蓮の氷に閉ぢられて。地「浮む世もなき苦みの。海こそあらめ。河橋や。磐石に押され苦を受くる。さらば沈みもはてすして。魂は身を責むる。心の鬼となり變り。なほ戀種の言茂く。邪姪の思にこがれ行く。船橋も古き物語。眞は身の上なり。わが跡申ひて賜ひ給へ。シテ「夕日漸く傾きて。地「霞の空もかきくらし。雲となり、雨となる。申有の道も近づくか。

橋と見えしも中絶えぬ。こゝはまさしく東路の。佐野の船橋鳥は無し。鐘こそ響け夕暮の。空も別れ(二字或は)になりけり。空も別れになりけり。(中入)

ワキ「語」古りにし跡をあらためて。ふりにし跡をあらためて。三寶加持の行に。五道の罪も消えぬべき。法(のり)の力(ちから)ぞありがたき。法(のり)の力(ちから)ぞありがたき。

後「シテ」父の亡き語「いかに行者ありがたや。徒に三途に沈みし身なれども。法(のり)の力(ちから)が船橋の。浮む身となるありがたきよ。後「シテ」父の亡き語「いかに行者われは猶(なほ)し(二字古板本「なをし」と書けり。後「今此に此字を讀つ。後考ふべし。)此妄執のゆゑにより。浮みかれたる橋柱の。重き苦患を見せ申さん。泣く涙雨とふらなん渡り川。水増りなば歸りくるがに。地「返れや返れあだ波の。シテ「柱を頂く磐石の苦患。地「これこれ見給へあさましや。シテ「見我身者發菩提の。功力を受けて云ふならく。奈落の底の水屑となりしも(今は「を」)。知我心者即身成佛ありがたや。

ワキ「語」痛はしや未だ邪姪の業深き。其執心を振り捨て。猶猶昔を懺悔し給へ。ツレ「何事も懺悔に罪の雲消えて。眞如の月も出でつべし。シテ「五障の霞の晴れがたき。春の夜の一時。胡蝶

の夢の蹴れに。いでいで姿を見せ(今「えい」申さん。ツレよしや吉野の山ならねど。これも妹背の中川の。シテ、明「橋のとだえのありけるとは。いさ白波の夜ごと。ツレ通ひ馴れたる浮船の。シテ共に、こがるし思妻。宵宵に通ひ馴れたる船橋の。冴え渡る夜の月も半(古板本「半」に似たる字をきて二箇を附し古き流しには「半」字に濁點を附せり。考の)に更け静まりて。地人もねにふし丑みつ寒き。河風も厭はじ。逢瀬の向ひの岸に見えたる人影はそれが。心嬉しや頼もしや。互にそれぞれと見ええし中の。互にそれぞれと見ええし中の。橋を隔て、立ち来る波の。より羽の橋か鶴の。行きあひの間近くなりゆくまゝに。放せる板間を踏みばづし。かつばと落ちて沈みけり。

シテ、東路の佐野の船橋取り放し。親し離れば妹に逢はぬかも。執心の鬼となつて。地「執心の鬼となつて。共に三途の川橋の。橋柱に立てられて。悪龍の氣色に變り。程なく生死婆娑の妄執。邪淫の惡鬼となつて。われと身を責め苦患に沈むを。行者の法味功力により。眞如發心の玉橋の。眞如發心の玉橋の。浮める身とぞなりにける。浮める身とぞなりにける。

六十八 源氏供養

古名 紫式部 シテ 紫式部の(前は風之女) 安房院法印 ワキツレ 從僧

ワキ(安房院法印)ワキツレ(從僧) 衣も同じ昔の道。衣も同じ昔の道。石山寺に参らん。ワキ、明「これは安房院の法印にて候。われ石山の觀世音を信じ。常に歩を運び候。今日も又参らばやと思ひ候。ワキ、ワキツレ、進行時「時も名も花の都を立ち出でて。花の都を立ちいで。嵐につる、夕波の。白河おもて過ぎ行けば。音羽の瀧をよそに見て。關のこなたの朝霞。されども残る有明の。影もあなたに鳩の海。げに面白き氣色かな。げに面白き氣色かな。さゝ波や志賀辛崎の。一つ松。鹽焼かれども浦の波。たつこそ水の煙なれ。たつこそ水の煙なれ。シテ(里の女)明「のうのう安房院の法印に申すべき事の候。ワキ、法印とはこなたの事にて候か何事にて候ぞ。シテ、明「われ石山に籠り。源氏六十帖を書きしるし。なき跡までの筆のすさみ。同名の形見とはなりたれども。源氏の源氏に終に供養をせざりし科により。浮む事なくさむらへば。然るべくは石山にて。源氏の供養をのべ。わが跡とひてたび給へと。此事申さんとてこれまで参りて候。ワキ、明「これは思ひもよらぬ事を承り候

ものかな。さりながら易きあひだの事供養をばのべ候べし。さて誰とこのころさして同向申し候べき。シテ「まづ石山に参りつ」。源氏の供養をのべ給は。其時われも現れて。茲ともに源氏を甲ふべし。ワキ「嬉しやそれこそ奇特なれ。いで源氏を書きしは。恥かしや此身は愛き世の土となれども。ワキ「名をば埋まぬ苔の下。シテ「石山寺に立つ雲の。ワキ「紫式部にてましますな。シテ「恥かしや。色に出づるか紫の。地色に出づるか紫の。雲もそなたか夕日影。さしてそれとも名のりえず。かき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。ワキ「さて石山に参りつ。念願を勤め事終り。夜も更け方の鐘の聲。心も澄めるをりふしに。ワキ「ありつる源氏の物語。眞しからぬ事なれども。ワキ「供養をのべて紫式部の。ワキ「菩提を深く。ワキ「とふべきなり。ワキ「ワキ「とは思へどもあだし世の。とは思へどもあだし世の。夢にうつろふ紫の。色ある花も一時のあだにも消えし(今は「し」と讀みて「さ」と)。いにしへの光源氏の物語。聞くにつけても其誠。頼み少なき心かな。頼み少なき心かな。後シテ(紫式部の)「松風も散れば形見となるものを(此句誤)。思ひし山の下紅葉。地「名も紫の色に出

で。シテ「見えん姿は恥かしや。ワキ「かくて夜も深更になり。鳥の聲をさまり。心凄きなりふし。燈火の陰を見れば。さもつづくしき女性。紫の薄衣のそばをとり。影の如くに見え給ふは。夢か現かおぼつか。シテ「うつろひ易き花色の。襲の衣の下にがれ。紫の色こそ見えぬ枯野の萩。本のあらまし未通らば。名のらずと知らしめされずや。ワキ「紫の色には出ですとあらましの。言葉の末とは心得ぬ。紫式部にてましますか。シテ「恥かしながらわが姿。ワキ「其面影は昨日見し。シテ「姿に今も變られば。ワキ「互に心な。シテ「おきもせず。地「寝もせず明かす此夜はの。月も心せよ。石山寺の鐘の聲。夢をも誘ふ風の前。消えしはそれが燈火の。光源氏の跡とはん。光源氏の跡とはん。シテ「「あちありがたの御事や。何をか布施に参らせ候べき。ワキ「「いや布施などは思ひもよらず候。とても此世は夢のうち。昔に返す舞の袖。唯今舞うて見せ給へ。シテ「「恥かしながらさりとは。仰をばいかで背くべき。いでいでさらば舞はんとて。ワキ「「もとより其名も紫の。シテ「色めづらしき薄衣の。ワキ「日もくれなるの扇を持ち。シテ「「恥かしながら弱弱と。ワキ「あはれ胡

蝶の。シテ「ひと遊び。地「夢のうちなる舞の袖。夢のうちなる舞の袖。現に返すよしもがな。シテ
「花染衣の色製。地「紫匂ふ秋かな。

シテ「藤」それ無常といつば目の前なれども形もなし。地「一生夢の如し。誰あつて百年を送る。
權花一日唯同じ。シテ「こゝに數ならぬ紫式部。頼をかけて石山寺。悲願を頼み籠り居て。此
物語を筆に任す。地「されども終に供養をせざりし科により。妄執の雲も晴れがたし。シテ「今逢
ひがたき縁に向つて。地「心中の所願を起し。一つの巻物に寫し。無明の眼を覺す。南無や光
源氏の幽靈。成等正覺。

地「藤」そもそも桐壺のゆふへの煙。速に法性の空に至り。椿木の夜の言の葉は終に覺樹の花散り
ぬ。空蟬の空しき此世を厭ひては。夕顔の露の命を觀じ。若紫の雲の迎。未摘花の壺に座せば。
紅葉の賀の秋の落葉もよしやたり。たまたま佛意に逢ひながら「榊葉のさして往生を願ふべし。
シテ「花散里に住むととも。地「愛別離苦の理。免かれ難き道とかや。唯すべからくは生死流涙の須
磨の浦を出で。四智圓明の明石の浦に浮標。いつまでもありなん。唯蓬生の宿ながら。菩提の道

を願ふべし。松風の吹くとも。業障の薄雲は晴るゝ事更になし。秋の風消えずして。紫磨忍辱
の藤袴。上品蓮臺に心を懸けて誠ある。七寶莊嚴の眞木柱のもとに行かん。梅枝の匂ひに移
る我が心。藤裏葉に置く露の。其玉鬘影（今は「掛け」の意に解して「かけ」と讀）とばし。朝顔の光頼まれ
ず。シテ「朝には梅檀の蔭に寄木名も高き。地「官位を東屋の内に籠めて。樂しみ榮えを浮舟に
譬ふべしとかや。これも蜻蛉の身なるべし。夢の浮橋をうち渡り。身の來向を願ふべし。南無や西
方彌陀如來。狂言綺語をふり捨て。紫式部が後の世を。助け給へともろともに。鐘うち鳴ら
して回向も既に終りぬ。

地「藤」げに面白や舞人の。名殘今はとなく鳥の。夢をも返す秋かな。シテ「光源氏の御跡を。用ふ
法の力にて。われも生れん蓮の花。宴は頼もしや。地「げにや朝は秋の光。シテ「ゆふべには影もな
し。地「朝顔の露電の影。いづれか徒ならぬ。定めなの愛き世や。

地「藤」よくよく物を案するに。よくよく物を案するに。紫式部と申すは。彼の石山の觀世音。假
に此世に現れて。かゝる源氏の物語。これも思へば夢の世と。人に知らせん御方便。げにありがた

き誓かな。思へば夢の浮橋も。夢の間の言葉なり。夢の間の言葉なり。

六十九 花 筐

ワキ 照日前 侍 女
シテ 供奉官人

ワキツレ(使者)「かやうに候者は(今は此句を添はして次句)。越前の國味真野と申す所に御座候。男大迹(おとこ)なるを、古より「おほあつと」の皇子に仕へ申す者にて候。さて都より御使あつて。武烈天皇の御代を。味真野の皇子に御譲りあり。御迎の人人まかり下り(今は此句の終に「御供申しを添へ)。今朝とく御上洛にて候。さるあひだ此程御寵愛あつて召しつかはれて候照日の前と申す御方。此程御暇にて御里に御座候が。(今は此句の終に「かの御)俄の御上洛につき。御玉章と。朝毎に御手(今は此句に「に)馴れし御花筐を参らせられ候を。某に持ちて参れとの御事にて候ほどに。唯今照日の御里へと急ぎ候。あら嬉しやこれへ御出で候よ。これにて申し候べし。いかに申し候。シテ(照日前)「何事にて候ぞ。ワキツレ「我が君は都より御迎下り。御位に即かせ給ひ。今朝とく御上りにて候。又これなる御文と御花筐とを。確に参らせよとの御事にて候。これこれ御覽候へ。シテ「さては我が君御位

に即かせ給ひ。都への御上り返す返すも御めでたうこそ候へとよさりながら。此年月の御名残。いつの世にかは忘るべき。あら御名残惜しや。詞されどもおぼし召し忘れずして。御玉章を殘し置かせ給ふ事のありがたさよ。急き見参らせ候はん。應神天皇の孫苗を繼ぎながら。帝位を履む身にあらざれども。天照太神の神孫なれば。毎日に伊勢を拜し奉りし。其神感の至りにや。群臣の選に出だされて。誘はれゆく雲の上。廻りあふべき月影を。秋の頼に残すなり。頼めたり袖ふれ馴れし月影の。しばし雲居に隔ありともと。地「書き置き給ふ水壘の。跡に残るぞ悲しき。君と住む。程だにありし山里に。程だにありし山里に。一人残りて有明の。つれなき春も杉間吹く。松の嵐もいつしかに。花の跡とてなつかしき。御花筐玉章を。抱きて里に歸りけり。抱きて里に歸りけり。(申入)

ワキ(大臣)ワキツレ(官人)「君の惠も高照らす。君の惠も高照らす。紅葉の御幸早めん。ワキ「忝くも此君は。應神天皇五世の御末。男大迹の皇子と申ししが。當年御即位をさまりて。繼體天皇と申すなり。ワキツレ「されば治まる御代の御影。日本の名もあひにあふ。ワキ「大和の國や玉穗の都に。

ワキツレ「今宮造。ワキ」あらたなり。ワキ、ワキツレ「萬代の惠も久し富草の。惠も久し富草の。種も榮行く秋の空。露も時雨も時めきて。四方に色添ふ初紅葉。松も千歳の縁にて。常葉の秋に廻りあふ。御幸の車早めん。御幸の車早めん。」

後ジテ(狂女)「いかにあれなる旅人。都への道教へて賜べ。何物狂とや。物狂も思ふ心あればこそ問へ。など情なく教へ給はぬぞや。ツレ(待女)「よしの人には教へずとも。都の道しるべこそ候へ。あれ御覽候へ雁の渡り候。シテ、何雁の渡るとや。げによく(今は「今」)思ひ出だしたり。秋にはいつも雁の。南へ渡る天つ空。ツレ、「そらごとあらじ君が住む。都とやらんもそなたなれば。シテ、何聲をしろへの便の友と。ツレ、「誰れも田の面の雁こそ。連れて越路のしるべなれ。シテ、其上名におふ蘇武が旅雁。シテ、ツレ二人、玉章をつけし南の都路に。ツレ「我をもともに連れて行け。シテ、宿かりがれの旅衣。二人「飛び立つばかりの心かな。」

シテ、誰「君が住む越の白山知られども。行きてや見ましあしびきの。二人「大和はいづく白雲の。高間の山のよそにのみ。見てや止みなん及びなき。雲居はいづく御影山。日の本なれや大和なる。玉穂の都に急ぐなり。地「こゝは近江の湖なれや。みづからよしなくも。及ばぬ戀に浮き舟の。こがれ行く。旅を忍ぶの摺衣。旅を忍ぶの摺衣。涙も色か黒髪。あかさりし別路の。あとに心の浮かれてきて。鹿の起臥堪へかたて。なほ通ひゆく秋草の。野暮れ山暮れ露分けて。玉穂の宮に著きにけり。玉穂の宮に著きにけり。」

ワキ「時しも頃は長月や。まだき時雨の色薄き。紅葉の御幸の道の邊(昔は「べ」と讀ひ)に、非形を戒め面に。御幸の御前を清めけり。シテ「さなきだに都に馴れぬ鄙人の。女といひ狂人といひ。二人「さこそ心は櫛の葉の。風も亂るゝ露霜の。御幸の前に進みけり。ワキ「ふしぎやな其さま人に變りたる。狂女と見えて見苦しやとて。官人立ちより拂ひけり。問「そこ退き候へ。ツレ「あら悲しや君の御花筐をうち落されて候はいかに。シテ「何と君の御花筐をうち落されたるや。あらいまはしの事や候。ワキ「いかに狂女。持ちたる花籠を君の御花筐とて渴仰するは。そも君とは誰が事を申すぞ。シテ「事新しき問事かな。此君ならで日の本に。また異君のましますべきか。ツレ、「われらは女の狂人なれば。知らじと思し召さるゝか。忝くも此君は。應神天皇五世の御孫。」

過ぎし頃まで北國の味真野と申す山里に。シテ、男大迹の皇子と申ししが。ツレ、今此國王
 穂の都に。シテ、繼體の君と申すとかや。ツレ、さればかほどにめでたき君の。シテ、御花筐を恐
 もなさで。ツレ、うち落し給ふ人人こそ。シテ、われよりも猶物狂よ。地、恐ろしや。恐ろしや。
 世は末世に及ぶといへど。日月は地に落ちず。まだ散りもせぬ花筐を。あらけなやあらかれの土
 に落し給は。天のともが忽ちに。罰あたり給ひて。わが如くなる狂氣して。友の物狂と云はれ
 させ給ふな。人に云はれさせ給ふな。シテ、かやうに申せば。地、かやうに申せば、現なき花筐の
 と言とやおぼすらん。此君未だ其頃は。皇子の御身なれど。朝毎の御勤に花を手向け禮拜し。南無
 や天照皇太神宮天長地久と。稱へさせ給ひつ。御手を合させ給ひし。御面影は身に添ひて。
 忘れ形見までも(現世流にては此間に「お」の字を添へて「お」の引音の音尾を敬稱の「御」となつかしや戀ひしや。シテ、陸奥の安積の沼の花がすみ。地、かつ見し人を戀草の。忍ぶもちすり誰ゆゑぞ。亂心は君のため。こゝに來てだに隔ある。月の都は名のみして。袖にもうつされず。又手にも取られず。唯徒に水の月を望む猿の如くにて。叫び臥して泣き居たり。叫び臥して泣き居たり。

ワキ、いかに狂女。宣言にてあるぞ。御車近う参りて。いかにも面白う狂うて舞ひ遊び候へ。觀
 覽あるべきとの御事にてあるぞ。急いで狂ひ候へ。シテ、嬉しやさては及びなき。御影を拜みや申
 すべき。地、いざや狂はんもるともに。シテ、ツレ、二人、御幸に狂ふ離子こそ。地、御前を拂ふ袂なれ。
 シテ、忝き御諭なれども。いかなれば漢王は。地、李夫人の御別を歎き給ひ。朝政神さびて。
 夜の御殿も徒に。唯思の涙御衣の袂をぬらす。シテ、又李夫人は紅色の。地、花の粧ひ衰へて。
 萎る、露の床の上。ちり(「塵」の字か)の鏡の影を恥ぢて。終に帝に見え(「天」か)給はずして去り給ふ。帝
 深く歎かせ給ひつ。其御形を甘泉殿の壁に寫し。われも畫圖に立ち添ひて。明暮歎き給ひけ
 り。されどもなかなか。御思は増されども。物云ひ交はす事なきを。深く歎き給へば。李少と申
 す太子(李少は太子の名に非ず。原作者の誤りたるなり。)の。いとけなくましますが。父帝に奏し給ふやう。シテ、李夫人は本はこ
 れ。地、上界の壁妾。くわすい(四字文字)國の仙女なり。一旦人間に生るとは申せども。終に
 本の仙宮に歸りぬ。泰山府君に申さく。李夫人の面影を。暫、こゝに招くべしとて。九華帳の中
 にして。反魂香をたき給ふ。夜更け人靜まり。風冷しく月秋(或は地字の)なるに。それかと思ふ面影

の。あるかなきかにかげろへば。猶いやましの思草。葉末に結ぶ白露の。手にもたまらで程もな
く。唯徒に消えぬれば。漂渺悠揚として又。尋ねべき方なし。悲しさのあまりに。地李
夫人の住み馴れし。甘泉殿を立ち去らず。空しき床をうち拂ひ。古き釜。古き枕。ひとり袂をか
たしく。

ワキ、同「宣言にてあるぞ。其花筐を参らせ上げ候へ。シテ、餘りの事に胸ふさがり。心空なる花
筐を。恥かしながら参らす。ワキ、帝はこれを観覽あつて。疑もなき田舎にて。御手に馴れし
御花筐。同同じく留め置き給ひし。御玉章の恨を忘れ。狂氣を留めよ本の如く。召し使は
んとの宣言なり。シテ、げにありがたや御惠。直なる御代にかへるしるしも。思へば保ちし筐の
徳。ワキ、かれこれともに時に逢ふ。シテ、花の筐の名をとめて。ワキ、戀ひしき人の手馴れし物を。
シテ、形見と名づけそめしこと。ワキ、此時よりぞ。シテ、始まりける。地、ありがたやかくばかり。情
の末を白露の。惠に洩れぬ花筐の。御かごとまします。君の御心ぞありがたき。
地、御遊も既に時過ぎて。御遊も既に時過ぎて。今は還幸なし奉らんと。供奉の人人。御車や

りつづけ。もみち葉散り飛ぶ御前を拂ひ。拂ふや袂も山風に。誘はれゆくや玉穂の都。誘はれゆく
や玉穂の都に。盡させぬ契ぞありがたき。

七十 富士太鼓

ワキ 富士の妻 子方 富士の女兒
ワキ 官人 臣 臣 從 從 者

ワキ(官人)「これは萩原の院に仕へ奉る臣下なり。さても内裏に七日の管絃の御座候により。天王
寺より淺間と申す樂人。これは雙びなき太鼓の上手にて候を召し上せられ。太鼓の役を仕り候と
ころに。又住吉より富士と申す樂人。これも劣らぬ太鼓の上手にて候が。管絃の役を望みまかり
上りて候。此由開し召され。富士淺間何れも面白き名なり。さりながら古き歌に。信濃なる淺
間の嶽も燃ゆなれば(古板木以下者もゆるといへばとあれども「老」の字の語ひはなにより考ふるも後人の改)。御富士の煙のか
ひやなからんと聞く時は。名こそ上なき富士なりとも。あつばれ淺間はまさうする(五字「まさう」もの
をと勅詔ありしにより。重れて富士と申す者もなく候。さる程に淺間此由を聞き。憎き富士がふ
るまひかなとて。かの宿所に押し寄せ。あへなく富士を討つて候。眞に不便の次第にて候。定めて

富士がゆかりのなき事は候まじ。若し尋ね来りて候はら。形見を遣はさばやと存じ候。

シテ(富士の妻)子方(富士の女)思馬(雲の上)なほ遙かなる。雲の上なほ遙かなる。富士のゆくへを尋ねん。シテ

「これは津の國住吉の樂人。富士と申す人の妻や子にて候。さても内裏に七日の管絃のましますに

より。天王寺より樂人召され参る由を聞き。わらはが夫も太鼓の役。世に隠れなければ。望み申さ

ん其ために。都へ上りし夜の間の夢。心にかゝる月の雨。身を知る袖の涙かと明かしかれたる夜

もすがら。寝られぬまゝに思ひ立つ。寝られぬまゝに思ひ立つ。雲居やそなた古里は。あとなれ

や住吉の。松の隙より眺むれば。月落ちかゝる山城も。はや近づけば笠をぬぎ。八幡に祈り掛帯

の。結ぶ契の夢ならで。現に逢ふや男山。都に早く著きにけり。都に早く著きにけり(此間にシテと庄

の問答歎)。

ワキ、詞「富士がゆかりと申すは何くにあるぞ。シテ「これに候。ワキ「さてこれは富士がため何にてあ

るぞ。シテ「恥かしながら妻や子にて候。ワキ「のう富士は討たれて候よ。シテ「何と富士は討たれた

ると候や。ワキ「なかなかのこと。富士は淺間に討たれて候。シテ「誰にすればこそ思ひ合せし夢の占。

重ねてとはいなかなか。淺間に討たれ情なく。地「さしも名高き富士はなど、煙とはなりぬらん。

今は歎くに其かひも。なき跡に残る思子を。見るからにいと猶。進む涙はせきあへず。

ワキ、詞「今は歎きてもかひもなき事にてあるぞ。これこそ富士が舞の装束候よ。それ人の歎には。

形見に過ぎたることあらじ。これを見て心を慰め候へ。シテ「誰に今までは行くへも知らぬ都人の。

わらはな田舎(或はでん)の者とおぼしめして。偽り給ふと思ひしに。眞にしるき烏甲。月日も變らぬ

狩衣の。疑ふ所もあらばこそ。痛はしやかな人出で給ひし時。みづから申すやう。天王寺の樂人は

召にて上りたり。御身は勅詔なきに。おしく参れば下として。上を計るに似たるべし。其上御身

は當社地給の樂人にて。明神に仕へ申す上は。何の望のあるべきぞと申ししを。知らぬ顔にて出

で給ひし。地「其面影は身に添へど。眞の主は亡き跡の。忘れ形見ぞよしなき。かねてより。かく

あるべきと思ひなば。かくあるべきと思ひなば。しうこ(拾葉抄に「秋の字を)が手を出だし。はんらう

(拾葉抄に「秋の字を)が涙にても止むべきものを今更に。神ならぬ身を恨みかこち。歎くぞ哀なる。歎

くぞ哀なりける。

シテ、調「あら恨めしやいかに姫。あれに夫の敵の候ぞやいざ討たう。子方、調「あれは太鼓にてこそ候へ。思の餘りに御心亂れ。條なき事を仰せ候ぞや。あらあさましや候。シテ、調「うたての人の云ひ言や。あかて別れしわが夫の。失せにし事も太鼓故。誦た、恨めしきは太鼓なり。夫の敵よいざ打たう。子方、げに「理や(今は「なり」父御前に。別れし事も太鼓ゆる。さあらば親の敵ぞかし。打ちて恨を晴らすべし。シテ「わらはがためには夫の敵。いざやれらはんもるともに。子方「男の姿狩衣に。物の具なれや烏甲。シテ「恨の敵打ちなさめ。子方「鼓を苦に。シテ「埋まんとして。地「寄するや関の聲立てし。秋の風より冷ましや。シテ「うてやうてやと攻鼓。地「あらさてこりのなく音やな。猶も思へば腹たちや。猶も思へば腹立ちや。けしたる姿に引きかへて。心言葉も及ばれぬ。富士が幽霊來ると見えて。よしなの恨やもどかしと。太鼓うちたるや。(舞)

シテ、調「持ちたる撥をば劍と定め。地「持ちたる撥をば劍と定め。曠患の焔は太鼓の烽火の。天にあがれば雲の上人。眞の富士風に絶えずもまれて裾野の櫻。四方へばつと散るかと思えて。花衣さす手も引く手も。俗人の舞なれば。太鼓の役は本より聞ゆる。名の下空しからず。たぐひなやなつ

かしや。

地「調「げにや女人の悪心は。煩惱の雲晴れて。五常樂を打ち給へ。シテ「修羅の太鼓は打ちやみぬ。此君の御命。千秋樂と打たうよ。地「さて又千代や萬代と。民も榮えて安穩に。シテ「太平樂を打たうよ。地「日も既に傾きぬ。日も既に傾きぬ。山の端を眺めやりて。招き返す舞の手の。嬉しや今こそ思ふ敵は討ちたれ。打たれて音をや出だすらん。われには晴る、胸の煙。富士が恨を晴せば。涙こそ上なりけれ。これまでなりや人人よ。これまでなりや人人よ。暇申してさらばと。俗人の姿烏甲皆ぬき捨てし。わが心亂れ笠、亂れ髪。かゝる思は忘れじと。又立ち返り太鼓こそ憂き人の形見なりけれと。見置きてぞ歸りける。跡見置きてぞ歸りける。

七十一 皇

帝

古名

明王鏡
 玄宗
 聖德太子(前は老翁)
 天智天皇
 大和天皇
 大和天皇
 大和天皇

ワキ(玄宗皇帝)「春は春遊に入つて夜は夜を専とし。後宮の佳麗三千人。三千の寵愛一身にあけ。かぐ類なき貴妃の紅色。芙蓉の紅色かへて。未央の柳の力もなし。地「た、弱弱とふし

柴の。露の命もいかならん。心づくしの春の夜の。心づくしの春の夜の。木の間の月も朧にて。
 雲居に歸る雁がれも。わが如くにや鳴き渡る。霞のうちの榊櫻。ひとへに惜しき姿かな。ひとへ
 に惜しき姿かな。

シテ(若翁)「いかに奏聞申すべき事の候。ワキふしぎやな宮中静まり物さびて。心を澄ますをりふし
 に。御階の下に来るを見れば。さもふしぎなる老人なり。そも汝はいかなる者ぞ。シテ「これは伯父
 の御時に。鐘馗といひし者なりしが。及第適はね事を歎き。玉階にて頭を打ち碎き。身を徒
 になしし者の。亡心これまで参りたり。ワキ「げにさる事を聞きしなり。其ま、都のうちに葬め。贈
 官せられし大臣の。其亡心は何のため。唯今こゝに来れるぞ。シテ「今は此句の前「げによく擧ろしる」贈
 官のみか縁袍を死骸に蒙る(二字語上には昔より取りて「はむる」とせり。之「舊恩」に。今かく君の寵愛し給
 ふ。貴妃の病を平けて。奇特を見せしめ申すべし。然らば件の明王鏡を。かの御枕に立て置き
 給はば。無必ず姿を現さんと。地「直奏かたく申し上げ。直奏かたく申し上げ。われ通力を起
 しつゝ。楊貴妃の花の姿。誘ふ風を静めんと。申しもあへず其姿。御階の下に失せにけり。御階

の下に失せにけり。

ワキ「明「いかに貴妃。今日はいつしか曇る日の。暮る、夕も朧月夜の。暈晴れぬ心はいかなる
 ぞ。貴妃「げにや衣を取り。枕を推すべき力もなく。苦しき心にせきかぬる。涙の露の玉葛。か
 ける姿は恥かしや。ワキ「代るに代る物ならば。かく苦みを見るべきかと。力を添へて木綿四手の。
 貴妃「髪をも上げず。ワキ「ひれふすや。地「翠翹金雀とりどりに。挿頭の花もうつろふや。枕
 波(二字或は當らざるか。)の斜紅の世に類なき姿かな。げにや春雨の。風に隨ふ海棠の。眠れる花の如く
 なり。

然るに明皇。榮花を極め世を保ち。花を重んじ給ふ故。類なき貴妃にかく。姿をこめて年月の。
 春宵短きを苦みて。日高く起き出で。朝政も絶えだえに。移る方なき中なれど。ワキ「の
 がれ難しや世の中は。地「思はぬ障り有明の。月の都の舞樂まで。學び残せる方もなく。秘曲傳
 へし笛竹の。ことぶきなれやこの契。天長く地久しくて盡くる時もあるまじ。
 ワキ「御「げに今思ひ出だしたり。彼老人の教の如く。明王鏡を取り出だし。彼御枕に置くべき

なり。ワキツン(大臣)勅 説 尤 然るべしと。月卿雲客一同に。明王鏡を取り出だし。御枕近き御几帳に。立て添へてこそ置きたりけれ。地蔵かきて暮れゆく雲の足。かきて暮れ行く雲の足。漂ふ風も冷しく。身の毛もよだつ折ふしに。不思議や鏡の其うちに。鬼神の姿を映りける。地蔵九華の帳を押し除けて。九華の帳を押しつけて。かの御枕により竹の。笛をおつ取りさし上げて。勇み喜ぶ其氣色。鏡に映り見えければ。帝はこれを觀覽あつて。さては病鬼よ遁さじと。劔を抜いて立ち給へば。天に上り地に又下り。飛行自在を現して。帝に向ひ怒をなせば。劔を振り上げ斬り給へば。御殿の柱に立ち隠れて姿も見えず失せにけり。ワキ、地蔵不思議や曇る空晴れて。宮中光り輝きて。地鳴動するこそ恐ろしけれ。後ジテ(地蔵)もそもこれは武徳年中に贈官せられし鐘馗大臣の精靈なり。謂さても此君寵愛し給ふ貴妃の病を平げんと。通力を以て奇瑞を見す。南無天行 星王。我劔降鬼と。秘文を稱へ駒に乗じ。虚空を翔つて參内せり。

地、悪鬼はこれを見るよりも。悪鬼はこれを見るよりも。驚き騒ぎ彼真木柱に隠れけるを。鐘馗の精靈馬より下り立ち。利劔を提げ袂をかざし。明王鏡に向ひ給へば。鬼神の姿は隠れもなし。鬼神は通力自在も失せて。鬼神は通力自在も失せて。起きつ轉びつ走り出づるを。追つ詰め給へば御殿を飛び下り。六宮の玉階に走り上るを。遁さじものなと引き下し。利劔を振り上げづだに斬り放し。庭上に投げ捨て。忽に。貴妃も息災猶此君の惠を仰き守の神となるべしと。玉體を拜し奉り。玉體を拜し奉りて。姿は夢とぞなりにける。

七十二 通 盛

ワキツン(平運使(前は運使)) 小宰相局(前は運使)

ワキ(僧)「これは阿波の鳴門に一夏を送る僧にて候。さても此浦は。平家の一門果て給ひたる所なれば痛はしく存じ。毎夜此磯邊に出でて御經を讀み奉り候。唯今も出でて用ひ申さばやと思ひ候。磯山に。暫し岩根の待つ程に。しばし岩根の待つ程に。誰が夜舟とは白波に。梅音ばかり鳴門の浦靜なる今宵かな。浦靜なる今宵かな。」

ツレ(遠文)「すは遠山寺の鐘の聲。此磯近く聞え候。シテ(遠文)「入相ごさめれ急が給へ。ツレ「程なく暮る、日の數かな。シテ「昨日過ぎ。ツレ「今日と暮れ。ツレ「明日亦かくこそあるべけれ。ツレ「されども老に頼まぬは。シテ「身の行く末の日數なり。シテ「ツレ二人「いつまで世をばわたつ海の。あまりに隙も波小舟。ツレ「何を頼みに老の身の。シテ「命のために。シテ「ツレ二人「つかふべき。ツレ「うきながら心の少し慰むは。心の少し慰むは。月の出汐の海士小舟。さも面白き浦の秋の氣色かな。所は夕浪の鳴門の沖に雲つづく。淡路の島や離れえぬ。浮世の業を悲しき。浮世の業を悲しき。シテ「暗濤月を埋んで清光なし。ツレ「舟に焚く海士の篝火更け過ぎて。シテ「ツレ二人「苦よりくる夜の雨の。蘆間に通ふ風ならでは。音するものも波枕に。夢か現か御經の聲の。嵐につれて聞ゆるぞや。楫音を静め唐櫃を抑へて。聽聞せばやと思ひ候。ツレ「泊定めぬ海士の釣舟に候よ。ワキ「さもあらば思ふ仔細あり。此磯近く寄せ給へ。シテ「仰に隨ひさし寄せ見れば。ワキ「二人の僧は巖の上。シテ「漁の舟は岸の陰。ワキ「蘆火の影をかりそめに。御經を開き讀誦する。シテ「ありがたや漁する業は蘆

火と思ひしに。ワキ「よき燈火に。シテ「鳴門の海の。シテ「ワキ二人「弘誓深如海層劫。不思議の機縁によりて。五十展轉の隨喜功德品。地げにありがたや此經の。おもてぞ暗き浦風も。蘆火の影を吹き立て。聽聞するぞありがたき。龍女變成と聞く時は。龍女變成と聞く時は。姥も頼もしや。翁は云ふに及ばず。願も三つの車の蘆火は清くあかすべし。猶猶御經遊ばせ。猶御經遊ばせ。ワキ「頭「あら嬉しや候。火の光にて心靜に御經を讀み奉りて候。まづまづ此浦は。平家の一門果て給ひたる所なれば。毎夜此磯邊に出で、御經を讀み奉り候。取り分きいかなる人此浦にて果て給ひて候ぞ。委しく御物語り候へ。シテ「仰の如く或は討たれ。又は海にも沈み給ひて候。中にも小宰相の局こそ。や。諸共に御物語り候へ。ツレ「馬さる程に平家の一門。馬上を改め。海士の小舟に乗り移り。月に棹さす時もあり。シテ「だにも都の遠き須磨の浦。シテ「ツレ二人「思はぬ敵に落されて。げに名を惜しむ武士の。殿取蘆島や淡路海。阿波の鳴門に著きにけり。ツレ「さる程に小宰相の局乳母を近づけ。シテ「ツレ二人「いかに

何なにとか思おもふ。われ頼たのもとき人ひと人は都みやこに留とどまり。通盛みちもりは討うたれぬ。誰たれを頼たのみでながらふべき。此海このうみに沈しづまんとて。主従しうじゆう泣なく泣なく手てを取り組くみみ舟端ふなはたに臨のぞみ。ツレツレさるにてもあの海うみにこそ沈しづまらずらぬ。地ち沈しづむべき身みの心こころにや。涙なみだのかれて浮うかむらん。西にしはと問とへば月の入つきいる。西にしはと問とへば月の入つきいる。其方そなたも見みえず大方おほかたの。春はるの夜よや霞かすむらん。涙なみだも共に曇くもらん。乳母めのと泣なく泣なく取り附つきて。此時このときの物思おもひ。君きみ一人ひとりに限かぎらず。思おもひ召めし止とまり給たまへと御衣おんきぬの袖そでに取り附つく。振り切り海うみに入いると見て。老人らうじんも同じおななじ満湖みんこの底そこの水屑みくづとなりけり。底そこの水屑みくづとなりけり。(中入)
ワキ二人ふたり、此この八幡はちまんの誓ちかひにて。此この八幡はちまんの誓ちかひにて。一人ひとりも洩もれささじの。方便ほうべん品ほんを讀とく誦じゆする。ワキ如に我が昔むかし所願しよがん。

後のちシテ(平通盛の返馬)今こん者じや已い満足まんぞく。ワキ化け一切いっさい衆生しゆじゆう。シテ皆かい令りやう入に佛道ぶつだうの。地ち通盛みちもり夫婦ふうふ御經おきやうに引ひかれて。立たち歸かへる波なみの。シテあらありがたの御法みのりやな。ワキ、驚おどろき不思議ふしぎやなさも驚おどろめける御姿おんすがたの。波なみに浮うかみて見え給たまふは。いかなる人ひとにてましますぞ。後のちシテ(小宰相局の返馬)名なばかりはまた消きえ果はてぬ徒波あだなみの。阿波あはの鳴門なるとに沈しづみばてし。小宰相こさいしやうの局つほねの齒

靈れいなり。ワキ今いま一人ひとりは甲冑かぢうを帶たいし。兵具ひやうぐいみじく見え給たまふは。いかなる人ひとにてましますぞ。シテこれば生田いくたの森もりの合戦あひせんに於おいて。名なを天下てんかに掲あげ。武將ぶしやうたつし誓ちかを。越前えちぜんの三位さんみ通盛みちもり。昔むかしを語かたらん其ために。これまで現あられ出いでたるなり。

地ち、前まへは海上うみうへは嶮けはしき鶴越ひよどりこえ。眞まことに鳥とりならでは翔かり難がたく。獸けだものも足あしを立つべき地ちにあらず。シテ唯ただ幾度いくたびも大手おほての陣ちんを。心こころもとなきぞとて。地ち、宗徒むねとの一門いちもんさし遣つはさる。通盛みちもりも其その隨ずい一いつたりしが。忍しのんで我が陣ちんに歸かへり。小宰相こさいしやうの局つほねに向むかひ。すでに軍いくさ明日あしたに極きはまりぬ。痛いたはしや御身おんみは通盛みちもりならで此このうち。頼たのむべき人ひとなし。われともかくもなるならば。都みやこに歸かへり忘れずば。亡なき跡あと弔とらひてたび給たまへ。名殘惜なごりをしみの(今は此間に「お」を添へて読よ。前語)盃さかづき。通盛みちもり酌しやくをとり。さす盃さかづきの宵よひの間まも。轉うた寝ねなりし睦言むつごは。たとへば唐土からこしの。項羽かうう高祖かうその攻せめを受け。數行すかう虞氏ぐしが涙なみだもこれにはいかで優やさるべき。燭ともしび暗くらうして。月の光つきひかりにさし向むかひ。語かたり慰なぐさむ處ところに。シテ、舍しや弟ていの能登のとの守かみ。地ちはや甲冑かぢうをよるひつ。通盛みちもりはいづくにぞ。など遅おそなはり給たまふぞと。呼よばはりし其聲そのこゑの。あら恥はづかしや能登のとの守かみ。わが弟おとうとといひながら。他人たにんより猶なほ恥はづかしや。暇申いとままうしてさら

ばとて。行くも行かれぬ一の谷の。所から須磨の山の。二後髪ぞ引かるい。シテ、「さる程に合戦破
れしかば(五字今は「も半なり」と断よ。)但馬の守經政もはや討たれぬと聞ゆ。ワキ、「さて薩摩の守忠度の果は
いかに。シテ、岡部の六彌太忠澄と組んで討たれしかば。天晴通盛も名ある侍もがな。討死せ
んと待つ所に。すばあれを見よ好き敵に。地、近江の國の住人に。近江の國の住人に。木村の源五
重章が鞭を揚げて驅け来る。通盛少しも騒がす。抜き設けたる太刀なれば。甲の眞向ちやうと
打ち。返す太刀にてさし進べ。共に修羅道の苦を受くる。憐れ垂れ給ひ。よく申ひてたび給へ。
讀誦の聲を聞く時は。讀誦の聲を聞く時は。惡鬼心を和らげ。忍辱慈悲の姿にて。菩薩もこゝに
來迎す。成佛得脱の。身と成り行くぞありがたき。身と成り行くぞありがたき。

七十三 槍 垣

ワキ(槍垣の國(前は老女))

ワキ(槍垣)「これは肥後の國岩戸と申す山に居住の僧にて候。さても此岩戸の觀世音は。靈驗殊勝
の御事なれば。暫く參籠し所の致景を見るに。萬南西は海雲漫漫として萬古心のうちなり。

人稀にして慰み多く。致景あつて郷里を去る。眞に住むべき靈地と思ひて。三年が間は居住仕
りて候。明こゝに又百にも及ぶらんとおぼしき老女。毎日關佩の水を汲みて來り候。今日も來
りて候はば。いかなる者ぞと名を尋ればやと思ひ候。

シテ(老女)「影白河の水汲めば。かげ白河の水くめば。月も秋や濡らすらん。それ籠鳥は雲を戀
ひ。歸雁は友を忍ぶ。人間も亦これ同じ。貧家には親知少く。賤しきには故人疎し。老悴衰へ形
もなく。露命窮まつて霜葉に似たり。流るゝ水のあはれ世の。其理を汲みて知る。こゝは所
も白河の。こゝは所も白河の。水さへ深き其罪を。浮みやすると捨人に。値遇を運ぶ足引の。山下
庵に著きにけり。山下庵に著きにけり。同じつもの如く今日もまた御水上げて参りて候。
ワキ「毎日老女の歩み返す返すも痛はしうこそ候へ。シテ、「せめてはがやうの事にてこそ。少し
の罪をも遁るべけれ。亡からん跡を申ひ給ひ候へ。明明けなば又参り候べし。御暇申し候はん。
ワキ「暫候(今一字断)。御身の名を名のり給へ。シテ、「なにと名を名のれと候や。ワキ「なかな
かの事。シテ「これは思ひもよらぬ仰かな。かの後撰集の歌に。萬年経れば我が黒髪も白河の。同じ

づはくむまで老いにけるかなと。詠みしもわらはが歌なり。昔筑前の大宰府に。庵に檜垣しつ
 らひて住みし白拍子。後には衰へて此白河の邊に住みしなり。ワキ「誰げにさる事を聞きしなり。
 そのしらかはいほり。其白河の庵のあたりな。藤原の興範通りし時。シテ「水やあると乞はせ給ひし程に。其水汲み
 て參らするとて。ワキ「みづはくむとは。シテ「詠みしなり。地「そもみづはくむと申すは。そもみ
 づはくむと申すは。唯白河の水にはなし。老いてかゝめる姿をば。みづはくむと申すなり。其し
 るしなも見給はば。かの白河の邊にて。我が跡用ひてたび給へと。夕まぐれして失せにけり。夕ま
 ぐれして失せにけり。

ワキ「誰「さては古の檜垣の女假に現れ。われに詞を交しけるぞや。一つは末世の奇特ぞと。思ひ
 ながらも尋ね行けば。誰ふしぎや早く日も暮れて。ふしぎや早く日もくれて。河霧深く立ち籠
 る。陰に庵の燈火の。ほのかに見ゆるふしぎさよ。ほのかに見ゆるふしぎさよ。

後シテ「(檜垣の)「誰「あらありがたの用ひやな。あらありがたの用ひやな。風縁野になさまつて煙條
 直し。雲巖頭に定まつて月桂圓なり。朝に紅顔あつて。世路に樂むといへども。地「夕に

は白骨となつて郊原に朽ちぬ。シテ「有爲の有様。地「無常の眞。シテ「誰か生死の理を論せざる。
 地「いつを限る習ぞや。老少と云つば。分別なし。變るを以つて期とせり。誰か必滅を期せざら
 ん。誰かばこれを期せざらん。

ワキ「誰「ふしぎやな聲を聞けばありつる人なり。同じくは姿を現し給ふべし。御跡用ひて參らせ
 ん。シテ「さらば姿を現して御僧の御法を受くべきなり。人にな願し給ひそとよ。ワキ「なかなか
 人に願す事あるまじ。はやはや姿を見え給へ。シテ「涙曇りの顔ばせば。それとも見えぬ衰
 を。誰白河のみづはくむ。老の姿ぞ恥かしき。ワキ「あら痛はしの御有様やな。今も執心の
 水を汲み。輪廻の姿見え給ふぞや。はやはや浮み給へ。

シテ「誰「われ古は舞女の譽世に勝れ。其罪深きゆゑにより。今も苦しみを三瀬河に。熱鐵の桶を
 擔ひ。猛火の釣瓶を提げて此水を汲む。其水湯となつて我が身を焼くこと隙もなければども。
 詞「此程は御僧の値遇に引かれて。釣瓶はあれども猛火はなし。ワキ「誰「さらば因果の水を汲み。
 其執心をふり捨てて。とくとく浮み給ふべし。シテ「誰「いでいでさらば御僧のため。此かけ(二)字不

水を汲み乾さば。罪もや淺くなるべきと。ワキ「思も深き小夜衣の。袂の露の玉。津。影。白河の月の夜に。ワキ「底澄む水を。シテ「いざ汲まん。地「釣瓶の水に影落ちて。袂を月や昇るらん。それ残星の鼎には北溪の水を汲み。後夜の爐には南嶺の柴を焚く。シテ「それ氷は水より出でて水よりも寒く。地「青き事藍より出でて藍より深し。本の憂き身の報ならば。今の苦しみ去りもせで。シテ「いや増りぬる思の色。地「紅の涙に身をこがす。釣瓶の懸繩繰り返し憂き古も。紅花の春の朝。紅葉の秋の夕暮も。一日の夢とはやなりぬ。紅顔の粧。舞女の響もいとせめて。さも美しき紅顔の。翡翠の鬘花萎れ。桂の肩も霜降りて。水に映る面影。老悴影沈んで。縁に見えし黒髪は。土水の藻屑塵芥。纏りける身の有様を悲しき。げにやありし世を。思ひ出づればなつかしや。其白河の波かけし。シテ「藤原の興範の。地「其古の白拍子。今一ふしとありしかば。昔の花の袖。今更色も麻衣。短き袖を返し得ぬ。心ぞつらき陸奥の。希婦の細布胸合せす。何とか白拍子。其面影のあるべき。よしよしそれとても。昔手馴れし舞なれば。舞はでも今は適ふまじと。シテ「興範額に宣へば。地「あさましながら麻の袖。露うち拂ひ

舞ひ出だす。シテ「檜垣の女の。地「身のほてを。シテ「水掬ふ釣瓶の繩の。釣瓶の繩の繰り返し。昔に歸れ白河の波。白河の波。白河の。シテ「水の哀を知るゆゑに。これまで現れ出でたるなり。地「運ぶあしたづの。ねなこそ絶ゆれ浮草の。水は運びて参らす。罪を浮めて賜ひ給へ。罪を浮めてたび給へ。

七十四 櫻 川

ワキ 櫻子の母 磯邊寺住僧

ツレ 人商人

ツレ 里人

ワキツレ「人商人問「かやうに候者は。東國方の人商人にて候。われ久しく都に候ひしが。此度は筑紫日向にまかり下りて候。又昨日の暮程に幼き人を買ひ取りて候。かの人申され候は。此文と身の代とな。櫻の馬場の西にて櫻子の母と尋ねて。確に届けよと仰せ候程に。唯今櫻子の母の方へと急ぎ候。此あたりにてありげに候。まづまづ案内を申さばやと存じ候。いかに案内申候。櫻子の母の渡り候か。シテ「櫻子の母問「誰にて渡り候ぞ。ツレ「さん候。櫻子の御方より御文の候。又此代物を(今は此間にたしか)届け申せと仰せ候ほどに。これまで持ちて参りて候。かまひて確に渡し(今は二字)申す

にて候。シテ、あら思ひ寄らすや。まづ(今は)文を見うするにて候。誰さてもさても此年月の御有様。見るもあまりの悲しさに。商人商人に身を賣りて。東の方へ下り候。のう其子は賣るまじき子にて候ものな。や。あら悲しや。はや今の人も行き方知らずなりて候はいかに。是を出離の縁として。御様をまかへ給ふべし。唯返す返すも御名残こそ惜しう候へ。地名残惜しくは何しにか。添はで母には別るらん。ひとり伏屋の草の戸の。ひとり伏屋の草の戸の。明し暮して憂き時も。子を見ればこそ慰むに。さりとは我が頼む。神も木華開耶姫の。御氏子なるものを。櫻子止めてたび給へ。さなきだに住みうかれたる古里の。今は何にか明暮を。堪へて住むべき身なれば。我が子の行くへ尋ねんと。泣く泣く迷ひ出でて行く。泣く泣く迷ひ出でて行く。(中入)

ワキ(磯邊寺住僧)頃待ちえたる櫻狩。頃待ち得たる櫻狩。山路の春に急がん。此れは常陸の國磯邊寺の住僧にて候。又これに渡り候幼き人は。いづくとも知らず愚僧を頼む由仰せ候程に。師弟の契約をなし申して候。又此あたりに櫻川とて花の名所の候。今を盛の由申し候程に。幼き人を伴ひ。唯今櫻川へと急ぎ候。筑波山。このもかのもの花盛。このもかのもの花盛。雲の

林のかげ茂き。緑の空もうつろふや。松の葉色も春めきて。嵐も浮む花の波。櫻川にも著きにけり。櫻川にも著きにけり。

ワキ(里の男)いかに申し候。何とて遅く御出で候ぞ待ち申して候。ワキさん候皆御供申し候程に。さて遅なほりて候。あら見事や候。花は今を盛と見えて候。ワキさん候なかなかの事は今は今が盛にて候。又こゝに面白き事の候。女物狂の候が。美しき揃ひ網を持ちて。櫻川に流るる花をすくひ候が。けしからず面白う狂ひ候。これに暫御座候ひて。此物狂を幼き人にも見せ参らせられ候へ。ワキさん候その物狂を此方へめされ候へ。ワキさん候心得申し候。やあ、かの物狂に。いつもの如く揃ひ網を持ちて。此方へ来れと申し候へ。

後(櫻子の母)狂人誰いかにあれなる道行人。櫻川には花の散り候か。何散りがたになりたるとや。悲しやさなきだに。行くことやすき春の水の。流るる花をや誘ふらん。花散れる水のままにとめくれば。山にも春はなくなりけりと聞く時は。少しなりとも休らばば。花にや疎く雲の色。櫻花。櫻花。散りにし風の名残には。地氷なき空に波をたつ。シテ、思も深き花の

雪。地散るは涙の川やらん。シテこれに出でたる物狂の。故郷は筑紫日向の者。さも思ひ子を失ひて。思ひ亂る心筑紫の。海山越えて箱崎の。浪立ち出でて須磨の浦。又は駿河の海邊ぎて。常陸とかやまで下り來ぬ。げにや親子の道ならずは。遙けき旅を。いかにせん。又名に流れたる櫻川とて。さも面白き名所あり。馬別れし子の名も櫻子なれば。形見といひ折柄といひ。名もなつかしき櫻川に。地散り浮く花の雪を汲みて。みづから花衣の。春のかたみに残さん。花鳥の。立ち別れつつ親と子の。立ち別れつつ親と子の。行くへも知らで天離る。鄙の長路に衰へば。たとひ逢ふとも親と子の。面忘れせばいかならん。うたてや暫こそ。冬ごもりして見えずとも。今は春へなるものを。わが子の花はなど咲かぬ。わが子の花はなど咲かぬ。ワキ、此物狂の事にてありげに候。立ちよりて尋ねばやと思ひ候。いかにこれなる狂女。おこの國里はいづくの人ぞ。シテこれは遙の筑紫の者にて候。ワキそれは何とてかやうに狂亂とはなりたるぞ。シテ夫には死して別れ(今は此句を添はず、大句)。唯一人ある忘れ形見の縁子に生きて離れて候程に。思ひが亂れて候。ワキあら痛はしや候。又見申せば美しき揃ひ網をもち。流る、

花をすくひ。あまつさへ湯仰の氣色見え給ひて候。これ(今は此二字を省き前)は何と申したる事にて候ぞ。シテさん候わが故郷の御神をば。木華開耶姫と申して。御神體は櫻木にて御入り候。されば別れし我が子も其御氏子なれば。櫻子と名づけ育てしかば。馬神の御名も開耶姫。尋ねる子の名も櫻子にて。又此川も櫻川の。名もなつかしき。花の散る(二字今は各流とも「ちり」と流す。之はより生じた)な。あたにもせじと思ふなり。ワキ謂を聞けば面白や。げに何事も縁はありけり。さばかり遠き筑紫より。此東路の櫻川まで。下り給ふも縁よのう。シテ、此川の名に負ふこと。遠きにつきての名譽あり。かの貫之が歌はいかに。ワキ、昔にげに昔の貫之も。遙けき花の都より。シテ、未だ見もせぬ常陸の國に。ワキ、名も櫻川。シテ、ありと聞きて。地、常より。春へになれば櫻川。春へになれば櫻川。波の花こそ間なく寄すらめと詠みたれば。花の雪も貫之も古き名のみ残る世の。櫻川瀬瀬の白浪しげければ霞ぞ(一字今は「う」と流す。假名の似たるよ)流す信太の浮島の。浮め浮め水の花。げに面白き河瀬かな。げに面白き河瀬かな。ワキ、いかに申し候。此物狂は面白う狂ふと仰せ候が。今日は何とて狂ひ候はぬぞ。ワキ、

ん候さくららははな狂くるはするやうが候まう。櫻川さくらがはに花はなの散ちると申まうし候まうへば狂くるひ候ほど程ほどに。狂くるはせて御目おんめに懸かけうするに候まう。ワキいそ急おんくるいで御狂おんくるはせ候まうへ。ワキいそ心こころ得え申まう候まう。あら笑せうし止しや。俄にはかやまおろしに山風やまかぜのふいて花はなを散ちらし候まうよ(今は親世流に山おろしのして)。シテよしなき事夕山風ゆふやまかぜの。奥おくなる花はなを誘さそふ(こさめれ)。流ながれぬ先さきに花はなすくばん。ワキいそ懸かげにげに見みれば山風やまかぜの。木々きぎの梢こすまに吹ふき落おちて。シテ花の水層は白妙花はなの水層みかさしうたへは白妙さきの。ワキいそ波なみかと思みれば上うへより散ちる。シテ櫻か。ワキいそ雪ゆきか。シテ波か。ワキいそ花はなか。シテ浮き立つ雲くもの。ワキいそ河風かはかぜに。地ち散ちれば波なみも櫻川さくらがは。散ちれば波なみも櫻川さくらがは。流ながる花をすくばん。シテ花の下に歸らん事を忘れ水の花はなの下もとに歸かへらん事ことを忘わすれ水みづの。地ち雪ゆきを受うけたる花はなの袖そで。シテそれ水流れそれ水流みづながれ(三文字はス井リウと流を附せりし爲の誤なり)。花はな落おちて春はる永とこ久しなへにあり。地ち月つき冷すましく風かぜ高たかうして鶴つる歸かへらず。シテ岸花岸がき花はな紅べにに水みづを照てらし。洞樹どうじゆ縁ゆかりに風かぜを合あむ。地ち山花さんくわ開ひらけて錦にしきに似にたり。洞水かんすゐ湛たへて藍あかの如ごとし。シテ面面おも白しろや。思おもはずこころにうかれきで。地ち名なもなつかしみ櫻川さくらがはの。一樹いちじゆの蔭かげ一河いちがの流ながれ。汲くみて知しる名なも所ところから。合あひに合あひなば櫻子さくらこの。これまた他生たしやうの縁えんなるべし。げにや年としを經へて。花はなの鏡かがみとなる水は。散ちりかかるとや曇るといふらん。眞散まことちりぬれば。後のちは芥あきたになる花はなと。思おもひ知しる身みもさ

ていかに。われも夢ゆめなるを。花はなのみと見みるぞはかなき。されば梢こすまより。あだに散ちりぬる花はななれば。落おちても水みづの哀あはれとは。いさ白波しらなみの花はなにのみ。馴なれしも今はさきたたぬ悔くわいの八千度やちたひもちどり百千鳥ももちどり。花はなに馴なれゆくあだし身みは。はかなき程ほどに羨うらやまれて。霞かすみを憐あはれつつかみ露かたしを悲かなしこころにのみ聞ききて遙遙はるはると。地ち思おもひ渡わたりし櫻川さくらがはの。浪なみかけて常陸ひたちね帯おびの。かごとばかりに散ちる花はな。あだになさじと水みづをせき。雪ゆきをたたへて浮浪うきなみの。花はなの棚しらみかけまくも。かたじけなしやこれとて。木華このはな開ひらけぬの御神木ごじんはくの花はななれば。風かぜもよぎて吹ふき。水みづも影かげを濁にごすなと。袂たもとをひたし裳裾もすそを萎しならかして。花はなによるべの水みづせきとめて櫻川さくらがはになさうよ。シテあたら櫻のあたら櫻さくらの。とがは散ちるぞ怨うらみなる(此句解あるには)。花はなもうし風かぜもつらし。散ちればぞ誘さそふ。シテ誘へばぞ散る花葛誘さそへばぞ散ちる花はな葛かづら。地ちかけてのみ詠めしは。シテなほ青柳の糸櫻なほ青柳あをやなぎの糸櫻いとさくら。地ち霞かすみの間まには。シテかば櫻かば櫻さくら。地ち雲くもと見みしは。シテ三吉野の三吉野みよしの。三吉野みよしの。川かは淀瀧よどたきつ波なみの。花はなをすくばば若わかし國栖魚くすいぎよやかからまし。又または櫻魚さくらいぎよと聞きくもなつかしや。いづれも白妙しらたへの。花はなも櫻さくらも雪ゆきも波なみもみながらに。すくひ集あつめ持もちたれども。これは木木きぎの花はな。眞まことは我が尋たづぬる櫻子さくらこぞ戀こひしき。我が櫻子さくらこぞ戀こひしき。

地蔵「いかにやいかに狂人の。言の葉聞けばふしぎやな。若しも筑紫の人やらん。シテ今までは誰ともいさや不知火の。筑紫人かとのたまふは。何の御爲に問ひ給ふ。地「何をか今は包むべき。親子の契朽ちもせぬ。花櫻子ぞ御覽せよ。シテ櫻子と。櫻子と。聞けば夢かとも見も分かず。いづれ我が子なるらん。地「三年の日數程古りて。別も遠き親と子の。シテもとの妾は變れども。地「すが見馴れし面だてを。シテよくよく見れば。地「櫻子の。花の顔ばせの。こは子なりけり驚の。あふ時も鳴く音こそ嬉しき涙なりけれ。地「驚かして伴ひ立ち歸り。かくて伴ひ立ち歸り。母をも助け様變へて。佛果の縁となりけり。二世安樂の縁深き。親子の道ぞありがたき。親子の道ぞありがたき。

七十五 山姥

シテ 鬼女山姥 ツレ 鬼女山姥

ワキ(從者)「善き光ぞと影頼む。善き光ぞと影頼む。佛の御寺尋ねん。地「これは都方に住まひ仕る者にて候。又これに渡り候御事は。ひやくま山姥とて隠れなき優女にて御座候。かやうに御名を

申す謂は。山姥の山廻りするといふ事を。曲舞に作り(今作つて)御話ひあるにより。京童の申し慣はして候。又(今は此間に「此頃は」)善光寺へ御参りありたき由承り候ほどに。某御供申し。唯今信濃の國(今は此間に「善光寺を添へ」)へと急ぎ候。高都を出でてさし波や。志賀の浦船がれ行く。末は有乳の山越えて。袖に露散る玉江の橋。かけて末ある越路の旅。思ひやるこそ遙なれ。楢波立つ汐越の。楢波立つ汐越の。安宅の松の夕煙。消えぬ憂き身の罪を切る。彌陀の劔の彌並山。雲路うながす三越路の。國の末なる里とへば。いとど都は遠さかる。境川にも著きにけり。境川にも著きにけり。御急ぎ候ほどに。これははや越後越中の境川に御著きにて候。暫これに御座候ひて。猶猶道の様體を(親世流今は「も」)御尋ねあらうするにて候。(此間に「狂言」)ツレ(鬼女山姥)「げにや常に承る。西方の淨土は十萬億土とかや。これは又彌陀來迎の直路なれば。上路の山とやらんに参り候べし。路とても修行の旅なれば。乗物をばこれに留め置き。徒歩跣足にて参り候べし。道しるべしてたび候へ。ワキ「あら不思議や。暮れまじき日にて候が俄に暮れて候よ。さて何と仕り候べき。

シテ(奥女山姥)のうのうのう族(たびびと)人御宿(おやどま)参らせうのう。河(あ)これは上路(やま)の山(ひと)とて人里(とほ)遠(とほ)き所(ところ)なり。日(ひ)の暮(く)れて候(ま)へば。わらはが庵(いほり)にて一夜(いちや)を明(あ)かさせ給(たま)ひ候(ま)へ。ワキ「あら嬉(うれ)しや候(ま)へ。俄(にわか)に日(ひ)の暮(く)れ前後(ぜんご)を忘(わす)じて候(ま)へ。頼(たの)で参(ま)らうするにて候(ま)へ。

シテ「今宵(こよひ)の御宿(おやどま)参(ま)らすること。取(と)り別(わか)き思(おも)ふ仔細(しさい)あり。河(や)山姥(やまうは)の歌(うた)の一節(ひとふし)諺(ことわざ)ひて聞(き)かせ給(たま)へ。年月(としつき)の望(のぞ)みなり鄙(ひな)の思(おも)ひでと思(おも)ふべし。其(その)爲(ため)にこそ日(ひ)を暮(く)らし。御宿(おんやど)なも参(ま)らせて候(ま)へ。いかさまにも諺(ことわざ)はせ給(たま)ひ候(ま)へ。ワキ「河(や)「これは思(おも)ひも寄(よ)らぬ事(こと)を承(うけたま)り候(ま)ものかな。さて誰(たれ)と見(み)申(まう)されて。山姥(やまうは)の歌(うた)の一節(ひとふし)とは御所望(ごしやぼう)候(ま)ぞ。シテ「いや何(なに)をか包(つ)み給(たま)ふらん。あれにまします御事(ごんこと)は。ひやくま山姥(やまうは)とて隠(かく)れなき優女(いうぢよ)にてはましますや。まづ此歌(このうた)の次第(しだい)とやらんに。河(や)よし足引(あしひき)の山姥(やまうは)が。山廻(やまめぐ)りすると作(つく)られたり。あら面白(おもしろ)や候(ま)へ。河(や)「これは曲舞(くせまひ)によりての異名(いみやう)。さて真(まこと)の山姥(やまうは)をばいかなる者(もの)とか知(し)るし召(め)されて候(ま)ぞ。ワキ「山姥(やまうは)とは山(やま)に住(す)む鬼女(きぢよ)とこそ曲舞(くせまひ)にも見(み)えて候(ま)へ。シテ「鬼女(きぢよ)とは女(をんな)の鬼(おに)とや。よし鬼(おに)なりとも人(ひと)なりとも。山(やま)に住(す)む女(をんな)ならば。わらはが身(み)の上(うへ)にてはさむらはすや。河(や)「年頃(としごろ)色(いろ)一字(いちじ)或(ある)は「舞(ま)の諺(ことわざ)か。河(や)「本(ほん)の(には)出(い)ださせ給(たま)ふ。言(こと)の葉草(はぐさ)の露(つゆ)程(ほど)も。

御心(おんこころ)にはかけ給(たま)はぬ。河(や)「恨(うら)申しに來(きた)りたり。河(や)「道(みち)を極(た)め名(な)を立てて。世情(せじやう)萬德(ばんとく)の妙花(めうかう)を開(ひら)くこと。此(この)一曲(いつきよく)の故(ゆゑ)ならずや。然(しか)らばわらはが身(み)をも用(もち)ひ。舞歌(まが)音樂(おんがく)の妙音(めうおん)の。聲佛(こゑぶつ)事(こと)をもなし給(たま)はば。などかわらばも輪廻(りんね)を遁(のが)れ。歸性(きせう)の善所(ぜんじよ)に至(いた)らざらんと。河(や)「恨(うら)む夕山(ゆふやま)の。鳥獸(とりけだもの)も鳴(な)き添(そ)へて。聲(こゑ)をあげるの山姥(やまうは)が。靈鬼(れいき)これまで來(きた)りたり。ツレ「ふしぎの事(こと)を聞(き)くものかな。さては真(まこと)の山姥(やまうは)の。これまで來(きた)り給(たま)へるか。シテ「河(や)「われ國國(くにくに)の山廻(やまめぐ)り。今日(けふ)しもここに來(きた)る事(こと)を(今(いま)は)「は(は)か(は)す。我(わ)が名(な)の德(とく)を聞(き)かんためなり。諺(ことわざ)ひ給(たま)ひてさりとは。我(わ)が妄執(まうしゆ)を晴(は)らし給(たま)へ。ツレ「此(この)上(うへ)はとかく辭(じ)しなば怒(お)ろしや。もし身(み)の爲(ため)や悪(あく)しかりなると。憚(は)りながら時(とき)の調子(てうし)を。とるや拍子(ひやうし)を進(すす)むれば。シテ「河(や)「しはさせ給(たま)へともさらば。暮(く)るゝを待(まち)ちて月(つき)の夜聲(よこゑ)に。諺(ことわざ)ひ給(たま)はばわれも亦(また)真(まこと)の姿(すがた)を現(あら)すべし。河(や)「すはやかけるふ夕月(ゆふづき)の。さなきだに。暮(く)るゝを急(いそ)ぐ深山(みやま)への。河(や)「暮(く)るゝを急(いそ)ぐ深山(みやま)への。雲(くも)に心(こころ)をかけ添(そ)へて。此(この)山姥(やまうは)が一節(ひとふし)を。夜(よ)すがら諺(ことわざ)ひ給(たま)はば。其時(そのとき)わが姿(すがた)をも。現(あら)はし袖(そで)つぎて。移(うつ)り舞(ま)を舞(ま)ふべしと。いふかと見(み)れば其(その)ままかき消(け)すやうに失(う)せにけり。かき消(け)すやうに失(う)せにけり。(中入)

ツレ、臨「餘りの事の不思議さに。さらに眞とおもほえぬ。鬼女が詞を違へじと。ワキ「松風共に吹く笛の。松風共に吹く笛の。聲澄み渡る谷川に。手まづ遮る曲水の。月に聲澄む深山かな。月に聲澄む深山かな。」

後ジテ(鬼女山姥)「あり物すこの深谷やな。あり物すこの深谷やな。寒林に骨をうつ。靈鬼泣く泣く前生の業を恨む。深野に花を供する天人。返す返すも歸性の善を悦ぶ。いや。善悪不二。何をか恨み何をか悦ばんや。同萬箇目前の境界。懸河漉々として。巖巖峨峨たり。山又山。いづれの工が青巖の形を削りなせる。水又水。誰が家にか碧潭の色を染め出だせる。

ツレ、臨「恐ろしや月も木深き山陰より。其さま化したる顔ばせば。其山姥にてましますか。シテ、同「とてもはや穂に出で初めし言の葉の。氣色にも知るしめさるべし。われにな恐れたまひそとよ。ツレ、臨「此上は恐ろしながらむば玉の。闇まされより現れ出づる。姿詞は人なれども。シテ、同「髪にはおどろの雪を戴き。ツレ、臨「眼の光は星の如し。シテ「さて面の色は。ツレ「さきにぬりの。シテ「軒の瓦の鬼の形を。ツレ「今宵始めて見る事を。シテ「何にたとへん。ツレ「古の。地「鬼一

口の雨の夜に。鬼一口の雨の夜に。神鳴り騒ぎ恐ろしき。其夜を思ひ白玉か。何ぞと問ひし人までも。わが身の上になりぬべき。浮世語も恥かしや。浮世語も恥かしや。

シテ、同「春の夜の一時を千金に替へじとは。花に清香月に影。これは願のたまさかに。行き逢ふ人の一曲の。その程もあたら夜に。はやはや語り給ふべし。ツレ、臨「げに此上はともかくも。いふに及ばぬ山中に。シテ、同「一聲の山鳥羽を叩く。ツレ、臨「鼓は瀧波。シテ「袖は白妙。ツレ「雪を廻らす木の花の。シテ「何はのことが。ツレ「法ならぬ。地「よし足引の山姥が。よし足引の山姥が。山廻りするぞ苦しき。

シテ、臨「それ山といつば。塵土より起つて天雲かゝる千丈の峯。地「海は苔の露より滴りて波濤を登む萬水たり。シテ「洞空しき谷の聲。楢に響く山びこの。地「無聲音を聞く傾となり。聲に響かぬ谷もがなと。望みしもげにかくやらん。シテ「ことに我が住む山家の景色。山高うして海近く。谷深うして水遠し。地「前には海水瀾瀾として。月真如の光をかかげ。後「には嶺松巍巍として風常樂の夢を破る。シテ「刑鞭蒲朽ちて螢空しく去る。地「諫鼓苔深うして鳥驚か

すとも云ひつべし。遠近のたづきも知らぬ山中に。おぼつかなくも呼子鳥の。聲凄きなりなりに。
 伐木丁丁として。山更に幽なり法性峯登えては。上求菩提を現し。無明谷深き粧ひ
 は。下化衆生を表して金輪際に及べり。そもそも山姥は。一生所も知らず宿もなし。唯雲水
 を便にて。到らぬ山の奥もなし。シテ然れば人間にあらずとて。地隔つる雲の身を變へ。假に自
 性を變化して。一念化生の鬼女となつて。目前に來れども。邪正一如と見る時は。色即是
 空其儘に。佛法あれば世法あり。煩惱あれば菩提あり。佛あれば衆生あり。衆生あれば山
 姥もあり。柳は緑花は紅の色色。さて人間に遊ぶこと。或る時は山殿の。橋路に通ふ花の蔭。
 休む重荷に肩を貸し。月もろともに山を出で。里まで送るなりもあり。又或る時は織姫の。五百機
 たつる窓に入つて。枝の鶯糸繰り。紡績の宿に身を置き。人を助くる業のみ。暇の目に見えぬ
 鬼とや人のいふらん。シテ世を空蟬の唐衣。地拂はぬ袖に置く霜は。夜寒の月に埋もれ。うち
 すさむ人の絶之間にも。千聲萬聲の。砧に聲のして搗つは。唯山姥が業なれや。都に歸りて
 世語にせさせ給へと。思ふは猶も妄執か。ただうち捨てよ何事も。よし足引の山姥が。山廻りする
 ぞ苦しき。

シテ足引の。地山廻り。シテ一樹の蔭一河の流。みなこれ他生の縁ぞかし。ましてやわが名
 を夕月の。浮世を廻る一節も。狂言綺語の道すぐに。讀佛乗の因ぞかし。あら御名殘惜し
 や。暇申して歸る山の。地春は楢に咲くかと待ちし。シテ花を尋ねて山廻り。地秋はさ
 やけき影を尋ねて。シテ月見る方にと山廻り。地冬は冴えゆく時雨の雲の。シテ雪を誘ひて山
 廻り。地廻り廻りて輪廻を離れぬ。妄執の雲の。塵積つて山姥となれる。鬼女が有様。見るや見
 るやと。峯に翔り谷に響きて。今までこゝにあるよと見えしが山又山に山廻り。山又山に山廻
 りして。行くへも知らずなりにけり。

七十六 氷室

シテ 氷室の神(前は翁) 前ツレ 巨下

ワキ(巨下)三人 八洲も同じ大君の。八洲も同じ大君の。御影の春を長閑けき。ワキ、阿そももこれは
 鶴山の院に仕へ奉る臣下なり。われ此度丹後の國九世の月に参り。既に下向道なれば。これより

若狹路にかかり。津田の入江青羽後瀬の山山をも一見し。それより都に歸らばやと存じ候。進行三人、
 花の名の白玉椿八千代經て。白玉椿八千代經て。縁にかへる空なれや。春の後瀬の山續く。
 青葉の木蔭分け過ぎて。雲路の末の程もなく。都に近き丹波路や。氷室山にも著きにけり。氷室山
 にも著きにけり。ワキ、調「急ぎ候程に。丹波の國氷室山に著きて候。此所の人を待ち。氷室のいは
 れをも委しく尋ればやと存じ候。

シテ(翁)、ツレ(男)二人「氷室守。春も末なる山陰や。花の雪をも集むらん。ツレ「深谷に立てる松蔭や。
 二人冬の景色を残すらん。シテ「それ一花開けぬれば。天下は皆春なれども。松は常磐の色添へて。二人縁
 に續く氷室山(今山)。谷風はまだ音さえて。氷に残る水音の。雨も靜に雪落ちて。げに豊年を見
 する御代の。御調の道もすぐなるべし。國土豊に榮ゆくや。千年の山も近かりき。變らぬや。氷
 室の山の深緑。氷室の山の深緑。春の景色はありながら。此谷陰は去年のまゝ。深冬の雪を集め
 置き。霜の翁の年年に。氷室の御調守るなり。氷室の御調守るなり。

ワキ、調「これなる(今は「いかに」と詠ふ。)老人に尋ねべき事の候。シテ「こなたの事にて候か。何事を御尋れ候ぞ。

ワキ「おことは此氷室守にてあるか。シテ「さん候。氷室守にて候。ワキ「さても年年に捧ぐる氷の物
 の供御。拜みは奉れども在所を見ることは今始なり。さてさていかなる標により。春夏まで氷
 の消えざるいはれ委しく申し候へ。シテ「昔御狩の廣野(廣野「今は「廣野」と詠ふ。例の)に。一村の森の下庵
 ありしに。頃は水無月半なるに。寒風御衣の袂にうつりて。さながら冬野の御幸の如し。怪しみ給
 ひ御覽すれば。一人の老翁雪氷を屋の内にたへたり。かの翁申すやう。それ仙家には紫雪紅
 雪とて薬の雪あり。翁もかくの如しとて。氷を供御に供へしより。氷の物の供御始まりて候。

ワキ、調「いはれを聞けば面白や。さてさて氷室の在所。上代よりも國國に。あまたかばりてあ
 りしよのう。シテ「調「まづは仁徳天皇の御宇に。大和の國關鷄の氷室より。供へ初めにし氷の物な
 り。ツレ「又其後は山陰の。雪も霞もさえ續く。たよりの風を松が暗。シテ「調「北山陰も氷室な
 りしな。ツレ「又此國に所を移して。深谷も返えけく谷風寒氣も。シテ「便ありとて今までも。
 シテ「ツレ「二人「未代長久の氷の供御のため。丹波の國桑田の郡に。氷室を定め申すなり。ワキ「げにげ
 に翁の申す如く。山も所も木深き蔭の。日影もさぐぬ深谷なれば。春夏までも雪氷の消えぬも

またことわり
 又は理なり。シテ、詞「いや所によりて氷の消えぬと承るは。君の威光もなきに似たり。ワキ、
 唯世の常の雪氷は。シテ、詞「一夜の間にも年越ゆれば。ワキ、春立つ風には消ゆるものを。
 シテ「されば歌にも。ワキ、貫之が。袖ひちて結びし水の凍れるを。結びし水の凍れるを。春立つ
 今日風の風や解くらんと詠みたれば。夜のままに來る春にだに。氷は消ゆる習なり。ましてや春過ぎ夏
 たけて。はや水無月になるまでも。消えぬ雪の薄氷。供御の力にあらでは。いかでか残る雪なら
 ん。いかでか残る雪ならん。
 地、燕「それ天地人の三歳にも。君をもつて主とし。山海萬物の出生。即ち王地の恩徳なり。
 シテ「皇圖(二字古本「唐土」と誤)長く堅く。帝道(古本「帝道」と傳へ燕)遙に盛なり。地、佛日光ますますに
 して。法輪常に轉せり。シテ「陽徳をりを遠へすして。地、雨露霜雪の時を得たり。夏の日になるまで
 消えぬ冬氷。春立つ風やよぎて吹くらん。げに妙なれや。萬物時にありながら。君の惠の色添へ
 て。都の外の北山に。つぐや葉山の枝茂み。このもかもの下水に。聚むる雪の氷室山。土も木も。
 大君の御影にいかで洩るべき。げにわれながら身の業の。浮世の數にありながら。御調にも取り別

きて。猶天照す氷の物や。他にも異なる捧物。叙感もつて甚しき。玉體を拜するも。深雪を
 運ぶゆゑとかや。シテ「されば年立つ初春の。地、初子の今日の玉簪。手にとるからに拵らぐ玉の。
 翁さびたる山陰の。去年のままにて降り續く。雪のしづりをかき集めて。木の下水にかき入れて。
 氷を重し雪を積みて待ち居れば。春過ぎてはや夏山になりぬれば。いとど氷室の構して。立ち去
 ることも夏蔭の。水にもすめる氷室守。夏衣なれども。袖さゆる景色なりけり。
 地、燕「げに妙なりや氷の物の。げに妙なりや氷の物の。御調の道も直にある。都にいざや歸らん。
 シテ、燕「暫く待たせ給ふべし。ととも山路の御序に。今宵の氷の御調。供ふる祭御覽せよ。地、そ
 もや氷調の祭とは。いかなる事にあるやらん。シテ「人こそ知られ此山の。山神木神の。氷室を守
 護し奉り。毎夜に神事あるなりと。地、いひもあへれば山暮れて。寒風松聲に聲立て。時なら
 ぬ雪は降り落ち。山河草木おしなめて。氷を敷きて瑠璃壇に。なると思へば氷室守の。薄氷を踏
 むと見えて。室の内に入りにけり。氷室の内に入りにけり。(中入)
 地、燕「樂に引かれて古鳥蘇の。舞の袖こそ揺るぐなれ。後ツレ(天文)(天文舞)「變らぬや。氷室の山の深緑。

雪を廻らす舞の袖かな。

後ジテ(氷室の神) 曇なき御代の光も天照す。氷室の御調供ふなり。地「供へよや。供へよや。さもい

ささよき水底の砂。シテ「長じては又。巖の陰より。地「山河も震動し天地に(今は「天地」と云ふ)動きて。

寒風類に肝をつづめて。紅蓮大紅蓮の。氷を戴く氷室の神體。さえ耀きてぞ現れたる。

シテ「晴嵐楯を吹き拂つて。地「谷風水邊返え凍りて。シテ「月も耀く氷の面。地「萬境を映

す鏡の如く。シテ「晴嵐楯を吹き拂つて。地「影も木深き谷の戸に。シテ「雪はしぶき。地「霞は

横ざりて。岩もる水もさざれ石の。深井の氷に閉ぢつけらるるを。引き放し引き放し。浮み出でた

る氷室の神風。あら寒むや冷やかや。

シテ「畏き君の御調なれや。地「畏き君の御調なれや。波を收むるも氷。水を靜むるも氷の。日

に添へ月に行き。年を待ちたる氷の物の供へ。供へ給へや。供へ給へと。采女の舞の。雪を廻らす

小忌衣の。袂に添へて薄氷を。碎くな碎くな。解かすな解かすなと氷室の神は氷を守護し。

日影を隔て。寒水を灑ぎ清風を吹かして。花の都へ雪を分け。雲を凌ぎて北山の。すはや都も見

えたり。すはや都も見えたり。急げや急げ。氷の物を供ふる所も愛宕の郡。供ふる所も愛宕の

郡(今は此一句か)。捧ぐる供御も日本の本の。君に御調物こそめでたけれ。

七十七 善界

ワキ 善界坊 ンレ 太郎坊
ツキ 比叡山の僧

シテ(善界坊) 雲路を凌ぐ旅の空。雲路を凌ぐ旅の空。出づる日の本を尋れん。明これは大唐の天狗

の首領 善界坊にて候。さて我が國に於いて。青王山青龍寺。般若堂に至るまで。少しも慢心

の輩をば。皆我が道に誘引せすと云ふことなし。眞や日本は。粟散遍地の小國なれども神國とし

て。佛法今に盛なるよし承り及び候間。急ぎ日本に渡り。佛法をも妨げばやと存じ候。建行

誦名にし負ふ。豐蘆原の國つ神。豐蘆原の國つ神。青海原にさしおるす。天の瓊矛の露なれや。

秋津洲根の朝ぼらけ。そなたもしるく浮む日の。神の御國はこれかとよ。神の御國はこれかとよ。

シテ「急ぎ候程に。これははや日本の地に著きたると存じ候(今は「著きて」)。まづ 承り及びたる愛宕山

に立ち越え。太郎坊に案内を申さばやと存じ候。これははや愛宕山にてありげに候。山の葦木の木

立ち。これこそ我等が住むべき所にて候へ。いかに案内申し候。ツレ(太郎坊)案内とは如何なるものぞ
 (此一句、今は「誰にて」。シテ「これは大唐の天狗の首領善界坊にて候が。御目に懸り申し談すべき仔細の
 候ひて。これまで遙遙参りて候。ツレ」諸は「承り及びびたる善界坊にてわたり候か。見ぐるしく候へど
 も、(八字令)まづ某が庵室へ御入り候へ。さて唯今の御出では何のためにて候ぞ。(此一句、今は「さて唯今は
 誰にて」シテ「さん候。唯今参ること餘の儀にあらず。我が國に於いて。育王山青龍寺。般若堂に至
 るまで。少しも慢心の輩をば。皆我が道に誘引せずといふことなし。眞や日本は小國なれども。
 神國として。佛法今に盛なるよし承り候間。少し心に懸り。遙遙これまで参りて候。同じくは
 御心を一つにして。自他の本意を達し給へ。ツレ」諸は「やさしくも思し召し立ち候ものかな。それ
 我が國は天地開闢より此方まづ以つて神國たり。されば佛法今に盛なり。まづまづ間近き比
 叡山。あれこそ日本の天台山候よ。懸心のごとく(三字、今は「ま」)窺ひ給へ。シテ「さてはいよいよ
 便あり。それ天台の佛法は。權實二教に分ち。ツレ」又密宗の奥義を傳へ。シテ「顯密兼學の所
 なるを。ツキわれら如きの類として。シテ「たやすく窺ひ。ツレ」給はんこと。地「蟻螂が斧とか

や。猿猴が月に相同じ。かくは知れどもさすが猶。我慢増上慢心の。便を得んと思ふにも。大
 聖の威力をいよいよ案じ連れたり。
 地「誰」それ明王の誓約區區なりといへども。其利益餘尊に超え。正しく火生三昧に入り給ひて。
 一切の魔軍を焚焼せり。シテ「外には忿怒の相を現すといへども。地「内心慈悲の御惠。凝念不動
 の理を顯はし。但住衆生心想之中。げにありがたき悲願かな。然りとはいへども。輪廻の道を
 去りやらで。魔境に沈む其歎。思ひ知らすやわれながら。過去遠遠の間に。さすがに見佛聞法の
 其結縁の功により。三惡道を出でながら。なほも鬼畜の身をかりて。いとど佛敵法敵となれる
 悲しさよ。今此事を歎かずば。未來永永を経るとても。いつか般若の智水を得て。火生三昧の
 焰を遁れ果つべき。シテ「世の中は夢か。現か。現とも。地「夢ともいさや白雲の。かゝる迷を翻
 し。歸服せんとは思はずして。いよいよ我慢の旗矛の。靡きもやらで徒に。行者の床を窺ひて。
 降魔の利劍を待つこそはかなかりけれ。
 ツレ「誰」かくては時刻移りなん。いざ諸共に立ち出でて。比叡の山邊のしるべせん。シテ「法のため今

ぞ愛宕の山の名に。頼を懸けて思ひ立つ。雲の掛橋うち渡り。地我が名やよそに高雄山。東を
 見れば大比叡や。シテ「横川の杉の梢より。地南に續く如意が嶽。鷲のお山の雲や霞も。嵐と
 もに失せにけり。嵐とともに失せにけり。(申入)

ワキ(比叡山の僧)「勅を受け。我が立つ袖を出でながら。急ぐも同じ名に高き。大内山の道ならん。
 かくてやうやう大比叡を。下りつゝ行けばふしぎやな。あれに見えたる下松の。地「梢の嵐吹
 きしなり。梢の嵐吹きしなり。雲となり雨となる。山河草木震動し。天に輝く電光。大地に
 響く雷は。肝魂を暗まかす。こはそも何のゆゑやらん。こはそも何のゆゑやらん。

後ジテ(善界坊)「後「そもそもこれは大唐の天狗の首領善界坊とは我が事なり。同あら物物しやいかに御
 坊。今さら何の觀念をかなせる。それ若作障碍即有一佛魔境と脱けり。あら痛はしや。欲界の
 内に生るゝ輩は。地「悟の道や其まゝに。魔道の巻となりぬらん。

地「ふしぎや雲のうちよりも。ふしぎや雲のうちよりも。邪法を唱ふる聲すなり。本より魔佛一如
 にして。凡聖不二なり。自性清淨天然動なき。これを不動と名づけたり。ワキ「聽我説

者得大智惠。諸畔多羅吒干滿。地「其時御聲の下よりも。其時御聲の下よりも。明王現れ出て給
 へば。矜迦羅制多伽十二天。各各降魔の力を合せて。みさきを拂つておはします。シテ「明王諸
 天はさて置きぬ。地「明王諸天はさて置きぬ。東風吹く風に東を見れば。シテ「山王權現。地「南
 に男山。西に松の尾北野や賀茂の。山風神風吹き拂へば。さしもに飛行の翅も地におち。力も
 機弓の入洲の浪の。立ち去ると見えしが又飛び來り。さるにても。かほどに妙なる佛力神力。今
 より後は來るまじと。いふ聲ばかりは虚空に残り。いふ聲ばかり虚空に残つて。姿は雲路に入り
 けり。

七十八 芭蕉

ワキ 芭蕉の精(前は女)

ワキ(僧)「これは唐土楚國の傍。小水と申す所に山居する僧にて候。(今は此句の初に「さて」の三字を添へて「さて」)
 經の身なれば。日夜朝暮かの御經を讀み奉り候。ことさら今は秋の(「今」は「も」)半の月の夜すが
 ら怠ることなし。こゝこにふしぎなる事の候。此山中にわれならでは(「は」の一字今)又住む人(今は「人」を)

もなく候に。夜な夜な讀經のなりふし。庵室のあたりに人の音なひ聞え候。今夜も來りて候はば。いかなる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候。鳥既に夕陽西に遷り。山峽の陰冷ましくして。鳥の聲幽に物凄き。夕の空もほのぼのと。夕の空もほのぼのと。月になり行く山陰の。寂寞とある柴の戸に。此御經を讀誦する。此御經を讀誦する。

シテ「芭蕉に落ちて松の聲。芭蕉に落ちて松の聲。あだにや風の破るらん。風破窓を射て燈火消え易く。月疎屋を穿ちて夢なりがたき。秋のよすがら所から。もの冷ましき山陰に。住むとも誰か白露の。古り行く末ぞ哀なる。あはれ馴るるも山賤の。友こそ岩木なりけれ。見ぬ色の。深きや法のばな心。深きや法の花心。染めずはいかが徒に。其唐衣の錦にも。衣の珠はよも掛けじ。草の秋も露涙。移るも過ぐる年月は。廻り廻れど泡沫の。あはれ昔の秋もなし。あはれ昔の秋もなし。

ワキ「讀」さてもわれ讀誦の聲怠らず。夢現ともわかざるに。女人の月に見え給ふは。いかなる人にてましますぞ。シテ「讀」れば此あたりに住む者なるが。さも遇ひ難き御法を得。花を捧げ禮をな

し。結縁をなすばかりなり。讀「とても姿を見え参らすれば。何をか今は憚りの。言の葉草の庵の内を。露の間なりと法のために。結縁に貸させ給へとよ。ワキ「讀」げにげに法の結縁は。眞に妙なる御事なれどもさりながら。なべてならざる女人の御身に。驚いかにてお宿を参らすべき。シテ、其御心得はさる事なれども。よそ人ならず我も又。驚「栖はここぞ小水の。ワキ「同」流を汲むとだに。知らぬ他生の縁による。シテ「一樹の蔭の。ワキ「庵の内は。地惜しまじな。月も假寐の露の宿。月も假寐の露の宿。軒も垣ほも古寺の。愁は崖寺の經るに破れ。魂は山行の深きに傷ましむ。月の影も冷ましや。誰かいひし蘭省の花の時。錦帳の下とは。蘆山の雨の夜草庵の内ぞ思はる。

ワキ「讀」餘りに御志深ければ。御經讀誦の程内へ御入り候へ。シテ「讀」さらば内へ参り候へし。あらありがたや此御經を聽聞申せば。我等如きの女人。非情草木の類までも。頼もしうこそ候へ。ワキ「げによく御聽聞候ものかな。唯一念隨喜の信心なれば。一切の非情草木の類までも。何の疑の候へき。シテ「さては殊更ありがたや。さてさて草木成佛の。驚いはれを猶も示

し給へ。ワキ「藥草喩口あらはれて。草木國土有情非情も。皆これ諸法實相の。シテ蜂の嵐や。ワキ「谷の水音。シテワキ、二人「佛事をなすや寺井の底の。心も澄める折からに。地「燈火を背けて向ふ月の下。背けて向ふ月の下。共に憐む深き夜の。心を知るも法の人の。教のまゝなる心こそ。思の家ながら。火宅を出づる道なれや。されば柳は緑。花は紅と知る事も。唯其まゝの色香の草木も。成佛の國土ぞ成佛の國土なるべし。

地「騰ふしぎやさても愚なる。女人と見るにかくばかり。法の理白糸の。解くばかりなる心かな。シテ「なかなか。何疑か有明の。末の闇路をはるけすは。今遇ひ難き法を得る。身とはいかが思はん。地「げに遇ひ難き法に遇ひ。受け難き身の人界を。シテ「受くる身ぞとや思すらん。地「恥かしや歸るさの。道さやかに照る月の。影はさながら庭の面の。雪の中の芭蕉の。偽れる姿の。眞を見えばいかならんと。思へば鐘の聲。諸行無常となりにけり。諸行無常となりにけり。ワキ、地「さては雪のうちの芭蕉の。偽れる姿と聞えしは。疑もなき芭蕉の。女と現れけるこそふしぎなれ。唯これ法の奇特ぞと。唯これ法の奇特ぞと。思へばいと夜もすがら。月も妙なる法の場。

風の芭蕉や傳ふらん。風の芭蕉や傳ふらん。

後「シテ(芭蕉の精)騰「あら物すこの庭の面やな。あら物すこの庭の面やな。ありがたや妙なる法の教には。逢ふこと稀なる優曇華の。花待ち得たる芭蕉葉の。御法の雨も豊なる。露の恵を受くる身の。人衣の姿御覽せよ。かばかりはうつり来ぬれど花もなき。地「芭蕉の露の古り勝る。シテ「庭野面。山陰のみぞ。

ワキ「騰「寝られれば枕ともなき松が根の。現れ出づる姿を見れば。ありつる女人の顔はせなり。さもあれ御身はいかなる人ぞ。シテ、地「いや人とは恥かしや。眞はわれは非情の精。芭蕉の女と現れたり。ワキ「そもや芭蕉の女ぞとは。何の縁にかかいる女體の。身をば受けさせ給ふらん。シテ、地「其御不審は御あやまり。何か定めは荒金の。ワキ「騰「土も草木も天より降る。シテ「雨露の恵を受けながら。ワキ「われとは知らぬ有情非情も。シテ「おのづからなる姿となりて。ワキ「さも愚なる。シテ「女とて。地「さなきだに。あだなるに芭蕉の。女の衣は薄色の。花染ならぬに。袖のほころびも恥かしや。

地「誰」それ非情草木といつば。眞は無相眞如の體。一塵法界の心地の上に。雨露霜雪の形を見す。シテ然るに一枝の花を捧げ。地「御法の色を顯すや。一花開けて四方の春。長閑けき空の日影を得て。楊梅桃李數數の。シテ色香に染める心まで。地「諸法實相隔もなし。水に近き樓臺は。まづ月を得るなり。陽に向へる花木は。又春に逢ふこと易きなる。其理も様様の。げに目の前に面白やな。春過ぎ夏たけ。秋來る風の音信は。庭の萩原まづそよぎ。そよかかる秋と知らすなり。身は古寺の軒の草。忍ぶとすれど古も。花は嵐の音にのみ。芭蕉葉の。脆くも落つる露の身は。置き所なき虫の音の。蓬がもとの心の。秋とてもなどが變らん。シテよしや思へば。定なき。地「世は芭蕉葉の夢の裡に。牡鹿の鳴く音は聞きながら。驚きあへぬ人心思ひいるさの山はあれど。唯月ひとり伴ひ馴れぬる秋の風の音。起臥茂き小笹原。篠に物思ひ立ちまふ袖。暫しいざや返さん。シテ今宵は月も白妙の。地「氷の衣。霜の袴。(序ノ舞)

シテ「霜の經。露の緯。こそ弱からし。地「草の袂も。シテ久方の。地「久方の。天の少女の羽衣なれや。シテ「誰」これも芭蕉の羽袖を返し。地「返す袂も芭蕉の扇の。風茫茫と物凄き古寺の。庭の

淺茅生女郎花 刈萱 面影移るる露の間に。山嵐松の風。吹き拂ひ吹き拂ひ。花も千草も散り散りに。花も千草も散り散りになれば。芭蕉は破れて残りけり。

七十九 百萬

古名 嵯峨物狂 嵯峨大念 万シテ 百萬 千方 百萬の子

ワキ(世)誰「竹馬にいざや法の道。竹馬にいざや法の道。眞の友を尋ねん。詞これは和州三吉野の者に候。又これにわたり候幼き人は。南都西大寺のあたりにて拾ひ申して候。又(今は此)此頃は嵯峨の大念佛にて候ほどに。此幼き人を連れ申し。念佛に參らばやと存じ候。(狂言シカシカ)

シテ(百萬)詞「あらわるの念佛の拍子や候。わらは音頭をとり候べし。地「南無阿彌陀佛。彌陀佛。シテ南無阿彌陀佛。地「南無阿彌陀佛。シテ彌陀頼む。地「人は雨夜の月なれや。雲晴れれども西へ行く。シテ阿彌陀佛やなまうだと。地「誰かは頼まざる。誰か頼まざるべき。シテこれかや春の物狂。地「亂れ心か戀草の。シテ力車に七車。地「積むとも盡きじ。シテ重くと。引けや。えいさらえいと。地「一度に頼む彌陀の力。頼めや頼め南無阿彌陀佛。

げにや世世毎の。親子の道にまとはりて。親子の道にまとはりて。猶この闇を晴れやらぬ。シテ「朧
 月の薄曇。地「縁に住める世に。尙三界の首枷かや。牛の車の常とはに。いづくをさして引か
 らん。えいさくらえいさ。シテ「引けや引けや此車。地「物見なり物見なり。シテ「げに百萬が姿は。地「も
 とより長き黒髪な。シテ「荆棘の如く亂して。地「古りたる烏帽子引きかづき。シテ「又眉根黒き亂
 地「現し心か村鳥。シテ「愛かれと人は添ひもせて。地「思はぬ人を尋ねれば。シテ「親子の契麻
 衣。地「肩を結んで裾にさげ。シテ「裾を結びて肩に懸け。地「菴片。シテ「菅簾の。地「亂心な
 がら南無釋迦彌陀佛と。信心をいたすも。我が子に遇はんためなり。シテ「南無や大聖釋迦如來
 我が子に遇はせ狂氣をもとめ。安穩に守らせ給ひ候へ。

千方(百萬の子)「詞「いかに申すべき事の候。ワキ「何事にて候ぞ。子「これなる物狂をよくよく見候へば。
 古里の母にて御入り候。驚恐れながらよその様にて。問うて給はり候へ。ワキ「詞「これは思ひもよ
 らぬ事を承り候ものかな。やがて問うて参らせうするにて候。いかにこれなる狂女。おことの國里
 はいづくの者ぞ。シテ「これは奈良の都に百萬と申す者にて候。ワキ「それは何故かやうに狂人と

はなりたるぞ。シテ「夫には死して別れ。唯一人ある忘れ形見の嬰兒に生きて離れて候ほどに。思
 が亂れて候。ワキ「さて今も子といふ者のあらば嬉しかるべきか。シテ「仰までもなし。それ故にこ
 そ亂れ髪。遠近人に面をさらすも。若しも我が子に廻りや逢ふと。馬車に法の聲立てて。念佛
 申し身を碎き。我が子に逢はんと祈るなり。ワキ「げに痛はしき御事かな。眞信心私なくは。か
 ほど群集の其中に。などかは廻り逢はざらん。シテ「詞「嬉しき人の言葉かな。それにつきても身を
 碎き。法樂の舞を舞ふべきなり。囃してたべや人人よ。羅刹も此御佛も。羅喉爲長子と説き
 給へば。地「我が子に鸚鵡の袖なれや。親子鸚鵡の袖なれや。百萬が舞を見給へ。シテ「百や萬の舞
 の袖。地「我が子の行くへ祈るなり。シテ「げにや惟れば。いづくとても住めば宿。地「住まぬ時
 には故郷もなし。此世はそもいづくの程ぞや。シテ「牛羊徑街に歸り。鳥雀枝の深きに集まる。
 地「げに世の中はあだ波の。寄る邊はいづく雲水の。身の果いかに櫓の葉の。梢の露の古里に。
 シテ「愛き年月を送りしに。地「さしも二世とかけし中の。契の末は花鬘。結びもとめぬ徒夢の長
 き別となりはてて。シテ「比目の枕。しき浪の。地「あはればかなき契かな。奈良坂の。兒の手柏

の二面。とにもかくにもれぢけ人の。なき跡の涙。す。袖の柵隙なきに。思かさなる年輩の。
 流るる月の影惜しき。西の大寺の柳蔭。みどり子の行くへ白露の。置き別れていつちとも知らず
 失せにけり。一方ならぬ思草。葉末の露も。あなによし奈良の都を立ち出でて。かへり三笠山
 佐保の川をうち渡りて。山城に井手の里。玉水は名のみして。影うつす面影あさましき姿なりけ
 り。かくて月日を送る身の。羊の歩隙の駒。足に任せて行く程に。都の西と聞えつる。嵯峨野の
 寺に参りつつ。四方の景色を眺むれば。シテ「花の浮木の龜山や。地「雲に流るゝ大井河。眞に浮世
 の嵯峨なれや。盛過ぎ行く山櫻嵐の風。松の尾小倉の里の夕霞。立ちこそつづけ小忌の袖。か
 さしぞ多き花衣。貴賤群集する此寺の法ぞ尊き。かれよりもこれよりも。唯此寺ぞありがたき。
 忝くもかゝる身に。申すは恐なれども。二佛の中間われら如きの迷ある。道明らかめん主とて。
 毘首羯磨が造りし赤梅檀の尊容。やがて神力を現じて。天然震旦わが朝三國に渡り。ありがたく
 も此寺に現し給へり。シテ「安居の御法と申すも。地「御母摩耶夫人の孝(今は「供養」と書き「キヨオヨ」と書
 養の御爲なれば。佛も御母を悲み給ふ道ぞかし。況んや人間の身として。などかは母をかなし

まねと。子を怨み身をかこち。感謝してぞ祈りける。親子鸚鵡の袖なれや。百萬が舞を見給へ。
 地「「あら我が子戀しや。シテ「これ程多き人の中に。などや我が子のなきやらん。あら我が子戀し
 や。吾が子賜へのう南無釋迦牟尼佛と。地「狂人ながらも子にもや逢ふと信心はなきを。南無阿彌
 陀佛。南無釋迦牟尼佛南無阿彌陀佛と。心ならずも逆縁ながら。誓に逢はせてたび給へ。ワキ「あ
 まりに見ると痛はしや。これこそおことの尋ねる子よ。よくよく寄りて見給へとよ。シテ「心強や
 とくにも名のり給ふならば。かやうに恥をば晒さじものを。あら怨めし。とは思へども。地「たま
 たま逢ふは優曇花の。花待ちえたり夢か現か幻か。
 地「「よくよく物を案するに。よくよく物を案するに。かの御本尊はもとよりも。衆生のための父
 なれば。母諸共に廻り逢ふ。法の力ぞありがたき。願も三つの車路を。都に歸る嬉しきよ。都
 に歸る嬉しきよ。

八十

船辨慶

前ジテ 後ジテ 平 知盛
ワキ方 辨慶 ワキツレ 義經從者

ワキ(辨慶)ワキツレ(義經從者)「今日思ひ立つ旅衣。今日思ひ立つ旅衣。歸洛をいつと定めん。ワキ、今日思ひ立つ候者は。西塔の傍に住まひする武藏坊辨慶にて候。さても我が君判官殿は。頼朝の御代官として平家を亡し給ひ。御兄弟の御中日月の如く御座候べきな。いひかひなき者の謔言により。御中違はれ候事。返す返すも口惜しき次第にて候。然れどもわが君親兄の禮を重んじ給ひ。一先都を御開きあつて。西國の方へ御下向あり。御身に過失なき通を御歎きあるべき爲に。今日夜をこめ淀より御船に召され。津の國尼が崎大物の浦へと急ぎ候。

ワキ、ワキツレ「頃は文治の初つ方。頼朝義經不會の由。既に落居し力なく。判官判官都を遠近の道狭くならぬ其さまに。西國の方へと志し。ワキツレ「まだ夜深くも雲居の月。出づるも惜しき都の名残。一年平家追討の都出には引きかへて。唯十餘人すこすこと。さも疎からぬ友舟の。上り下るや雲水の。身は定なき習かな。世の中の人は何とも石清水。人は何とも石清水。澄み濁るなば神ぞ知るらんと。高き御影を伏し拜み。行けば程なく旅心。潮も波も共に引く。大物の浦に著きにけり。大物の浦に著きにけり。

ワキ、判「御急ぎ候ほどに。これははや大物の浦に御著きにて候。某存じの者の候間。御宿の事を申しつけうするにて候。いかに此家の主のわたり候か。判官浦人「唯にて御入り候ぞ。ワキ、いや武藏にて候。判官「さて唯今は何の爲に御出で候ぞ。ワキ「さん候わが君をこれまで御供申して候。御宿を申し候へ。判官「さらば奥の間へ御通り候へ。御用心の事は御心安く思し召され候へ。ワキ、判「いかに申し上げ候。恐多き申しごとにて候へども。正しく静は御供と見え申して候。今の判官「ともかくも辨慶計らひ候へ。ワキ「今は此句の上「静の御宿へ参りて申し候へし。ワキ、判「いかに此家の内に静のわたり候か。君よりの御使に武藏が参じて候。前ジテ(判)「武藏殿とはあら思ひよらずや。何のための御使にて候ぞ。ワキ「さん候唯今参ること餘の義にあらす。わが君の御謔には。これまでの御参り返す返すも神妙に思し召し候さりながら。唯今は何とやらん

似合はぬやうに御座候へば。これより都へ御歸りあれとの御事にて候。前ジテ「これは思ひもよらぬ仰かな。何處までも御供とこそ思ひしに。頼みても頼なきは人の心なり。あら何ともなや候。ウキ、驚」さて御返事を何と申し候へき。前ジテ「みづから御供申し。君の御大事になり候はば留り候べし。ウキ」あらことごとしや候。唯御止りあるが肝要にて候。前ジテ「よくよく物を案ずるに。これは武藏殿の御計らひと思ひ候程に。妾參り直に御返事を申し候へし。ウキ」それはともかくもにて候。さらば御參り候へ。

ウキ「即」いかに申し上げ候。靜の御參りにて候。判官「なたへと申し候へ」(此一句、古本無)「いかに靜。此度思はずも落人となり落ち下る所に。これまで遙遙來れる(三字今は「來り」)志返す返すも神妙なり。此まま伴ひ度くは候へども(今は此一句「さり」)遙遙の波濤を凌ぎ下らんこと然るべからず。まづ此度は都に上り時節を待ち候へ。前ジテ「さては眞にわが君の御説にて候ぞや。よしなき武藏殿を怨み申しつることの恥かしさよ。返す返すも面目なうこそ候へ。ウキ」即「いやいやこれは苦しがらす候。唯人口を思し召すなり。返す返すも思しめしそと。涙を流し申しけり。前ジテ「い

やとにかくに數ならぬ。身には怨みもなければども。これは船路の門出なるに。浪風も。靜を留め給ふかと。靜を留め給ふかと。涙を流し木綿四手の。神かけて變らじと。契りしことも定なや。げにや別より。まさりて惜き命かな。君に二度逢はんと思ふ行末。判官「即」いかに辨慶。靜に酒を勧め候へ。ウキ「畏つて候。げにげにこれは御門出の。行末干代ぞと菊の盃。靜にこそは勧めけれ。シテ妾は君の御別れ。やる方なきにかきくれて。涙に咽ぶばかりなり。ウキ、即「いやいやこれは苦しからぬ。旅の舟路の門出の和歌。唯一さしとすいむれば。前ジテ「其時靜は立ちあがり。時の調子を取りあへず。渡口の郵船は風靜まつて出づ。波頭の謫所は日晴れて見ゆ。ウキ、即「これに烏帽子の候召され候へ。前ジテ「驚」立ち舞ふべくもあらぬ身の。袖うちふるも恥かしや。

前ジテ「驚」傳へ聞く陶朱公は勾踐を伴ひ。地會稽山に籠り居て。種種の智略をめぐらし。終に吳王を亡して。勾踐の本意を達すとかや。然るに勾踐はふたたび世をとり。會稽の恥を雪ぎしも。陶朱功をなすとかや。されば越の臣下にて。政事を身に任せ。高名富み貴く。心の如くなるべ

きた。功成り名遂げて身退くは。天の道と心えて。小船に棹さして五湖の遠島を樂む。前ジテ「か
 かる例も有明の。地月の都をふり捨てて。西海の波濤に赴き。御身の科のなきよしな。歎き給
 ばは頼朝も。終には靡く青柳の。枝を連ぬる御契。などかは朽ちしはつべき。唯頼め。(中ノ舞)
 前ジテ「唯頼め。標茅が原のさしも草。鳴われ世の中にあらん限りは。前ジテ「かく尊詠の偽なくば
 地「かく尊詠の偽なくば。やがて御代に出舟の。船子ども。はや纜をとくとくと。はや纜をと
 くとくと。勸め申せば判官も。旅の宿を出で給へば。前ジテ「静は泣く泣く。地「烏帽子直垂ぬ
 ぎ捨てて。涙に咽ぶ御別。みるめも哀なりけり。みるめも哀なりけり。(中入)
 前ジテ「静の心 中察し申して候。急いで(三文字今「やが)お舟を出ださうするにて候。ワキ「静「いかに申
 し候。ワキ「何事にて候ぞ。ワキ「君よりの御証には。けふは浪風荒く候ほどに。御逗留と仰せ
 出だされて候。ワキ「何と御逗留と候や。ワキ「静「さん 候。ワキ「これは某 推量申して候
 (此一句今は「これは推) 静に名残を御惜みあつて。御逗留と存じ候。まづ御心をしづめて御覽じ候へ
 (此一句今は「静) 今此御身にてかやうの事は。御運もつきたると存じ候。其上一年波邊福島
 (此一句今は「静) 今此御身にてかやうの事は。御運もつきたると存じ候。其上一年波邊福島

を出でし時は。以ての外の大風なりしに。君御舟を出だし。平家を亡し給ひし事。今以て同じ事
 ぞかし。急ぎお舟を出だすべし。ワキ「静「げにげにこれは理なり。いづくも敵と夕浪の。ワキ「立
 ち騒ぎつつ舟子ども。地「えいやえいやとびく汐(浪)と云ひたれば原作の方に從ふ。に。つれて舟をぞ出だ
 しける。
 前ジテ「あら笑止や風が變つて候。あの武庫山 風。鷗鷗羽が嶽より吹きおろす嵐に。此御舟の陸地
 に著くべきやうもなし。皆皆心中に御祈念候へ。ワキ「静「いかに武藏殿 此御舟にはあやかしがつ
 いて候。ワキ「暫く候(今は「あやむ)。さやうの事をば船中にては申さぬ事にて候。地「あらふしぎや
 海上を見れば。西國にて亡びし平家の一門。各各浮かみ出でたるぞや。同「かゝる時節を窺ひて
 恨をなすも理なり。
 判官「いかに辨慶。ワキ「御前に候。判官「今さら驚くべからず。たとひ惡 恨をなすとも。そも何
 事のあるべきぞ。惡逆無道の其積り。神明佛陀の冥感に背き。天命に沈みし平氏の一類。
 地「主上を始め奉り。一門の月卿雲霞の如く。浪に浮みて見えたるぞや。

後ジテ(平知盛)詠「そもそもこれば。桓武天皇九代の後胤。平の知盛幽靈なり。詞あら珍らしやいかに
 義經。 匪思ひもよらぬ浦波の。地「聲を知るべに出舟の。聲を知るべにいで舟の。後ジテ「知盛が沈みし
 そのありさま 其有様に。 地「又義經をも海に沈めんと。 シテ「夕浪に浮かべる長刀取りなほし(この一句今は)。地「巴
 波の紋あたりを拂ひ。潮を蹴立て悪風を吹きかけ。眼もくらみ心も亂れて。前後を忘するば
 かりなり。 判官「其時義經少しも騒がず。 地「其時義經少しも騒がず。打物抜き持ち。現の人に
 向ふが如く。言葉を交し戦ひ給へば。辨慶おし隔て。打物業にて適ふまじと。數珠さらさらと押
 しもんで。東方降三世。南方軍荼利夜叉。西方大威徳。北方金剛夜叉明王。中央大聖不動
 明王のさつづくにかけて祈り祈られ。悪霊次第に遠ざかれれば。辨慶舟子に力を合はせ。御船を漕
 ぎのけ汀に寄すれば。猶怨靈は慕ひ來るを。追つ拂ひ祈りのけ。又引く汐に揺られ流れ。又引
 く汐に揺られ流れて。跡白波とぞなりにける。

八十一 右近

ワキ 北野の神(前は女) ツレ女

ワキ(神主)三人、四方の山風長閑なる。四方の山風長閑なる。雲居の春ぞ久しき。ワキ「そもそこ
 れは鹿島の神職何某とは我が事なり。われ此度都に上り。洛陽の名花残なく一見仕りて候。
 又北野右近の馬場の花。今を盛なるよし承り候あひだ。今日は右近の馬場の花を眺めばやと存
 じ候。 進行三人、雲の行く。そなたやしるべ櫻狩。そなたやしるべ櫻狩。雨は降りきぬ同じく
 は。濡るとも花の蔭ならば。いざや宿らん松蔭の。行くへも見ゆる楢より。北野の森も近づくや。
 右近の馬場に著きにけり。右近の馬場に著きにけり。ワキ「急ぎ候ほどに。これははや右近の馬場
 に著きて候。あれを見れば花見の人人と見えて。車を並べ輿を續け。眞に面白う候。暫く休らひ
 花を眺めばやと存じ候。

シテ(女)「春風桃李花の開くる時。人の心も花やかに。あくがれ出づる都の空。げに長閑なる時と
 かや。シテ「ツレ(女)二人「見渡せば。柳櫻をこきまかせて。錦を飾る花車。シテ「來る春毎に誘はる。
 シテ「ツレ二人「心も永き氣色かな。地「花見車の八重一重。見えて櫻の色色に。引折せし。右近の
 馬場の木の間より。右近の馬場の木の間より。影も匂ふや朝日寺の。春の光も天満てる。神の御幸

の跡古りて。松も木高き梅が枝の。立枝も見えて紅の。初花車廻る日の。轅や北に續くらん。

ワキ、長閑なる頃は彌生の花見とて。右近の馬場の並木の櫻の。陸踏む道に休らへば。向を見れば女車の。所からなる昔語。思ひぞ出づる右近の馬場の。ひなりの日にはあらねども。見見すもあらず。見もせぬ人の戀しくは。詞あやなく今日や詠め暮さん。これ業平の此所にて。女車を詠みし歌。今さら思ひ出でられたり。シテ、馬あら面白の口すさみや。右近の馬場のひなりの日。向に立てる女車の。所からなる昔語。恥かしながら今は又。わが身の上業平の。何かあやなくわきていばん。詞思のみこそしるべなりしを。ワキ、さやうに詠めし言の葉は。其舊跡も此處なれば。今又かやうに言問ふ人も。いつなれもせぬ人なれども。シテ、唯花ゆゑに北野の森にて。ワキ、言葉をかへせば。見見すもあらず。見見もせぬ人や花の友。見もせぬ人や花の友。知るも知らぬも花の蔭に。相宿りして諸人の。いつしかなれて花車の。榻立て、木の下に。下り居ていざや眺

めん。げにや花の下に。歸らんことを忘るゝは。美景によりて花心。馴れ馴れそめて眺めん。いざいざ馴れて眺めん。百千鳥。花になれ行くあだし身は。はかなき程に羨まれて。上の空の心なれや。上の空の心なれ。

地、馬げに名にし負ふ神垣や。北野の春も時めける。神の名所数敷に。シテ、眺むれば。都の空の遙遙と。霞み渡るや北野宮居。御覽せよ時をえて。花櫻葉の宮所。地、花の濃染の色わけて。紅梅殿や老松の。シテ、緑より開け初めて。一夜松も見えたり。地、日影の空もあかれさす。紫野行き。標野行き。地、野守は見すや君が袖。古き御幸の物見とて。車も立つや御輿岡。これを此神の御族居の。右近の馬場わたり。神幸ぞ尊かりける。ワキ、馬あらありがたの御事や。かくしも委しく語り給ふ。社社の御本地を。なほなほ教へおはしませ。シテ、眞はわれは此神の。末社と現れ君が代を。守りの神と思ふべし。ワキ、馬よく聞けばありがたや。守の神とはさてきていづれの靈神にて。かやうに現れ給ふらん。シテ、馬あら恥かしや神ぞとは。馬あさまには何と岩代の。地、待つことありや有明の。待つことありや有明の。月も曇らぬ久方の。天照る神にては。櫻

の宮と現れ。こゝに北野の櫻葉の。神と夕の空晴れて。月の夜神樂を待ち給へと。花にかくれ
失せにけりや。花に隠れ失せにけり。(申入)
ワキ、騒げに今とても神の代の。げに今とても神の代の。誓は盡さぬ験とて。神と君との御惠み。
真なりけりありがたや。真なりけりありがたや。

後ジテ(北野神)すめらぎの畏き御代を守るなる。右近の馬場の春を得て。花上苑に明かにして。
輕軒九陌の塵に。交る神慮。和光の影も曇なき。君の威光も影高く。花も揺がす治まる風も。
長閑なる代のめでたさよ。地、曇なき。天照神の惠を受けては。櫻の宮居と現れ給ひ。シテ、こゝ
こに北野の。神の宮居に。地、花櫻葉の神と現れ。曇らぬ威光を顯し衣の。袖もかさしの花さ
かり。(申ノ舞)

地、月も照り添ふ花の袖。月も照り添ふ花の袖。雪を廻らす神かぐらの。手の舞ひ足踏拍子を
揃へ。聲澄み渡る雲の。花に戯れ。枝に結ばはれ。かさしも花の糸櫻。(破ノ舞)
シテ、治まる都の花盛。地、治まる都の花盛。東南西北も音せぬ波の。花も色添ふ北野の春

の。御池の水に御影を映し。映しうつろふ。櫻衣の。裏吹き返す楢に上り。枝に木傳ふ花鳥の。
鳥總に翔り雲に傳ひ。遙に上るや雲の羽風。遙に上るや雲の羽風に。神は上らせ給ひけり。

八十二 女郎花

シテ 小野朝風(前は老翁) ワキ侍
ツレ 小野朝風の妻

ワキ(侍)、「これは九州松浦瀉より出でたる僧にて候。われ未だ都を見ず候ほどに。此秋思ひ立ち都
に上り候。進行、住み馴れし。松浦の里を立ち出でて。松浦の里を立ち出でて。末不知火の筑紫
瀉。いつしか後に遠さがる。旅の道こそ遙なれ。旅の道こそ遙なれ。詞急き候ほどに。これはは
や津の國山崎とかや申し候。向に拜まれさせ給ふは。石清水八幡宮にて御座候。わが國の宇佐の
宮と御一體なれば。詣らばやと思ひ候。又、これなる野邊に女郎花の今を盛と咲き亂れて候。立ち
寄り眺めばやと存じ候。騒さても男山麓の野邊に来て見れば。千種の花盛にして。色を飾
り露を含みて。虫の音までも心あり顔なり。野草花を帯びて蜀錦を連れ。桂林雨を拂つて松風
を調む。此男山の女郎花は。古歌にも詠まれたる名草なり。これも一つは家土産なれば。花一本

を手折らんと。この女郎花のほとりに立ちよれば。シテ老翁、御のう其花な折り給ひそ。花の色は蒸
 せる粟の如し。俗呼ばつて女郎とす。戯れに名を聞いてだに借老を契るといへり。蓋ましてやこ
 れは男山の。名を得て咲ける女郎花の。多かる花に取りわきて。など情なく手折り給ふ。あらし心
 なの旅人やな。ワキ、御さて御身はいかなる人にてましますせば。これほど咲き亂れたる女郎花をば
 惜み給ふぞ。シテ、惜み申すこそ、理なれ。此野邊の花守にて候。ワキ、縦ひ花守にてまします。せ。
 御覽候へ出家の身なれば。佛に手向と思し召し。一本御ゆるし候へかし。シテ、げにげに出家の
 御身なれば。佛に手向と思ふべけれど。かの菅原の神木にも折らで手向けよと。其外古き歌にも。
 折りとらば手ぶさに穢る立てながら。詞三世の佛に花奉るなどと候へば。殊更出家の御身にこ
 そ。猶しも惜み給ふべけれ。ワキ、さやうに古き歌を引かば。何とて僧正遍昭は。名にめでて折
 れるばかりぞ女郎花とは詠み給ひけるぞ。シテ、いやさればこそわれ落ちにきと人に語るなど。深
 く忍ぶの摺衣の。女郎と契る草の枕な。ならべしまでは疑なれば。其御譬喩を引き給は。深
 出家の身にては御誤り。ワキ、誰かやうに聞けば戲ながら。色香に愛づる花心。詞とかく申すに

よしぞなき。暇申して歸るとて。蓋もと來し道に行き過ぐる。シテ、御おう優しくも所の古歌を
 ば知るしめしたり。蓋女郎花愛しと見ついで行き過ぐる。男山にし立てりと思へば。地、優しの旅
 人や。花は主ある女郎花。よし知る人の名にめでてゆるし申すなり。一本折らせ給へや。なまめ
 き立てる女郎花。なまめきたてる女郎花。うしろめたくや思ふらん。女郎と書ける花の名に。誰借
 老を契りけん。彼の邯鄲の假枕。夢は五十のあはれ世の。ためしも眞なるべしや。ためしも眞
 なるべしや。
 ワキ、此野邊の女郎花に眺め入りて。今此野の初に味。八幡宮に参らす候。シテ、此尉こそ唯今山
 上する者にて候へ。八幡への御道しるべ申し候べし。あなたへ御入り候へ。ワキ、聞きしに越えて
 貴くありがたかりける靈地かな。シテ、山下の人家軒を並べ。シテ、ワキ、二人、和光の塵も濁江の。河
 水に浮む鱗は。げにも生けるを放つかと。深き誓もあらたにて。惠ぞ繁き男山。榮行く道の
 ありがたさよ。地、頃は八月半の日。神の御幸なる御旅所を伏し拜み。久方の。月の桂の男
 山。月の桂の男山。さやけき影は所から。紅葉も照り添ひて。日もかげるふの石清水。苔の衣

も妙なりや。三つの袂に影映る。しるしの箱を納むなる法の神宮寺。ありがたかりし靈地かな。
 殿松 峙つて山聳え。谷廻りて諸木枝を連れたり。鳩の嶺越し来て見れば。三千世界もよそな
 らず。千里も同じ月の夜の。朱の玉垣御戸代の。錦かけまくも。忝しとふし拜む。
 シテ、阿「これこそ石清水八幡宮にて御座候へ。よくよく御拜み候へ。はや日の暮れて候へば御暇申
 し候べし。ワキ「のうのう女郎花と申す事は。此男山につきたる。謂にて候か。シテ「あら何ともな
 や。前に女郎花の古歌を引いて。戯を申し候も。徒事にて候。女郎花と申すこそ。男山につきた
 る。謂にて候へ。又此山の麓に。男塚女塚とて候を見せ申し候べし。こなたへ御入り候へ。これ
 なるは男塚。又此方なるは女塚。この男塚女塚について女郎花の謂も候。これは夫婦の人の土
 中にて候。ワキ「さて其夫婦の人の國は何處。名字はいかなる人やらん。シテ「女は都の人。男は
 此八幡山に。阿「小野の頼風と申しし人。地「恥かしや古を。語るもさすがなり。申されば又亡き
 跡を。誰か稀にも用ひの。便を思ひ頼風の。更け行く月に木隠れて。夢の如くに失せにけり。夢
 の如くに失せにけり。(中入)

ワキ「一「夜伏す。男鹿の角の塚の草。男鹿の角の塚の草。陰より見えし亡魂を。用ふ法の聲立て
 て。南無幽靈出離生死頓證菩提。
 後ジテ(小野頼風)「おう荒野人稀なり。わが古墳ならで又何物ぞ。ツレ「小野頼風の「骸を争ふ猛獸は。
 禁するに能はず。シテ「なつかしや聞けば昔の秋の風。ツレ「うら紫か葛の葉の。シテ「歸らば連れ
 る妹背の波。地「消えにし魂の女郎花。花の夫婦は現れたり。あらありがたの御法やな。ワキ「影の
 如くに亡魂の。現はれ給ふふしきさま。ツレ「わらはは都に住みし者。かの頼風に契をこめしに。
 シテ「阿「少し契のさばりある。人まを眞と思ひけるか。ツレ「女心のはかなさは。都を獨あくが
 れ出でて。猶も恨の思深き。放生川に身を投ぐる。シテ「阿「頼風「これを聞きつけて。驚き騒ぎ
 行き見れば。あへなき死骸ばかりなり。ツレ「泣く泣く死骸をとり上げて。此山本の土中に籠めし
 に。シテ「阿「其塚より女郎花一本生ひ出でたり。頼風「心に思ふやう。置さては我が妻の女郎花に
 なりけるよと。なほ花色もなつかしく。草の秋もわが袖も。露觸れ初めて立ちよれば。此花恨み
 たる氣色にて。夫のよれば靡き退き。又立ち退けばもとの如し。地「こゝによつて貫之も。男山

の昔を思つて。女郎花の一時を。くれると書きし水莖の。あとの世までもなつかしや。頼風其時に。かの哀れさを思ひとり。むざんやな我れ故に。よしなき水の泡と消えて。徒なる身となるも。偏にわが科ぞかし。若かじ浮世に住まぬまでと。同じ道にならんとて。シテ續いて此河に身を投げて。地共に土中に籠めしより。女塚に對して。又男山と申すなり。其塚はこれ。主はわれ。幻ながら来りたり。跡用ひてたび給へ。跡用ひてたび給へ。其念力の。道もさか地。あら闇淨。戀しや。邪淫の悪鬼は身を責めて。邪淫の悪鬼は身を責めて。磐石は骨しき劍の山の。上に戀しき人は見えたり。嬉しやとて行き登れば。劍は身を通し。磐石は骨を砕く。こはそもいかに恐るしや。劍の枝の挽むまで。いかなる罪のなれる果ぞや。よしなかりける花の一時を。くれるも夢ぞ女郎花。露の臺や花の縁に。浮めてたび給へ。罪を浮めてたび給へ。

八十三 關寺小町

ワキ(關寺住僧) 待ち得て今ぞ秋にあふ。待ち得て今ぞ秋にあふ。星の祭を急がん。 問(これは江州關)

ワキ 小野小町 子 方 寺の兒
關寺住僧 ワキツレ 同

寺の住僧にて候。けふは七月七日にて候ほどに。七夕の祭を執り行ひ候。又此山陰に老女の庵を結びて候が。歌道を極めたる由申し候ほどに。幼き人人を伴ひ申し。かの老女の物語をも承らばやと存じ候。ワキツレ(關寺住僧) 颯颯たる涼風と衰髪と。一時に来る初秋の。七日の夕にはやなりぬ。ワキツレ(關寺住僧) 七夕の夕の。糸竹呂律の色。色に。ワキツレ(關寺住僧) 事を盡して。ワキツレ(關寺住僧) 敷島の。ワキツレ(關寺住僧) 道を願の糸はへて。道を願の糸はへて。織るや錦のほた。薄。花をも添へて秋草の。露の玉琴かき鳴す。松風までも折からの。手向に適ふ夕かな。手向に適ふ夕かな。シテ(小野小町) 朝に一鉢を得ざれども求むるに能はず。草衣夕の肌を隠さざれども。おぎぬふに便あり。花は雨の過ぐるによつて。紅まきにおいたり(是は「花田雨過紅將老」といふ語によれり)。柳は風に欺かれて。縁やうやく垂れり。人更に若きことなし。終には老の鶯の。百轉りの春は來れども。昔に歸る秋はなし。あらこし方戀しや。あらこし方戀しや。ワキツレ(關寺住僧) いかにかに老女に申すべき事の候。これは關寺に住む者にて候。此寺の兒達歌を御稽古にて候が。老女の御事を聞き給ひ。歌を詠むべき様をも問ひ申し。又御物語をも承らんために。兒達もこ

れまで御出でて候。シテ(今世の上)「これ」思ひもよらぬ事を承り候ものかな。埋木の人知れぬ事となり。花薄穂に出だすべきにしもあらず。心を種として言葉の花色香に染まば。などか其風を得ざらん。優しくも幼き人の御心にすぎ給ふものかな。ワキ「まづまづ普く人の既び候は。難波津の歌を以て。手習ふ人の始にもすべきよし聞え候よのう。シテ「それ歌は神代より始まれども。文字の敷定まらずして。事の心分き難かりけらし。今人の代となりて。めでたかりし世繼を詠み治めし詠歌なればとて。難波津の歌を既び候。ワキ「又淺香山の歌は。大君の御心を和げしゆゑに。これ亦めでたき詠歌よのう。シテ「げによく心え給ひたり。此二歌を父母として。ワキ「手習ふ人の始めとなりて。シテ「高き賤しき人をも分かす。ワキ「都鄙遠國の鄙人や。シテ「われら如きの庶人までも。ワキ「好ける心に。シテ「近江の海の。地ささ波や。浪の眞砂は盡くるとも。浪の眞砂は盡くるとも。詠む言の葉はよも盡きじ。青柳の糸絶えず。松の葉の散り失せぬ。種は心と思し召せ。たとひ時移り事去るとも。この歌の文字あらば。鳥の跡も盡きせじや。鳥の跡も盡きせじや。

ワキ「關「ありがたう候。古き歌人の言葉多しといへども。女の歌は稀なるに。老女の御事ためし少なりこそ候へ。我がせこが來べき宵なりさゝがにの。蜘蛛の振舞かれてしるしも。これは女の歌候か。シテ「これは古衣通姫の御歌なり。衣通姫とは允恭天皇の后にたまはります。形の如くわれらも其流をこそ學び候へ。ワキ「さては衣通姫の流を學び給ふかや。近年聞えたる小野の小町こそ。衣通姫の流とは承れ。佐びぬれば身を浮草の根を絶えて。誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ。これは小町の歌候な。シテ「これは大江の惟章が心變りせし程に。世の中物うかりしに。同文屋の康秀が三河の守になりて下りし時。田舎にて心をも慰めよかしと。われを誘ひしほどに詠みし歌なり。忘れて年を経しものを。聞けば涙の古事の。又思はるゝ悲しさよ。ワキ「關「ふしぎやな佐びぬればの歌は。我が詠みたりしと承る。又衣通姫の流と聞えつるも小町なり。げに年月を考ふるに。老女は百に及ぶといへば。縦ひ小町の長らふるとも。未だ此世にあるべきなれば。今は疑ふ所もなく。御身は小町のはてぞとよ。誰さのみなつゝみ給ひそとよ。シテ「いや小町とは恥かしや。色見えてこそ詠みしものを。地「移るふものは世の中の。人の心の花や見ゆる。恥かしや

佗びぬれば。身を浮草の根を絶えて。誘ふ水あらば。今もいなんとぞ思ふ恥かしてや。
 地蔵げにや包めども。袖にたまらぬ白玉は。人を見ぬ目の涙の雨。古事のみを思草の。花萎れた
 る身のはてまで。何白露の名残ならん。シテ「思ひつつ寝ればや人の見えつらんと。地蔵詠みしも今
 は身の上に。長らへきぬる年月を。送り迎へて春秋の。露行き霜来つて草葉變じ。虫の音も枯れた
 り。シテ「生命既にかぎりとなつて。地蔵唯種花一日の榮に同じ。有るは無く。無きは數添ふ世の中
 に。あはれいづれの日まで歎かんと。詠ぜし事も我ながら。いつまで草の花散じ。葉落ちても残り
 けるは露の命なりけるぞ。戀しの昔や。忍ばしの古の身やと。思ひし時だにも。又古事になり
 ゆく身の。せめて今は又。はじめの老ぞ戀しき。あはれげに古は。一夜泊りし宿までも。玳瑁を
 飾り。垣に金花を懸け。月には水精を連れつつ。鸞輿 屬車の玉衣の。色を飾りて敷妙の。枕つ
 く。つまやの内にしては。花の錦の菌の。起臥なりし身なれども。今は埴生の。こや玉を敷きし
 床ならん。シテ「關寺の鐘の聲。地蔵諸行無常と聞くなれども。老耳には益もなし。逢坂の山風の。
 是生滅法の理をも得ばこそ。飛花落葉のりをりは。好ける道とて草の月に。硯をならしつゝ

筆を染めて藻鹽草。書くや言の葉の枯れ枯れに。哀なるやうにて強からず。強からぬは女の歌な
 れば。いとどしく老の身の。弱り行くはてぞ悲しき。
 子方(寺の)思(明)いかに申し候。七夕の祭 運なほり候。老女をも伴ひ御申し候へ。ワキ「いかに老女。
 たなはたまつりおんい。七夕の祭 運なほり候。老女をも伴ひ御申し候へ。ワキ「いかに老女。
 七夕の祭を御出であつて御覽候へ。シテ「いやいや老女が事は憚りに候ほどに。思ひもよらず候。
 ワキ「何の苦しう候へき。唯唯御出で候へとよ。地蔵「七夕の。織る糸竹の手向草。幾年経てかかけ
 るふの。小野の小町の百年に。及ぶや天つ星あひの。雲の上人に馴れ馴れし。袖も今は麻衣の。
 淺ましや痛はしや。目もあてられぬ有様。とても今宵は七夕の。とても今宵は七夕の。手向の敷も
 色色の。或は糸竹に懸けて廻らす。盃の。雪を受けたる。童舞の袖ぞ面白き。星祭るなり吳竹の。
 シテ「世世を経て住む行末の。地蔵「幾久しきぞ萬歳樂。
 シテ「聞「あら面白の唯今の舞の袖やな。昔豊の明の五節の舞姫の。袖をこそ五度返ししが。これは
 又七夕の手向の袖ならば。地蔵七返しにてやあるべき。同狂人走れば不狂人も走るとかや。今
 の童舞の袖に引かれて。狂人こそ走り候へ。百年は。(舞)

シテ、百年は。花に宿りし胡蝶の舞。地哀なり哀なり。老木の花の枝。シテ、さす袖も手忘れ。地、裳裾も足弱く。シテ、ただよふ波の。地、立ち舞ふ袂は翻せども。昔に返す袖はあらばこそ。シテ、鷹、あら戀しのいにしへやな。地、さるほどに初秋の短夜。はや明方の關寺の鐘。シテ、鳥も顔りに。地、告げ渡る東雲の。朝間にもならば。シテ、羽束師の杜の。地、羽束師の杜の木隠れもよもあらじ。暇申して歸るとて。杖にすがりてよるよると。もとの薬屋に歸りけり。百年の姥と聞えしは。小町が果の名なりけり。小町が果の名なりけり。

八十四 自然居士

ワキ 自然居士
ワキツレ 同

狂言(里人)「かやうに候者は。東山雲居寺のあたりに住まひ仕る者にて候。こゝに自然居士と申す。喝食の御座候が。一七日説法を御述へ候。今日結願にて御座候。皆皆参りて、聽聞申し候へ。シテ(自然居士)「雲居寺造營の札召され候へ。夕の空の雲居寺。月待つ程の慰に。説法一座述へんとて。導師講座に上り。發願の釘打ちならし。謹み敬つて白す。一代教主釋迦牟尼寶號。

三世の諸佛十方の薩埵に申して白さく。總神分に般若心經。同や。これは説法を御上げ候が。狂言「げにこれは美しき小袖にて候。急いでこの説法を御覽候へ。シテ、敬つて白す受くる説法の事。三寶衆僧の御布施一裹。右志す所は。二親聖靈項證佛果のため。身の代衣一重。三寶に供養し奉る。かの西天の貧女が。一衣を僧に供せしは。身の後の世の逆縁。今の貧女は親のため。地、身の代衣恨めしき。身の代衣恨めしき。浮世の中をとく出でて。先考先妣諸共に。同じ臺に生れんと。讀み上げ給ふ自然居士。墨染の袖を濡らせば。數の聽衆も色色の袖を濡らさぬ人はなし。袖を濡らさぬ人はなし。

ワキ(商人)「かやうに候者は。東國方の商人にて候。われ此度都に上り。數多人を買ひ取りて候。又十四五ばかりなる女を買ひ取りて候が。きのふ少しの間、暇を乞ひて候ほどにやりて候が。未だ歸らず候。のうわたり候か。きのふの幼き者は。親の追善とやらん申して候ひつるほどに。説法の座敷にあらうすると存じ候。自然居士の雲居寺に御座候ほどに。立ち越え見うするにて候。ワキツレ(商人)「然るべう候。ワキ「や。さればこそこれに候。のう急いで連れて御入候へ。狂言「やるま

いぞ。ワキ用があるぞ(此二字今省)。狂言用があらば連れて行け(今はいかに居士へ申)。シテ何事にて候ぞ。
 狂言さん候(三字今は省)。唯今調誦を上げて候女を。あらけなき男の來り候ひて追つ立てて行き
 候程に。やるまじきと申し候へば。用があると申し候ほどにやりて候。シテあら曲もなや候。
 始よりかの女はやうありげに見えて候。其上調誦を上げ候にも。唯小袖とも書かず。身の代衣
 と書いて候よりちと不審に候ひしが。居士が推量申すは。かの者は親の追善の爲に。我が身を此
 小袖に代へて調誦を上げたると思ひ候。さあらば唯今の者は人商人にて候べし。かれは道理。こ
 なたは僻事にて候ほどに。御身の留めたる分にてはなり候まじ。狂言人商人ならば東國へ下り候
 べし。大津松本へ某走り行き留めうするにて候。シテ暫く。御出で候分にてはなり候まじ。居
 士此小袖を持ちて行き。(今は此句の始に「かの」の女に代へて連れて歸らうするにて候。狂言いやそれば
今日までの御説法が無になり候べし。シテいやいや説法は百日千日聞し召されても。善惡の二
つを辨へん爲ぞかし。今の女は善人。商人は悪人。善惡の二道に極まつて候はいかに。賤け
ふの説法はこれまでなり。願以此功德普及於一切。我等與衆生皆共成。佛道修行のためなれ

ば。地身を捨て人を助けし。ワキ二人(今出でて)。そこともいさや白波の。此舟路をや急ぐらん。
 シテ舟なくとも説く法の。地道にこゝろを。とめよかし。
 シテ調のうのう其御舟へ物申さう。ワキ調これ山田矢橋の渡舟にてもなきものを。何しに招
 かせ給ふらん。シテわれも旅人にあらざれば。波の舟とも申さばこそ。其御舟へ物申さう。
 ワキさて此舟をば何舟と御覽じて候ぞ。シテ其人買舟の事さうよ。ワキあ音高し何と何と。
 シテ道理道理。餘所にも人や白波の。音高しとは道理なり。ひとかいと申しつるは。其舟漕ぐ權
 の事さうよ。ツン、權にはからるといふものあり。ひとかいと云ふ權はなきに。シテ水の煙の
 霞をば。一霞二霞。一沙二沙などといへば。今漕ぎ初むる舟なれば。一權舟とは僻事
 か。ワキ調げに面白くも述べられたり。扱扱何の用やらん。シテこれは自然居士と申す説經者
 にて候が。説法の場合(今)。さまざま申す。怨申しに來りたり。ワキ説法には道理を述べ給
 ふ。問われらに僻事なきものを。シテ御僻事とも申さばこそとにかくに。もとの小袖は参らす。
 舟に離れて適はじと。裳裾を波に浸しつ。舟端に取りつきひき留む。ワキあら腹立ちやさりな

ながら。法衣に恐れて得は打たす。これも汝が料ぞとて。船櫃を以つてさんさんに打つ。シテ打た
 れて聲の出でざるは。若し空しくやなりつらん。ワキ、何しに空しくなるべきと。シテ引き立て
 見れば。ワキ、身には繩。地口には綿の響をはめ。泣けども聲が出でばこそ。シテ、あら不便の
 者や。やがて連れて歸らうするぞ。心安く思ひ候へ。ワキ、のう自然居士舟より御下り候へ。
 シテ、此者を賜り候へ。小袖を召され候上は。返し給はらうするにて候。(此一句今は「御」ワキ「参らせたく
 は候へども。ここに笑止が候。シテ、何事にて候ぞ。ワキ、さん候われらが中に大法の候。それを
 いかにと申すに。人を買ひ取つて再び返さぬ法にて候ほどに。え参らせ候まじ。シテ、委細承り
 候。又われらが中にも堅き大法の候。かやうに身を徒になす者に行き逢ひ。若し助け得れば。再
 び庵室へ歸らぬ法にて候ほどに。其方の法をも破るまじ。又、なたの法をも破られ申すまじ。所詮
 此者と連れて奥陸奥の國へは下るとも。舟よりは下りまじく候。ワキ、舟より御下りなくは拷訴を
 致さう。シテ、拷訴といつば捨身の行。ワキ、命を取らう。シテ、命を取るともふつつと下りまじ
 い。ワキ、何と。命を取るともふつつと下りまじいと候や。シテ、なかなかの事。ワキ、いや此自然

居士にもてあつかうて候よ。のう渡り候か。ワキ、何事にて候ぞ。ワキ、さてこれは何と仕り候
 べき。ツレ、これは御返しなうては適ひ候まじ。よくよく物を案じ候に。奥より人商人の都に上り
 人に買ひかれて。自然居士と申す脱經者を買ひ取り下りたるなどと申し候はば。一大事にて候
 ほどにお返しなうては適ひ候まじ。ワキ、我らもさやうに存じ候さりながら。ただ返せば無念に候ほ
 どに。色色になぶつて其後(二字今は)返さうするにて候。ツレ、尤然るへう候。ワキ、のうのう自然
 居士急いで舟より御あがり候へ。(今は此處にシテ「いや」や「御下り」は下りまじく候。ワキ)シテ、ああ船頭殿の御顔
 の色こそ直つて候へ。ワキ、いやちつとも直り候まじ。又、これなる人の申され候は。今度始めて都へ
 上りて候が。自然居士の舞の事を承り及びて候。一さし舞うて御見せあれと申され候。シテ、惣じ
 て居士は舞まうたる事はなく候。ワキ、それは御僞にて候。一年今の如く説法御述べ候ひし時。い
 で聴衆の眠覺さんと。講座の上にて一さし御舞ひありし事。奥までもその聞え候ほどに。一さ
 し御舞ひ候へ。シテ、おうそれは狂言綺語にて候ほどに。さやうの事も候へし。舞を舞ひ候はば
 此者を賜り候べきか。ワキ、まづ御舞を見て。其時の仕儀によつて参らせ候へし。これに烏帽子の

候。これを召して御舞ひ候へ。シテよくよく物を案ずるに。終には此者を賜はらんすれども。唯返せば無念(二字今は「恨」なり。居士を色色になぶつて恥を與へうと候な。餘りにそれはつれなう候。ワキ「何のつれなう候べき。シテ、詞「志賀辛崎のまつ松。地「つれなき人の心かな。シテ、臨「そもそも舟の起源を尋ぬるに。みなかみ黄帝の御宇より事起つて。地「流れ貨狄が計より出でたり。シテ「こゝに又蚩尤といへる逆臣あり。地「彼を亡さんとし給ふに。烏江といふ海を隔てて。攻むべきやうもなかりしに。黄帝の臣下に貨狄といへる士卒あり。ある時貨狄。庭上の池の面を見渡せば。をりふし秋の未なるに。寒き嵐に散る柳の一葉水に浮みしに。又蜘蛛といふ虫。これも虚空に落ちけるが。其一葉の上に乗る。次第次第にさゝがにの。いとほかなくも柳の葉を。吹き来る風に誘はれ。汀によりし秋霧の。立ちくる蜘蛛のふるまひ。げにもと思ひ初めしより。工みて舟を造れり。黄帝これに召されて。烏江を漕ぎ渡りて。蚩尤を易く亡し。御代を治め給ふ事。一萬八千歳とかや。シテ「然れば船のせんの字を。地「きみにすすむと書きたり。さて又天子の御顔を龍顔と名づけ奉り。舟を一葉と云ふ事。此御宇より始められり。又君の御座舟

を。龍頭鶴首と申すも此御代より起れり。ワキ「詞「いかに申し候。われらが舟を龍頭鶴首と御祝ひ候事過分に存じ候。とても事に能はずつて御見せ候へ。シテ「さらば竹を賜り候へ。ワキ「をりふし船中に竹が候はぬよ。シテ「苦しからず候。かの佛の難行苦行し給ひしも。一切の衆生を助けん爲ぞかし。居士も亦その如く。身をこつかに砕きても。かの者を助けん爲なり。それ能の起源を尋ぬるに。東山にある御僧の。扇の上に木の葉のかりしを。持ちたる數珠にて。さらりさらりと拂ひしより。さらりと云ふ事始まりたり。居士も亦その如く。さらりのこには百八の數球。さらりの竹には扇の骨。おつとり合せこれをする。匠所は志賀の浦なれば。地「ささ波や。ささ波や。志賀辛崎の松の上葉を。さらりさらりとささらのまねを。數珠にてすれば。さらりより猶手をもするもの。今は助けてたび給へ。ワキ「詞「手をするなどと承り候ほどに参らせ候へし。とても事に羯鼓を打つて御見せ候へ。地「臨「本より鼓は波の音。もとより鼓は波の音。寄せては岸をどうとは打ち。雨雲迷ふ鳴神の。といるといると鳴る時は。降り来る雨ははらはらはらと。小笹の竹の。さららなすり。池の氷のと

うとうと。鼓を又打ちさしらを猶摺り。狂言ながらも法の道。今は菩提の岸に寄せ来る船のうちより。ていとうとうとうち連れて。共に都に上りけり。共に都に上りけり。

八十五 大 會

ワキ(山僧) 天(前は密僧) ワキ 山僧

ワキ(山僧)「それ一代の教法は。五時八教をけづり。教内教外を分たれたり。五時といつば。華嚴阿含方等般若法華。四教とはこれ藏通別圓たり。遮那教主の秘藏を受け。五想成身の峰を開きしより以來。誰か佛法を崇敬せざらん。げにありがたき御法とかや。地蔵の御山をうつつなる。鷺の御山をうつつなる。一佛乗の嶺には。眞如の惠日圓なり。鳥三寶を念じて。風常樂とおとづる。げにたぐひなき。深山かな。げにたぐひなき深山かな。シテ(密僧)「月は古殿の燈火を挑げ。風は空廓の箒となつて。石上に塵なく滑かなる。苔路を歩みよるべの水。あら心すこの山洞やな。問いかに此庵室の内へ案内申し候。ワキ「調「われ禪閑の窓に向ひ。心を澄ます處に。案内申さんとはいかなるもので。シテ「これは此あたりに住まひする客

僧にて候。われ既に身まかるべきな。御憐みにより命助かり申す事。返す返すもありがたう候。此事申さん爲にこれまで参りて候。ワキ「これは思ひも寄らぬことを承り候ものかな。命を助け申すとは。更に思ひもよらず候。シテ「都東北院のあたりにての御事なり。定めて思し召し合すべし。誰かばかりの御志。なかば申し上げざらん。同此報恩に何事にもあれ。御望の事候はば。刹那に適へ申すべし。ワキ「げにさる事のありしなり。又望を適へ給はんこと。此世の望更になし。たゞし釋尊靈鷲山にての御説法の有様。まのあたりに拜み申したくこそ候へ。シテ「それこそ易き御望なれ。眞さやうに思しめさば。即ち拜ませ申すべし。さりながら貴しと思し召すならば。必ずわがため悪しかるべし。誰かまへて疑ひ給ふなど。地「返す返すも約諾し。返す返すも約諾し。さあらばあれに見えたる杉一村に立ち寄りて。目をふさぎ待ち給ひ。佛の御聲の聞えなば。其時兩眼を開きて。よくよく御覽候へと。云ふかと思れば雲霧。降りくる雨の足音。ほろほろと歩み行く道の。木の葉をさつと吹き上げて。梢にあがり。谷に下り。かき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。(中ぎ)

後ジテ(天狗)「それ山は小さき土壌を生ず。かるがゆゑに高きことをなし。海は細き流を厭はず。ゆゑに深きことをなす。地ふしぎや虚空に音楽響き。ふしぎや虚空に音楽響き。佛の御聲あらたに聞ゆ。兩眼を開きあたりを見れば。シテ山は即ち靈山となり。地大地は金瑠璃。シテ木は又七重寶樹となつて。地釋迦如來獅子の座に現れ給へば。普賢文殊左右に居給へり。菩薩聖衆雲霞の如し(含如しの二字は「如く」と讀む)。砂の上には龍神八部。おのおの拜し圍繞せり。シテ迦葉阿難の大聲聞。地迦葉阿難の大聲聞は一面に座せり。空より四種の花降り下り。天人雲に連り微妙の音楽を奏す。如來肝心の。法文を説き給ふ。げにありがたき景色かな。ワキ僧正其時忽ちに。地僧正其時忽ちに。信心を發し。隨喜の涙眼に浮み。一心に合掌し。歸命頂禮大恩教主。釋迦如來と。恭敬禮拜するほどに。俄に壑嶺響き震動し。帝釋天より下り給ふと。見るより天狗おのおの騒ぎ。恐怖をなしけるふしぎさよ。地刹那が間に喜見城の。刹那が間に喜見城の。帝釋現はれ數千の魔術を。あさまになせば。ありつる大會。散り散りになつてぞ見えたりける。(傳説)

地「帝釋この時怒り給ひ。帝釋この時怒り給ひ。かばかりの信者をなど驚かすと。忽さんざんに苦を見せ給へば。羽風を立てて。翔らんとすれども。もぢり羽になつて飛行もかなはねば。恐れ奉り拜し申せば。帝釋即ち雲路をさして上らせ給ふ。其時天狗は岩根を傳ひ。下るとぞ見えし。岩根を傳ひ下ると見えて。深谷の岩洞に入りけり。

八十六 三輪

ワキ 三輪明神(前は女) 支笏僧都

ワキ(支笏僧都)「これは和州三輪の山陰に住まひする支笏と申す者(一字今は「抄」にて候。さても此程檜關伽の水を汲みて此僧に與ふる者の候。(此一何今は「さても此程いづくともなく女性」)今日も來りて候はば。いかなる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候。シテ(女)「三輪の山もと道もなし。三輪の山もと道もなし。檜原の奥を尋ねん。げにや老少不定と。世のなかなかに身は残り。幾春秋をか送りけん。淺ましやなす事なくて徒に。うき年月を三輪の里に。住まひする女にて候。又此山陰に支笏僧都とて。貴き人の御入り候ほどに。いつ

も櫛闕伽の水を汲みてまゐらせ候。今日も又参らばやと思ひ候。ワキ、山頭には夜孤輪の月を戴き。洞口には朝一片の雲を吐く。山田守るそほづの身こそ悲しけれ。秋果てぬれば訪ふ人もなし。シテ、剛「いかに此庵室の内へ案内申し候はん。ワキ、案内申さんとはいつも櫛闕伽の水もちて(八字今親世流に)來れる人か。シテ、山影門に入つて推せども出でず。ワキ、月光地に鋪いて掃へども又生ず。シテ、ワキ、二人「鳥聲とこしなへにして。老生と靜なる山居。柴の編戸を押し開き。かくしも尋れ切櫛。罪を助けてたび給へ。秋寒き窓の内。秋寒き窓の内。軒の松風うちしぐれ。木の葉かきしく庭の面。門は葎や閉ぢつらん。下樋の水音も。苔に聞えて靜なる此山住ぞ寂しき。シテ、剛「いかに上人に申すべき事の候。秋も夜寒になり候へば。御衣を一重賜はり候へ。ワキ、易きあひだの事此衣を進らせ候へし。(今は此間にシテ「あらありがたやさふらふ。さらは即」)ワキ、さてさて御身はいづくに住む人ぞ。シテ、わらはが栖は三輪の里。山もと近き所なり。其上我が庵は。三輪の山も戀しくはとは詠みたれども。何しにわれをば訪ひ給ふべき。なほも不審に思し召さば。嵩とむらひ來ませ。地「杉立てる門をしるしにて。尋ね給へと云ひ捨て。かき消す如くに失せにけり。(申入)

ワキ、此草庵を立ち出でて。此草庵を立ち出でて。行けば程なく三輪の里。近きあたりか山陰の。松はしるしもなかりけり。杉村ばかり立つなる神垣は何處なるらん。神垣は何處なるらん。ふしぎやなこれなる。杉の二本を見れば、ありつる女人に與へつる衣の懸りたるぞや。寄りて見れば衣の袂に。金色の文字すわれり。讀みて見れば歌なり。三つの輪は清く清きぞ唐衣。くると思ふな取ると思はじ。
 後ジテ「三輪明神、諸「ちはやぶる。神も願のあるゆゑに。人の知遇に逢ふぞ嬉しき。ワキ、ふしぎやなこれなる杉の木蔭より。妙なる御聲の聞えさせ給ふぞや。願はくは末世の衆生の願をかなへ。御姿をまみえおはしませと。念願深き感涙に。墨の衣を濡すぞや。シテ「恥かしながら我が姿。上人にまみえ申すべし。罪を助けてたび給へ。ワキ、いや罪科は人間にあり。これは妙なる神道の。シテ「衆生濟度の方便なるを。ワキ「しばし迷ひ。シテ「人心や。漁女姿と三輪の神。女姿と三輪の神。ちはや掛帯引きかへて。唯祝子が著すなる。烏帽子狩衣。裳裾の上に掛け。御影あらたに見え給ふ。かたじけなの御事や。それ神代の昔物語は末代の衆生のため。濟度方便の

事業品品以つて世の爲なり。シテ中にも此敷島は。人敬つて神力ます。地五濁の塵に交り。しばし心は足曳の大和の國に年久しき夫婦の者あり。八千代をこめし玉椿。變らぬ色を頼みけるに。されども此人。夜は來れども晝見えす。或夜の睦言に。御身如何なる故により。かく年月を送る身の。晝をば何とむば玉の。夜ならで通ひ給はぬは。いと不審多き事なり。唯同じくはとこしなへに。契をこむべしとありしかば。かの人答へ云ふやう。げにも妾は恥かしの。もりて餘所にや知られなん。今より後は通ふまじ。契も今宵ばかりなりと。ねんごろに語れば。さすが別の悲しさに。歸る所を知らんとて。夢環に針をつけ。裳裾にこれを綴ちつけて。後を控へて慕ひ行く。シテまた青柳の糸長く。地結ぶや早玉の。己が力にさいがにの。糸くり返し行く程に。此山もその神垣や。杉の下枝に止りたり。こはそも淺ましや。契りし人の妾が其糸の三わけ残りしより。三輪のしるしの過ぎし夜を。語るにつけて恥かして。地、語りげにありがたき御相好。聞くにつけても法の道。なほしも頼む心かな。シテとても神代の物語。くはしくいざや現し。かの上人を慰めん。地、まづは岩戸の其始。隠れし神を出ださんと

て。八百萬の神遊。これぞ神樂の始なる。シテちはやぶる。(神樂) 天の岩戸を引き立てて。地、神は跡なく入り給へば。常闇の世とはやなりぬ。シテ八百萬の神たち。岩戸の前にてこれを歎き。神樂を奏して舞ひ給へば。地、天照太神其時に。岩戸を少し開き給へば。又常闇の雲晴れて。日月光り耀げば。人の面しるじると見ゆる。シテ面白やと神の御聲の。地、妙なる始の物語。思へば伊勢と三輪の神。思へば伊勢と三輪の神。一體分身の御事。今更何と岩倉や。その關の戸の夜もあけ。かくありがたき夢の告。覺むるや名残なるらん。覺むるや名残なるらん。

八十七 安宅

シテ 辨 行 山 履 子 方 義 經
ワキ 宿 同 行 山 履 子 方 義 經

ワキ(宿禰)詞、かやうに候者は。加賀の國富樫の何某にて候。さても賴朝義經御中不和にならせ給ふに。より。判官殿十二人の作山伏となつて。奥へ御下向の由賴朝聞し召し及ばれ。國國に新關を立てて。山伏を固く選み申せとの御事にて候。さるあひだ此所をば。某承つて山伏をとめ申し候。今日も固く申しつけばやと存じ候。いかに誰かある。狂言(後者)御前に候。ワキ、今日も山

伏の御通りあらば此方へ申し候へ。狂言畏つて候。ツレ(同行山伏)旅の衣は篠懸の。旅の衣は篠懸の。露けき袖やしをるらん。鴻門橋破れ都の外の旅衣。日もはるばるの越路の末。思ひやるこそ遙なれ。シテ(辨慶)さて御供の人人には。ツレ(山伏)伊勢の三郎駿河の次郎。片岡増尾常陸坊。シテ(辨慶)先達の姿となりて。ツレ(主従以上十二人)未だ習はぬ旅姿。袖の篠懸露霜を。けふ分け染めていつまでの。限もいさや。白雪の越路の春に急ぐなり。時しも頃は二月の。時しも頃は二月の。二月の十日の夜。月の都を立ち出でて。これやこの。行くも歸るも別れては。行くも歸るも別れては。知るも知らぬも逢坂の。山隠す霞そ春は怨めしき。霞そ春は怨めしき。浪路遙に行く舟の。浪路遙に行く舟の。海津の浦に著きにけり。東雲早く明け行けば。浅茅色づく有乳山。氣比の海。宮居久しき神垣や。松の木芽山。猶行く先に見えたるは。柚山人の板取。河瀬の水の朝津や。未は三國の湊なる。蘆の篠原波よせて。靡く嵐のはげしきは。花の安宅に著きにけり。花の安宅に著きにけり。シテ(如何)如何に申し上げ候(此一句今は「御意候は」といふは「暫く此所に御休みあらうするにて候。義經い

かに辨慶。シテ(御前に候。義經)唯今旅人の申して通りつる事を聞いてあるか。シテ(い)や何とも承らす候。義經(安宅の湊に新關を立てて。山伏を固く選ぶとこそ申しつれ。シテ(言)言詰道断の御事にて候ものかな。さては御下向を存じて立てたる關と存じ候。これはゆいとき御大事にて候。まづ此傍にて皆皆(二字今は暫く)御談合あらうするにて候。これは一大事の御事にて候あひだ。皆皆心中の通を御意見御申しあらうするにて候。ツレ(われらが心中には何程の事の候べき。唯打ち破つて御通りあれかしと存じ候。シテ(暫く。仰せの如く此關一所打ち破つて御通りあらうするは易き事にて候へども。御出で候はんする行末が御大事にて候。唯何ともして無異の義が然るべからうすると存じ候。義經)ともかくも辨慶計らひ候へ。シテ(畏)つて候。某きつと案じ出だしたる事の候。われらを始めて皆皆につくい山伏にて候が。何と申しても御姿かくれ御座なく候あひだ。此まゝにてはいかゝと存じ候。恐多き申し事にて候へども。御篠懸をのけられ。あの強力が負ひたる笈をそと御肩に置かれ。御笠を深深と召され。如何にもくたびれたる御體にて。われらより後に引きさがつて御通り候は。なかなか人は思ひもより申すまじきと存じ候。義經)げにこれは

尤もつともにて候。さらば篠懸すやかけを取り候へ。シテ承うけたまはり二字今は候。いかに強がうりき力ちから。狂言きやうげん強ちから力ちから御前おんまへに候。シテおひ箆おひを持ちもちて來きたり候へ。狂言きやうげん畏かしこまつて候。シテなんぢ汝なんぢが箆おひを御肩おんかたに置おかることは。なんばう冥加みやうがもなき事ことにてはなきか。まづ汝なんぢは先さきへ行き關せきの樣體やうたいを見みて。眞まことに山伏やまぶしを選えらむか。又またさやうにもなきか 懇ねんころみに見きたて來きたり候へ。(狂言きやうげんシカク)

シテ、剛おんたさらば御立おんたちあらうするにて候。強がうりきげにや紅くれないは園生そのふに植うゑても隠かくれなし。ツレがうりき強ちから力ちからにはよも目を懸かけじと。御篠懸おんすやかけを脱ぬぎ替かへて。麻あさの衣ころもを御身おんみに纏まとひ。シテ、あの強がうりき力ちからが負おひたる箆おひを。義經よしつねとつて肩かたにかけ。ツレおひ箆おひの上うへには雨皮形箱あまがはかたはこ取りつけて。義經よしつね綾あや菅笠すげがさにて顔かほを隠かくし。ツレこんがうづゑ金剛杖こんがうづゑにすがり。義經よしつね足痛あしいたげなる強がうりき力ちからにて。地ちよろよろとして歩あゆみ給たまふ御有おんあり様さま痛いたはしき。シテ、剛おんたわれらより後あとに引ひきさがつて御出おんいであらうするにて候。さらば皆みな皆みな御通おんとほり候へ。ツレうけたまは承うけたまはり候。

狂言きやうげんいかに申まうし候。山伏やまぶし達たらの大勢おほぜい御おん通とほり候。ワキなに何なにと山伏やまぶしの御通おんとほりあると申まうすか。心得こころえてある。のうのう客僧きやくそう達たらこれは關せきにて候。シテ承うけたまはり候。これは南都東大寺なんとうとうだいじ建立けんりふのために。國國くにくにへ客

僧そうを遣つかはされ候。北陸道ほくろくどうなほ此この客僧きやくそう承うけたまはつて罷まがり通とほり候。まづ勸すすめに御入おんいり候へ。ワキちか近頃ちかごろ殊しゆ勝しょうに候。勸すすめにはまゐらうするにて候さりながら。これは山伏やまぶし達たらに限かぎつてとめ申まうす關せきにて候。

シテささて其そのいはいれば候。ワキささん候ごらふより頼より朝義あさよし經御おんなか不和なかつにならせ給たまふにより。判官はんぐわん殿どのは奥秀おくひで衡ひらを頼たのみ給たまひ。十二人じふににんの作山伏つくりやまぶしとなつて。御下向おんげかうのよし其聞そのきこえ候あひだあひだ。國國くにくにに新關しんせきを立てい。山伏やまぶしを固かたく選えらみ申まうせとの御事おんことにて候。さる間あひだ此所このところなほ某それがし承うけたまはつて山伏やまぶしをとめ申まうし候。殊ことにこれば大勢おほぜい御座ござ候あひだ。一人いちにんも通とほし申まうすまじく候。シテ委細のさいり承うけたまはり候。それは作山伏つくりやまぶしをこそ止とめよと仰おほせ出いだされ候あひだひつらめ。よも眞まことの山伏やまぶしを止とめよと仰おほせられ候あひだまじ。狂言きやうげんいや昨日きのふも山伏やまぶしを三人さんにんまで斬きつづる上うへは。シテささて其斬そのきつたる山伏やまぶしは判官はんぐわん殿どのか。ワキああらむつかしや問答もんたふは無な益やく。一人いちにんも通とほし申まうすまじい上うへは候。シテささては我等われらをもこれにて誅ちゆうせられ候あひだは入いるな。ワキなかなかの事こと。ワキこ言語道斷ごんごたうだん。かゝる不祥ふしやうなる所ところへ來きかいつて候あひだものかな。此上このうへは力ちから及およばぬ事こと。さらば最期さいごの勤つとめをばじめて。尋常じんじやうに誅ちゆうせられうするにて候。皆みな皆みな近ちかう渡わたり候へ。ツレ承うけたまはり候。

シテ「いいでい最期の勤を始めん。それ山伏といつば。役の優婆塞の行儀を受け。ツレ「其身は不動明王の尊容を象り。シテ「兜巾といつば五智の寶冠なり。ツレ「十二因縁の髪をすゑて。戴き。シテ「九會慢茶羅の袴の篠懸。ツレ「胎藏黒色のはらきかけき。シテ「さて又八目の草鞋は。ツレ「八葉の蓮華を踏まへたり。シテ「出で入る息に阿吽の二字を稱へ。ツレ「即身即佛の山伏を。シテ「こゝにて討ちとめ給はん事。ツレ「明王の照覽計り難う。シテ「熊野権現の御割をあたらん事。ツレ「たらところに於いて。シテ「疑あるべからず。地「庵阿毘羅咄と數珠さらさらとおしもめば。ツレ「立所に於いて。シテ「承り候ひつるは。南都東大寺の勸進と仰せ候あひだ。定めてワキ「近頃殊勝に候。さきに承り候ひつるは。南都東大寺の勸進と仰せ候あひだ。定めて勸進帳の御座なき事は候まじ。勸進帳をあそばされ候へ。これにて聽聞申さうするにて候。シテ「何と勸進帳を讀めと候や。ワキ「なかなかの事。シテ「心得申して候。元より勸進帳はあらばこそ。笈の中より往來の巻物一卷取り出だし。勸進帳と名づけつ。またからかにこそ讀み上げけれ。それつらつら。ツレ「惟れば。大恩教主の秋の月は。涅槃の雲に隠れ。生死長夜の長き夢驚かすべき人もなし。こゝになかこる帝おはします。御名をば聖武皇帝

と名づけ奉り。最愛の婦人に別れ。戀慕やみがたく。涕泣眼に荒く。涙玉を貫く。思を善途にひるがへして鷹舎那佛を建立す。かほどの靈場の絶えなん事を悲みて。俊乗坊澄源諸國を勸進す。一紙半錢の奉財の輩は。此世にては無比の樂にはこり。當來にては數千蓮華の上に座せん。歸命稽首。敬つて白すと。天も響けと讀みあげたり。ワキ「關の人人肝を消し。地「恐をなして通しけり。恐をなして通しけり。ワキ「急いで御通り候へ。シテ「承り候。狂言「いかに申し上候。判官殿の御通り候。ワキ「いかにこれなる強力とまれとこそ。ツレ「嘘すは我が君をあやしむるは。一期の淨沈極りぬと。皆一同に立ち歸る。シテ「ああ暫く。あわてて事を仕損すな。やあ何とてあの強力は通らぬぞ。ワキ「あれは此方より止めて候。シテ「それは何とて御止め候ぞ。ワキ「あの強力が些と人に似たると申す者の候ほどに。さて止めて候よ。シテ「何と人が人に似たるとは。珍らしからぬ仰にて候。扱誰に似て候ぞ。ワキ「判官殿に似たると申す者の候ほどに。落居の間留めて候。シテ「や。言語道斷。判官殿に似申したる強力めは一期の思ひでな。腹立ちや日高は能登の國まで指さうすると思ひ

つるに。僅の笈負うて後にさがればこそ人も怪しむれ。惣じて此程。につくし憎しと思ひつるに。いで物見せてくれんとて。金剛杖をおつ取つてさんざんに打擲す。道れとこそ。や。笈に目を懸け給ふは。盗人さうな。地かたがたは何ゆゑに。何ゆゑに。かほど賤しき強力に。太刀刀ぬき給ふはめだれ顔のふるまひは。臆病の至りかと。十一人の山伏は。打刀抜きかけて。勇みかゝれる有様は。いかなる天覽鬼神も。恐れつべうで見えたる。リキ近頃誤りて候。はやはや御通り候へ。

シテ、訓「さきの關をばばや拔群に隔たりて候あひだ。此所に暫く御休みあらうするにて候。皆皆近う御参り候へ。いかに申し上げ候。扱も唯今は餘りに難義に候ひしほどに。ふしぎの働を仕り候事。誰これと申すに君の御運。盡きさせ給ふにより。今辨慶が杖にもあたらせ給ふと思へば。いよいよあさましうこそ候へ。義經「さてはあしくも心得ぬと存ず。いかに辨慶。さても唯今の氣轉更に凡慮よりなす業にあらず。唯天の御加護とこそ思へ。關の者ども我をあやしめ。生涯限ありつるところに。とかくの是非をばもんだはずして。唯眞の下人の如く。さんざんに打つて我

を扶くる。これ辨慶がはかりことに非ず。八幡の。地御託宣かと思へば忝くぞ覺ゆる。それ世は末世に及ぶといへども。日月は未だ地に落ち給はず。たとひいかなる方便なりとも。まさしき主君を打つ杖の。天罰にあたらぬことやあるべき。義經「げにや現在の果を見て過去未來を知ると云ふ事。今に知られて身の上に。憂き年月のきさらぎや。下の十日のけふの難を。遁れつるこそふしぎなれ。義經「唯さながらに十餘人。地夢の覺めたる心ちして。互に面を合せつ。泣くばかりなる有様かな。然るに義經。弓馬の家に生れきて。命を頼朝に奉り。戸を西海の浪に沈め。山野海岸に起きふしあかす武士の。鎧の袖枕。かたしく隙も波の上。或時は舟に浮み。風波に身を任せ。或時は山背の馬蹄も見えぬ雪のうちに。海少しある夕波の。立ちくる音や須磨明石の。とかく三年の程もなく。敵を亡しなびく世の。其忠勤もいたづらに。なりはつる此身の。そも何といへる因果ぞや。義經「げにや思ふ事。かなはればこそうき世なれと。地「知れどもさすが猶。思ひかへせば梓弓の。直なる人は苦みて譏。臣彌増に世にありて。遠達東南の雲を起し。西北の雪霜に責められ。埋るうき身をことわり給ふべきなるに。唯世には神も佛もましまさぬかや。怨めしの

うき世や。あら怨めしのうき世や。

ワキ、「いかに誰かある。狂言」御前に候。ワキ、「さても山伏達に聊爾を申して。餘りに面目もなく候ほどに。追つつき申し酒を一つ参らせうするにてあるぞ。汝はさきへ行きてとめ申し候へ。狂言」畏つて候。いかに申し候。さきには聊爾を申して餘りに面目もなく候とて。關守のこれまで酒を持たせて参られて候。「シテ」言語道斷の事。やがて御目に懸らうするにて候。「狂言シカク」

シテ、「調」げにげにこれも心得たり。人の情の盃に。うけて心を奪らんとや。これにつきても猶猶人に。露心なくれそ吳織。地、あやしめらるるな面面と。辨慶に諫められて。此山陰の一宿りに。さらりと同居して。所も山路の菊の酒を飲まうよ。シテ、面白や山水に。面白や山水に。盃を浮めては。流にひかる。曲水の。手まづ遮る袖ふれて。いざや舞を舞はうよ。もとより辨慶は三塔の遊僧。舞延年の時の和歌。これなる山水の落ちて。巖に響くこそ。地、鳴るは瀧の水。シテ、「調」たべ酔ひて候ほどに。先達御酌に参らうするにて候。ワキ、「さらばたべ候べし。とてもの事に先達一さし御舞ひ候へ。シテ、承り候」「此一句。詠、鳴るは瀧の水」「此一句昔はシテの詠なりしも、今はワキの。」「男」

シテ、「調」鳴るは瀧の水。地、日は照るとも。絶えずとうたり。絶えずとうたりとくとく立てや。たつか弓の心ゆるすな。關守の人人。暇申してさらばよとて。笈をおつとり肩にうちかけ。虎の尾を履み毒蛇の口を遁れたる心ちして。陸奥の國へぞ下りける。

八十八 東 北

古名 軒端梅 ワキ 和泉式部(前は女)

ワキ「(俗)三人」年立ち返る春なれや。年立ち返る春なれや。花の都に急がん。ワキ、「調」これは東國方より出でたる僧にて候。われ未だ都を見ず候ほどに。此春思ひ立ち都に上り候。進行、三人、「調」春立つや。霞の關を今朝越えて。霞の關を今朝越えて。はてはありけり武藏野を。分け暮らしつゝ、跡遠き。山又山の雲を経て。都の空も近づくや。旅までのどけかるらん。旅までのどけかるらん。ワキ、「調」急ぎ候ほどに。これははや都に著きて候。又これなる梅を見候へば。今を盛りと見えて候。いかさま名のなき事は候まじ。此あたりの人に尋ねばやと思ひ候。「狂言シカク」ワキ、「さては此梅は和泉式部と申し候ぞや。暫く眺めばやと思ひ候。」

シテ(女、詞)のうのうあれなる御僧。其梅を人に御尋ね候へば。何と教へ参らせて候ぞ。ワキ「さん候
 人に尋ねて候へば。和泉式部とこそ教へ候ひつれ。シテ「いやさやうには云ふべからず。梅の名は
 好文木。又は鶯宿梅などとこそ申すべけれ。知らぬ人の申せばとて用ぬ給ふべからず。此寺未
 だ上東門院の御時。和泉式部此梅を植ゑ置き。軒端の梅と名づけつゝ。目かれせず詠め給ひし
 となり。諸か程に妙なる花の縁に。御經をも讀誦し給は。逆縁の御利益ともなるべきなり。
 詞「これこそ和泉式部の植ゑ給ひし軒端の梅にて候へ。ワキ「さては和泉式部の植ゑ給ひし軒端の梅に
 て候ひけるぞや。又あの方丈は。和泉式部の御休所にて候か。シテ「なかなかのこと。和泉式部の臥
 床なりしを。作りもかへす其まゝにて。今に絶えせぬ眺ぞかし。ワキ「さもみやびたる御氣色。
 を残し置く形見とて。シテ「花も主を慕ふかと。年年色香も彌増に。ワキ「さもみやびたる御氣色。
 シテ「なほも昔を。ワキ「思ふかと。連「年月を古き軒端の梅の花。古き軒端の梅の花。主を知れば
 久方の。天ざる雪のなべて世に。聞えたる名殘かや。和泉式部の花心。
 地「強げにや古を。聞くにつけても思ひ出の。春や昔の春ならぬ。わが身ひとりぞ心なき。シテ「獨

とも。いさ白雪の古事を。誰に問はまし道芝の。露の世になけれども。此花に住むものを。地「そ
 も此花に住むぞとは。鳥總に散るか花鳥の。シテ「同じ道にと歸るさの。地「さきだつあとか。
 シテ「花の蔭に。地「休らふと見えしまゝに。われこそ梅の主よと。夕ぐれなるの花の蔭に。木隠れ
 て見えざりき。木隠れて見えずなりにけり。(中入)
 ワキ三人、詠「夜もすがら。軒端の梅の蔭に居て。軒端の梅の蔭に居て。花も妙なる法の道。迷はぬ月の
 夜とともに。此御經を讀誦する。此御經を讀誦する。
 後シテ(和泉式部)詠「あらありがたの御經やな。あらありがたの御經やな。唯今讀誦し給ふは譬喩品
 よのう。詞思ひ出でたり閻浮の有様。此寺未だ上東門院の御時。御堂の關白此門前を通り
 給ひしが。御車の内にて法華經の譬喩品を高らかに讀み給ひしを。式部此門の内にて聞き。門
 の外。法の車の音聞けば。われも火宅を。出でにけるかなと。かやうに詠みしこと。今のをりから
 思ひ出でられて候ぞや。ワキ「げにげに此歌は。和泉式部の詠歌ぞと。田舎までも聞き及びしなり。
 詞「さては詠歌の心の如く。火宅をば早や出で給へりや。シテ「詞「なかなかの事。火宅は出でぬさ

りながら。詠み置く歌舞の菩薩となりて。ワキ、「なほ此寺にすむ月の。シテ」出づるは火宅。ワキ、「今ぞ。シテ」すでに。地、「三界無安の内を去りて。三の車に法の道。すはや火宅の門を今ぞ。和泉式部は成等正覺を得るぞありがたき。」

地、「それれ和歌といつば。發心説法の妙文たり。たまたま後世に知らるゝ者は。たゞ和歌の友なりと。貫之もこれを書きたるなり。シテ」かるがゆゑに。天地を動かし鬼神を感ぜしむる事わざ。

地、「神明佛陀の冥感に至る。殊に時ある花の都。雲居の春の空までも。のどけき心を種として。天道にかなふ詠吟たり。所は九重の。東北の靈地にて。王城の鬼門を守りつゝ。惡魔を拂ふ雲

水の。水上は山陰の賀茂川や。末白川の波風も。いさぎよき響は常樂の縁をなすとかや。庭に

は。池水を湛へつゝ。鳥は宿す池中の樹。僧は敲く月下の門。出で入る人跡數數の。袖を連れ裳裾を染めて。色めく有様は。げにげに花の都なり。シテ、見佛聞法の數數。地、「順逆の縁はいやましに。日夜朝暮に懈らず。九夏三伏の夏たけて。秋來にけりと驚かす。洞底の松の風一聲の

秋を催して。上求菩提の機を見せ。池水に映る月影は。下化衆生の相を得たり。東北陰陽の時節もげにと知られたり。地、「春の夜の。春の夜の。シテ」春の夜の。闇はあやなし梅の花。地、「色こそ見えぬ。香やは隠るゝ香やは隠るゝ。香やは隠るる。シテ」げにや色にそみ。香にめでし昔を。地、「よしなや今更に。思ひ出づれば我ながらなつかしく。戀しき涙を遠近人にもらさんもはづかし。暇申さん。シテ」これまでぞ花は根に。地、「今はこれまでぞ花は根に。鳥は古巢に歸るぞとて。方丈の燈火を。火宅とやなほ人は見ん。こゝこそ花の臺に和泉式部が臥床よとて。方丈の室に入ると見えし夢は覺めにけり。見し夢は覺めて失せにけり。」

八十九 蟬丸

ワキ 逆 下 廻 丸

ワキ「(臣下)三人、定なき世のなかなかに。定なき世のなかなかに。うき事や頼なるらん。ワキ、これは延喜第四の御子。蟬丸の宮にておはします。ワキ三人げにや何事も報ありける浮世かな。前世の戒行いみじくて。今皇子とはなり給へども。襦袢のうちよりなどやらん。兩眼盲ひましまして。蒼天に月日の

光なく。闇夜に燈火暗うして。五更の雨も歇むことなし。ワキ明かし暮させ給ふ所に。帝いかなる
 叡慮やらん。三人ひそかに具足し奉り。逢坂山に捨て置き申し。御髪をおろし奉れとの。綸言
 出でてかへられば。御痛はしきは限なけれども。勅証なれば力なく。足弱車忍路を。雲居
 のよそに廻らして。しのめ空も名残の都路を。空も名残の都路を。けふ出で初めて又いつ
 か。歸らんこともかた糸の。寄る邊なき行くへ。さなきだに世の中は。浮木の龜の年を経て。盲龜
 の間路たどりゆく。迷の雲も立ちのぼる。逢坂山に著きにけり。逢坂山に著きにけり。ワキ、
 聞「いかに清貫。ワキ、御前に候。ワキ、さてわれをば此山に捨て置くべきか。ワキ、さん候宣言にて
 候ほどに。これ迄は御供申して候へども。いづくに捨て置き申すべきやらん。誰さるにても我が
 君は。堯舜より此方。國を治め民を憐む御事なるに。かやうの叡慮は何と申したる御事やらん。
 かゝる思もよらぬ事は候はじ。ワキ、聞「あら愚の清貫がいひことやな。もとより盲目の身と生る
 る事。前世の戒行。拙きゆゑなり。誰されば父帝も。山野に捨てさせ給ふ事。御情なきには
 似たれども。此世にて過去の業障をばたし。後の世を助けんと。御ばかりこと。これこそ眞の親

の慈悲よ。あら歎くまじの勅証やな。ワキ、聞「宣言にて候ほどに。御髪をおろし奉り候。
 蟬丸「これは何といひたる事ぞ。ワキ、これは御出家とてめでたき御事にて渡らせ給ひ候。蟬丸「げに
 や。こうくわんもとゐなきり。なかばだんに枕す（此一句拾遺抄は「げにや后無常を切り、半寝に」と。もろこしの
 西施が申しけるも。かやうの姿にてありけるぞや。ワキ、この御ありさまにては。なかなか盗人の恐
 もあるべければ。御衣を賜はつて。裳といふものを参らせ上げ候。蟬丸「これは雨による田蓑の鳥
 と詠み置きつる蓑といふものか。ワキ、聞「又雨露の御爲なれば。同じく笠を参らす。蟬丸「これは
 御侍御笠と申せと詠み置きつる笠といふものや。ワキ、聞「又此杖は御道しるべ。御手に持た
 せ給ふべし。蟬丸「げにげにこれもつくからに。千歳の坂をも越えなんと。かの遍昭が詠みし杖か。
 ワキ「それは千歳の坂行く杖。蟬丸「こゝは所も逢坂山の。ワキ、關の戸さしの蓑屋の竹の。蟬丸「杖
 柱とも頼みつる。ワキ「父帝には。蟬丸「捨てられて。地、かゝる浮世に逢坂の。知るも知らぬも
 これ見よや。延喜の皇子のなり行くはてぞ悲しき。行人征馬の數數。上り下りの旅衣。袖をし
 ぼりて村雨のふり捨てがたき名残かな。ふり捨てがたき名残かな。さりとはいつた限に有明の。

つきの涙を押へつつ。はや歸るきになりぬれば。皇子は後に唯ひとり。御身に添ふものとは。琵琶を抱きて杖を持ち。伏し轉びてぞ泣き給ふ。伏しまろびてぞ泣き給ふ。

シテ逆巻の巻。これは延喜第三の皇子。逆巻とはわが事なり。われ皇子とは生るれども。いつの因果のゆゑやらん。調心よりより狂亂して。藤邊土遠郷の狂人となつて。翠の髪は空さまに生ひ

のぼつて撫づれども下らず。調いかにあれなる童どもは何を笑ふぞ。何わが髪逆さまなるがな。かしいとや。げに逆さまなる事はかしいよな。驚きてはわが髪よりも。汝等が身にてわれを笑

ふこそ逆さまなれ。調面白し面白し。これらは皆人間。目前の境界なり。それ花の種は地に埋もつて干林の梢に登り。月の影は天にかゝつて萬水の底に沈む。これらなば皆何れか。順と見逆なり

といはん。誰われは皇子なれども。庶人にくだり。髪は身上より生ひのぼつて星霜を戴く。これ皆順逆の二つなり。おもしろや柳の髪をも風は梳るに。地風にも解かれず。シテ手にもわ

けられず。地かなぐり捨つるみての袂。シテ拔頭の舞かや淺ましや。地花の都を立ち出でて。花の都を立ち立てて。憂き音になく鴨川や、未白河をうち渡り。粟田口にも着きしかば。今は

誰をか松阪や。關のこなたと思ひしに。後になるや音羽山の。名殘惜しの都や。松虫鈴虫蟋蟀の。鳴くや夕陰の山科の里人も咎むなよ。狂女なれど心は清瀧川と知るべし。シテ逢坂の。關の清水に影見えて。地今やひくらん望月の。駒の歩も近づくか。水も走井の影見れば。われながら淺ましや。髪は荆棘を戴き。黛も亂れ黒みて。げに逆巻の影映る。水を鏡と夕波の。うつつなのわが姿や。

蟬丸、第一第二の絃は索索として秋の風。松を拂つて疎韻落つ。第三第四の宮は。われ蟬丸が調も四つの。なりからなりける村雨かな。あら心凄の夜すがらやな。世の中は。とにもかくにもありぬべし。宮も葉屋もはてしなれば。シテふしぎやなこれなる葉屋の内よりも。撥音氣高き琵琶の音聞ゆ。そもこれほどの賤が屋にも。かゝる調のありけるよと。思ふにつけてなどやらん。世に懐かしきこゝちして。葉屋の雨の足音もせで。ひそかに立ち寄り聞き居たり。蟬丸、誰そや此葉屋の外面に音するは。此程をりなり訪はれつる。博雅の三位にてましますか。シテ、調近つき聲をよくよく聞けば。弟の宮の聲なりけり。誰のう逆巻こそ参りたれ。蟬丸は内にましますか。蟬丸、何

逆髪とは姉宮かと。驚き葉屋の戸をあくれば。シテ「さも淺ましき御有様。蟬丸互に手に手を取
 りかはし。シテ「弟の宮か。蟬丸「姉宮かと。地「ともに御名を木綿付の。鳥も音をなく逢坂の。せ
 きあへぬ御涙。たがひに袖やしほるらん。

地「それ梅檀は双葉より香ばしといへり。ましてや一樹の宿りとして。風たちばなの香をとめて。
 花も連なる枝とかや。シテ「遠くは淨藏浄眼早離速離。近くは又應神天皇の御子。地「難波の
 皇子宇治の尊。互に即位謙讓の御志。皆これ連理の情とかや。シテ「さりながらこゝは兄
 弟の宿りとも。地「思はざりしに葉屋の内の。一曲なくはかくぞともいかでしらの四つの緒に。
 シテ「ひかれてこゝに。寄る邊の水の。地「淺からざりし契かな。世は末世に及ぶとも。日月は
 地に落ちぬ習とこそ思ひしに。われらいかなれば。皇子を出でてかくばかり。人臣にだに交らで。
 雲居の空をも迷ひ來て。都鄙遠郷の狂人路頭山林の賤となつて。邊土旅人の憐みを頼むばか
 りなり。さるにてもきのふまでは。玉樓金殿の床を磨きて。玉衣の袖ひきかへて。けふは又。か
 かる所の臥床とて。竹の柱に竹の垣。軒も扉も疎なる。葉屋の床に葉の窓。敷く物とても葉

筵。これぞ古の錦の蔭なるべし。蟬丸「たまたまこと訪ふものとは。地「嶺に木傳ふ猿の聲。
 袖を濡す村雨の。音にたぐへて琵琶の音を。弾きならし弾きならし。我が音をもなく涙の。雨だ
 にも音せぬ葉屋の軒の隙隙に。時時月は漏りながら。目に見る事のかなはれば。月にも疎く雨を
 だに。聞かぬ葉屋の起臥を。思ひやられて痛はしや。シテ「これまでなりやいつまでも。名残は更に
 盡きすまじ。暇申して蟬丸。蟬丸「一樹の蔭の宿りとて。それだにあるにましてげに。兄弟の宮
 の御別。とまるを思ひやり給へ。シテ「げに痛はしや我ながら。行くは慰む方もあり。留るをさ
 こそと夕雲の。立ちやすらひて泣き居たり。蟬丸「なくや關路の夕鳥。うかれ心はむば玉の。
 シテ「わが黒髪のおかで行く。蟬丸「別路とめよあふ坂の。シテ「關の杉村過ぎ行けば。蟬丸「人聲遠く
 なるまゝに。シテ「葉屋の軒に。蟬丸「たまたみて。地「互にさらば常には訪はせ給へと。かすか
 に聲のするほど。聞き送り顧み置きて。泣く泣く別れおはします。泣く泣く別れおはします。

九十

猩猩 猩猩

ワキ 高風

ワキ(高風)「これは唐土かれ金山の麓。楊子(註訓往來には「羊」の里にかうふう)の里にかうふう(「かうふう」は「高風」を誤記したるふべき註訓往來の一節に「周の國の傍半陸と云ふ所に高風と云ふ者始めて市を立て酒を賣る云々」と申す民にて候。さてもわれ親にあり。註訓往來に「高風」高風字體相似たるを以て「かうふう」と誤り傳へたるものならん。)

孝あるにより。ある夜不思議の夢を見る。楊子の市に出でて酒を賣るならば。富貴の身となるべしと。教のまゝになす業の。臨時去り時來りけるにや。次第次第に富貴の身となりて候。又こゝに不思議なる事の候。市毎に來り酒を飲む者の候が。盃の數は重なれども。面色は更に變らず候ほどに。餘りに不審に存じ。名を尋ねて候へば。海中に棲む猩猩とかや申し候ほどに今日は溇陽の江に出でて。かの猩猩を待たばやと存じ候。溇陽の江のほとりにて。溇陽の江のほとりにて。菊をたたへて夜もすがら。月の前にも友待つや。又傾くる盃の。影をたたへて待ち居たり。影をたたへて待ち居たり。地「老いせぬや。老いせぬや。藥の名をも菊の水。盃も淨み出でて友に逢ふぞ嬉しき。此友に逢ふぞうれしき。

九十一 白 髭

前ツレ 白鬚明神(前は漁翁) ワキ 袖使

シテ(保々)「御酒と聞く。地「御酒と聞く。名もことわりや秋風の。シテ「吹けども吹けども。地「更に身には寒からじ。シテ「ことわりや白菊の。地「ことわりや白菊の。著せ綿を温めて。酒をいざや酌まうよ。シテ「客人も御覽すらん。地「月星は隈もなき。シテ「所は溇陽の。地「江の内の酒盛。シテ「猩猩舞を舞はうよ。地「蘆の葉の笛を吹き。浪の鼓どうと打ち。シテ「聲澄み渡る浦風の。地「秋の調や残るらん。(中ノ舞)

シテ「ありがたや御身心すなほなるにより。此壺に泉をたしへ。唯今返し興ふるなり。よもつきじ。地「よもつきじ。萬代までの竹の葉の酒。酌めども盡さず。飲めども變らぬ秋の夜の盃。影も傾く入江に並たつ。足もとはよろよると。醉に臥したる枕の夢の。さむると思へば泉は其まま。盡させぬ宿こそめでたけれ。

ワキ(袖使)三人「君と神との道すぐに。君と神との道すぐに。治まる國ぞ久しき。ワキ「御「そもそもこれ

は當今に仕へ奉る臣下なり。扱も江州白髭の明神は。靈神にて御座候。君此程不思議の御靈夢の御告ましますにより。急ぎ參詣申せとの宣旨を秘り。唯今白髭の明神に。勅使に參詣仕候。道行三人、九重の空も長閑けき春の色。空も長閑けき春の色。霞む行くへは花園の。志賀の山越うち過ぎて。眞野の入江の道すがら。鳩の浦風さえかへり。立ちよる波も白髭の。宮居に早く著きにけり。宮居に早く著きけり。

シテ(漁翁)、ツレ(漁夫)、釣の營いつまでか。隙も波間に明け暮れん。ツレ、棹さしなる、海士小舟。シテ、ツレ「渡りかかれたる浮世かな。シテ、風歸帆を送る萬里の程。江天渺渺として水光平かなり。シテ、ツレ「舟子は解くこれ明朝の雨。面白や頃しも今は春の空。霞の衣ほころびて。峯白妙に咲く花の。嵐も匂ふ日影かな。賤しき海士の心まで。春こそ長閑けかりけれ。花誘ふ比良の山風吹きにけり。比良の山風吹きにけり。漕ぎ行く舟の跡見ゆる。鳩の浦曲も遙遙と。霞み渡りて天つ雁歸る越路の山までも。眺めにつづく氣色かな。眺めにつづく氣色かな。リキ、調「いかにこれなる翁。汝は此浦の者か。シテ「さん候。此浦の漁夫にて候が。朝な朝な沖に出で釣を垂れ候。まづ御

姿を見奉れば。此あたりにては見馴れ申さぬ御事なり。もし都よりの御參詣にて御座候か。ワキ「げによく見てあるものかな。これは當今に仕へ奉る臣下なるが。君此程不思議の御靈夢の御告ましますにより。勅使に參詣申して候。シテ「ありがたや君としてだにかほどまで。敬ひ給ふ御神の。御威光の程こそありがたけれ。シテ、ツレ「賤しき海士の此身までも。すぐなる御代に近江の海の。深き惠を頼むなり。ワキ「げに誰とても君を仰ぎ。神を敬ふ心あらば。などが惠にあづからざらん。シテ「とさらさら。リキ「所から。地「瑞垣の年も經にけり白髭の。年も經にけり白髭の。神の誓は今とても。變らざりけり。げにありがたや頼もしや。われは心も波小舟。釣の翁の身ながらも。安くたのしむ此時に。生れあふ身はありがたや。生れあふ身はありがたや。それ此國のおこり家家に傳はる所。おのおの別にして。其説まちまちなりといへども。暫く歸する所の一義によらば。天地既に分つて後。第九の滅劫人壽二萬歳の時。シテ「迦葉世尊西天に出世し給ふ時。地大聖釋尊其授記を得て。都率天に住し給ひしが。シテ「われは相成道の後。遺教流布の地いづれの所にかあるべきとて。地「此南瞻部州を悪く飛行して御覽じけるに。漫漫

とある大海の上に。一切衆生悉有佛性如來。常住無有變易の波の聲。一葉の蘆に凝り固まつて。一つの島となる。今の大宮權現の波止土濃なり。其後人壽百歳の時。悉達と生れ給ひて。八十年の春の頃。頭北面 西右脇 臥拔提の波と消え給ふ。されども佛は。常住不滅法界の妙體なれば。昔蘆の葉の島となりし中つ國を御覽するに。時は鶴草葺不合の尊の御代なれば。佛法の名字を人知らず。こゝに比叡山の麓。き、波や志賀の浦のほとりに。釣を垂る。老翁あり。釋尊彼に向つて。翁もし此地の主たらば。此山をわれに與へよ。佛法結界の地となすべしと宣へば。翁答へて申すやう。われ人壽六千歳の始より。此山の主として。此湖の七度まで蘆原になりしなも。正に見たりし翁なり。但し此地結界となるならば。釣する所失せぬべしと深く惜み申せば。釋尊力なく。今は寂光土に歸らんとし給へば。シテ時に東方より。淨瑠璃世界の主薬師。忽然と出て給ひて。善きかなや釋尊。この地に佛法を弘め給はん事よ。われ人壽二萬歳の昔より。此所の主たれど。老翁いまだわれを知らず。何ぞ此山を。惜み申すべき。はや開闢し給へ。われも此山の主となつて。共に後五百歳の佛法を守るべしと。固く誓約し給ひて。

二佛東西に去り給ふ。其時の翁も。今の白髭の神とかや。ワキ割ふしぎなりとよかほどまで。妙なる神祕を語る。翁の。其名はいかにおぼつかな。シテ今は何をかついむべき。其いにしへも釣を垂れし翁なるが。勅使を慰め申さんとて。唯今こゝに來りたり。ことさら今宵は天燈龍燈。神前に來現の時節なれば。蓋暫く待たせ給ふべしと。地夕の雲も立ち騒ぎ。夕の雲も立ち騒ぎ。汀に落ち來る風の音。老の波も寄り來る。釣の翁と見えつるが。われ白髭の神ぞとて。玉の扉を押し開き。社壇に入らせ給ひけり。社壇に入らせ給ひけり。(申入)
 地「八少女の。返す袂の色色に。宜禰が鼓も聲澄みて。神さび渡れるをりからかな。
 後ジテ(白髭神)「神は人の敬ふによつて威を増す。ましてやこれは勅の使。仰ぎても猶餘りあり。地「ふしぎや社壇の内よりも。ふしぎや社壇の内よりも。眞に妙なる御聲を出だし。扉もおのづから。朱の玉垣かゝりやき渡る。白髭の神の御姿現れたり。ワキ、あらありがたの御事や。かゝる奇特に逢ふことも。唯これ君の御蔭ぞと。感涙袖を濕せり。シテいざいざさらば夜もすがら。舞樂の曲を奏しつゝ。勅使を慰め申さんと。地「神樂催馬樂とりどりに。神樂催馬樂とりどりに。